

東方陰陽録～The medium disappeared in fantasy～

Closterium

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は千年前、平安の世に陰陽師と呼ばれる者たちが現れた。

彼らは占いによって人々を導き、世に蔓延る魑魅魍魎を呪術によって退けたという。

その中に一人、未来を読み、森羅万象をも操る事ができたとされる伝説の陰陽師がいた。

現代の日本。高校生、土御門永一はうんざりしていた。

物事を全て科学で証明し、それ以外を否定するこの世界、そして自分の見えている物を全否定するこの世界に…

「あーあ、ご先祖様の世界ならなあ」

そんなある日、彼は意図せず幻想郷への一步を踏み出してしまったのだった。

※注意事項

● 作者は原作者

● この作品は、東方Projectの設定の隙に付け込んだ作品となっておりません。

● 作者の考察ミス、矛盾etcがある可能性があります。その時は寝下座して謝罪します。

● 作者の妄想等が含まれています。

● 作者は霊夢と紫が好き。

目次

Episode 0	紫の咲く木の下で	1
幻想入り編		
第一話	非常識を見る人	15
第二話	鬼ごっこ	22
第三話	不思議の国の	29
第四話	八雲立つ	36
第五話	模方《もほう》	45
第六話	式神	53
第七話	天衣無縫の武神	62
第八話	町人、土御門兄妹	75
第X話	Time	93
里の日常編		
第九話	人里に混ざる妖	100
第十話	悪戯、少々の絶対零度を添えて（前編）	120
第十一話	悪戯、少々の絶対零度を添えて（中編）	130
第十二話	悪戯、少々の絶対零度を添えて（後編）	141
第十三話	風化した最先端の道具	165
第十四話	太刀、切れぬ縁（前編）	186

Episode 0 紫の咲く木の下で

——無縁塚

晩夏の無縁塚。木々が少しずつ鮮やかな衣替えをする中で、一際大きく構えるその紫桜は季節外れに満開の桜を咲かせる。その美しさと言えば、華美な竜宮をも彷彿とさせながらも静かで幽玄にその地に根を下ろしている。

「式たちが騒がしいから来てみれば………。早起きね……。それとも寝坊しすぎたのかしら？」

妖怪の賢者、八雲紫が一本の紫桜の前に降り立つ。彼女はその幹を一度撫で下ろすとクスツと小さく無邪気な笑みを浮かべた。

「貴方を見ていると嫌でも思い出してしまいわ。私と……貴方の事を……。」「

冷たい風が紫の花びらを巻き上げながら吹く。しかしその風が無性に暖かく感じるのは何故であろうか。

「ああ、恨めしいわ……。貴方はいつまで私を縛るの？常泰。」

紫の脳裏に想起される。幻想となった過去の話が。

時は平安。

後に幻想郷と呼ばれる土地が陸続きで、妖怪の賢者が只の高位妖怪だった時に遡る。

「彼女」は孤独を好んだ。好まざるを得なかった。生まれ持った力は強大さが故に人妖問わず遠ざけ、来る者も拒んだ。人は彼女を「恐怖」と呼んだ。何もせずとも生き物が恐れ慄く度に彼女ははつきりと、鮮明な形を作り出し、力が溢れた。

ある人は彼女を皮肉のように書物にこう記した。「最も妖怪らしい妖怪」と。

彼女ほど人間臭い妖怪もいなかったのかもしれないのに。

日が昇り、沈むだけの日常。変わり映えのない世界。退屈ね。そろそろ「消えどき」なのかもしれない。

彼女は居城を誰の目にも触れることのない山の頂に移した。

そんなある日、突然人間の気配を感じた。

だがここは木すら生えない秘境。こんな場所を訪れるような人間など只の物好きではない。彼女は久々の高揚感と好奇心に思わずその気配を追っていた。

こんな所にいる人間は強いに決まっているわ。面白い、からかつてやろう。そしてあわよくば私を・・・

気配の先には思ったとおり若い人間の男がいた。その青年は並外れた靈力をビリビリと放っている。見込み通り、かなりの手練だろう。しかし人間は頭から血を流しかなり衰弱している。

彼女は青年に急いで駆け寄った。生命力がどんどん失われていく。

彼女からすればここで所で死なれるわけにはいかなかった。

青年は薄れゆく意識で彼女の目を見ると顔を強張らせ呟いた。

「こんなときに妖怪に・・・。私もこれまでですか・・・。」

青年は彼女からふらふらとした足取りで逃げ出したが、そのまま倒れこんでしまった。

「笑わせないで。あんたはここでは死なないわ。」

彼女は急いで彼を自分の邸へ運び手当てをした。怪我は軽かったが青年はなかなか目を覚まさなかった。

いつの間にか日は沈み、辺りは静寂に包まれた。

今まで、彼女を見た人間や妖怪は恐怖で断末魔を上げ、死ぬ者すらいた。しかし青年は瀕死状態なのにも関わらず彼女が妖怪だと気づきながら一切の恐怖を感じていなかった。驚きもあったが、彼女にはとても新鮮な気分だった。そしてまたあの高揚感が襲う。自然と笑みがこぼれた。

ああ・・・やっど・・・——

「——私を殺せる者が現れたのね!!!」

彼女の口から無意識に言葉が漏れた。

彼女は、青年の額に手をかざした。

「起きなさい。さあ、助けただけの礼はしてもらおうよ！」

そのとき、一度「バキン」と何かが壊れるような音がした。それに続き、音は青年の続けざまに全身から鳴り出した。

その音に驚き飛び起きた青年は眼前の妖怪を睨みつけると、持っていた大袋を引き裂き自らの周りに札を纏わせた。

青年の身体から湧く強い霊力。それは一瞬で邸全体にまで広がった。

彼女はニヤリと笑うと青年に話かけた。

「あら、気がついたのね。私の目覚めの術は消されちゃったみたいだけど、起きたし問題ないわ。」

「先ほどの妖怪ですね。貴女程の力の持ち主なら私手製の護符といえ木端微塵になるでしょうね。」

「あんたが余りにも起きないから起こしてやろうと思ったのよ。それに、あんたの命を救ったのは私。礼の一つくらいは言って欲しいものね。」

青年は怪我が完全に治癒している事に気づいた。

「怪我の事は礼を言います。しかし、貴女に私を救う理由は無い。それに私は貴女にとつて格好の獲物でもある。」

体に付いている紙屑をはたきながら問う。青年は最初の鋭い視線から一変して穏やかな表情であるが、霊力の勢いは変わらない。

「あんたに少し興味を持ったのよ。生かしておくだけの、ね。」

「そうですね。助けて頂いたのにお礼の一つも出来ないのは申し訳なく思っていたのですよ。」

「妖怪相手に律儀な人間ね。じゃあ一つ。あんた、私が怖くないの？」

青年は少し考えるような素振りを見せた。

「私は・・・死よりも恐ろしい体験をしましたので。少し麻痺しているのかもしれないね。」

その時、一瞬だったが霊力がピリリと鋭くなった。

「そう・・・。じゃあ最期に一つ・・・」

彼女は青年の背後へ回り耳元で囁いた。

「活きの良い人間の味を教えなさい。おまけで教えてあげる。あなたに恐怖《わたし》というものを！」

その瞬間、漂っていた霊力が一瞬のうちに消えた。

視界に舞う無数の札。背後からの眼光。青年の動きは神馬の如く邸内を駆け回る。

「予想に反して一旦は逃げるのね。でも邸の中にいる限りは私の目からは逃れられないわ。」

不敵な笑みと共に邸の闇に犇めき合うように現れる夥しい数の眼。まさに恐怖の具現という言葉に相応しい。

「——見つけた。」

眼が青年の姿をはつきりと捉えた。彼の動きはもう彼女の手の内から逃れることはできない。彼が廊下を曲がった先には彼女の姿があった。

「先回り。想定内です。」

「フッフ、私を前にしてまだ余裕とはね。」

彼女は笑みを浮かべ、青年を指差してニヤリと怪しい笑みを浮かべた。

同時に全ての眼が青年をぎよろりと見ると、彼に焦点を合わせた。

——魔眼『ラプラスの魔』——

眼より放たれる閃光が矢の如く青年目掛けて射られた。青年は印を結びながらまた邸を駆け巡った。邸中の眼から放たれる閃光は床の板張りや柱を貫きながら容赦なく彼を撃つ。

その時、青年は捲れた板張りに足を取られて中庭に放り出された。平らな庭に八方からの視線。生者にすら死を想起させる絶対的恐怖であった。

彼女はその様子を縁側から眺めていた。

「残念ね。たかが鬼ごっこでももつと楽しませて欲しかったわ。」

彼女は残念そうに指で空を切る。瞬間、その一撃は青年の身体を吹き飛ばした。穏やかだった庭は一瞬にして荒地地へと変わり果てた。

彼女は少し残念そうにその惨状へと向かった。しかしそこに青年の死体はなかった。散切れた紙切れが散らばる。

その時、その紙切れが靈力を纏い鎖に形を変え、彼女に纏わりついた。彼女はとっさに鎖を振り払うが、青年は一瞬の隙も与えなかった。

四方に札が配置された。背後から現れた青年に気づいたとき、初めて眼が全て潰されていた事に気づいた。

——陰符『封魔陣』——

四方八方から更に強固な鎖が飛び出し彼女を固く縛る。

周りを見渡すと、それ以外にもまだ発動していない封印術が数え切れない程、彼女中心に施されていた。

「勝負は有り・・・ね。私の負けよ。止めを刺しなさい。」

完全に不意を突かれ、策に嵌り、清々しいほどに完膚無きまでに倒された。最期に面白い物が見れて、彼女には最早悔いはなかった。

「殺すつもりはありません。」
「？」

彼女には青年の言った意味が解らなかった。突然襲い掛かり、本気で殺そうとした妖怪相手にこんな言葉を放つ神経が。そんな変わり者相手に彼女は笑うしかなかった。

「フッフ・・・あなたの言葉は理解に苦しむわ。」

「そうでしょうか？私には貴方が何故、私を殺そうとしなかったのかわかりません。最初に私の背後を取った時、貴女は私を殺せたくは。他にも、妖術だけを頼りにして貴女はずっと縁側にくつろいでいた点もいただけませんね。」

「たかが人間ごときに本気を出そうなんて思わないわ。」

「そうですね。しかし私には貴女がわざと隙を作っているようにしか思えません。まるで・・・」

「殺される事を望んでいる、とでも言いたい訳？」

青年はそれに対するの反論の言葉は何も返さなかったし、彼女の様子から見て返す必要も無さそうだった。

「馬鹿馬鹿しい。私も舐められたものね。人間風情に倒される？上等じゃない、こんな術の千や二千、軽く粉碎してあげるわ！」

「・・・私には、全ての靈力の動きが見えるのです。確かに貴女の妖力

量なら、貴方を縛っている封印程度なら容易に壊せるでしょう。ですが、まだ動かしていない術はどうでしょう。私の目が確かなら貴女の最大妖力を押さえる以上の効力があります。そして、貴女に抵抗の意思が無いこともわかっています。」

彼女は何も言えなかった。どうやら相手の方が一枚上手だったようだ。まさか戦闘を通して考えを悟られるなど夢にも思わないだろう。

「・・・そうよ。あなたの言うとおりよ。で、私が無抵抗な事がわかった所で何の意味があるの？優越感に浸りたいのなら好きにすればいいわ。」

「良ければ一つ、私に話して頂けませんか？」

「・・・は？」

「貴女に少し興味が湧いたのです。どうして今までの行動に至ったのか。」

そう言うと、青年は術から彼女を開放した。

青年の理解不能な言葉に呆れを超えて何とも言えない妙な気分になった。普通なら初対面の人間に話す義理などないのだから黙っていればいいのだが、その時の彼女は不思議と、滅多に動かすことのない口が不気味なほどに軽快に動いたのだった。

自分の話に耳を傾け相槌を打つ。手段と用途しか知らなかったはずの会話。面白さは愚か笑う所すら一切ない話だったが、彼女には羽ばたく鳥になったかのような開放感と新鮮さを感じ楽しさすら覚えていた。

大方話すことが無くなる頃にはもう月が随分と高い位置まで昇っていた。

.....

「あなたも物好きね。妖怪の昔話に興味を持つなんて。」

青年は空の星を仰ぐように見ながらぼつりと問いかけに応えた。

「貴女と初めて話したとき、何故か親近感を感じたのです。思ったとおり、昔の私と貴女はとても似ていた。私もずっと孤独だったので。期待もされなければさせるだけの力も無かった。物心が付いた

頃から何の為に産まれたのかが解りませんでした。」

「種族は違えどお互い様って訳ね。」

「私の苦しみは今、生きる力に変わっています。しかし、貴女はそうではない。貴女の苦しみは自分の魂を蝕んでいる。」

「……………」

「でも貴女の苦は私の力で取り除けるかもしれません。」

「……………面白い戯言とでも受け取っておくわ。」

彼女の返事には「氣」の字の一角も無かった。

「信じていないようですね。貴女の言う『恐怖』は体質に近いもののように見えます。それを押さえれば良いのですから。」

「夢みたいな事を言うのね。じゃあ聞くけど、あんたは人間から五感を奪えるの？それと同じよ。」

「はい。確かに私に人間から五感を奪う力はありません。ですが、『鮮明ではつきりした』妖力を持つ貴女が相手なら可能です。」

「あんたの言うことは理解に苦しむわ。ならやってみなさい。」

彼女は半ば投げやりに言い放ったつもりだったが、対する青年は一言「わかりました」と呟くと目の色を変えて印を結び瞑想を始めた。

一帯に撒かれた札が彼の近くから順々にひらひらと舞い始める。最初はゆつくりと漂っていた札だったが、次第に動きが速く、鋭くなり、

最後には彼女中心に規則正しい形で地面に落ちた。

「これから、貴女の『闇』を封印します。かなり手荒になりますから、しばしの間我慢してください。」

青年が指で空を切ると札が輝き出した。凄まじい霊力量が循環する。それを目視した時には彼女の体は地面と平行になる事を余儀なくされていた。

青年は一度深呼吸をすると、懐から九枚の護符を取り出し術を唱えた。

「臨み、闘う兵者たちよ。皆、陣を構え我を護り給え!!前に在りし我を撃つ邪を切り裂き給え!!」

その声に合わせて、護符は一枚ずつ青年を軸にして回り始めた。そして、彼は彼女の額に指を当てた。

「さて、お手並拝見させて頂きますよ……。八雲立つ闇！」
バチッ

青年が霊力を流した瞬間、身体の護符の数枚が破れた。

「!!!」

青年はまず背中中の痛みを感じ、次に自分が家内にまで吹き飛ばされていた事に気付いた。滅茶苦茶になった壁や襖。更には護符と陣を組む札が全て吹き飛び、その残骸は枯葉の如く朽ちた。

遠目に見える彼女がゆらりと起き上がる。そこだけ空間が湾曲し、邸全体をどす黒い妖力が空間を支配した。

「参りましたね……。結界が、ここうも簡単に……。」

彼女からどす黒い闇がどろりと沸いてきた。もはや先程まで話していた妖怪の面影など無かった。暗い。闇より暗い闇が渦を巻く。その闇は吸いつけられるように彼女にまとわりついた。

それにも怯まず青年は庭先の彼女の前に躍り出た。彼女の目がぎよろりと青年を見るなり不気味なほど満面の笑みを浮かべた。

「ウフフフ……。死ななかつた。しぶとい。」

「貴女が『闇』ですね。貴女は少し力を持ちすぎた。突然ですが、貴女を在るべき大ききさまで抑え込みます。」

「あと少し……。この体、私のもの。」

「いいえ、表が消えれば貴女も道連れです。残念ですが、貴女の思惑通りにはさせません。」

「ウ……。ウウウ……。人間。邪魔だ……。殺す!!!」

彼女が纏う闇が鈍い音を出しながら一点に集中した。

「ふ……。ふふ、あはははは……。」

不気味に笑い、無表情になった。

彼女が手をかざす。同時に黒い光線が空を切る。青年の背後の壁が大破した。

「これは予想以上に規格外ですね……。」

そう言うとき青年は腰に括り付けていた袋から玉を取り出した。玉には隙間なく札が貼られ、異様な空気を放っている。

「これを使うことになるとは……。どうか消えないで下さい……。」

青年が玉に触れると一度破音を出した後、札が破れ、ひらひらと剥がれていく。札が破れた箇所から玉の模様が見えた。紅白の陰陽太極。鮮血のような紅が青年の手の内で美しく光り輝く。

「秘玉よ目覚めよ！我が魂を喰らい、力を貸し給え！」

その時、秘玉は青年の手から離れ、縦横無尽に動き出した。

第二波、黒い光線は青年を的確に狙う。が、その光は青年の目の前で屈折して玉に集まった。

「——界!!!」

青年を中心に光の結界が現れ、広い邸を全て包みこむほど大きく広がった。邸に広がる彼女の禍々しい力が一瞬にして彼の霊力にかき消された。青年が印を結ぶと、彼の身体は一瞬にして彼女の目の前へと移動した。

秘玉がまた輝く。

—— 霊撃 ——

青年を中心に霊力が爆裂した。彼女の体は塵の如く舞う。零距离からの破壊力は凄まじいものだった。

しかし……

「殺す……殺す殺す殺す殺す!!!」

彼女の憎悪に満ちた目はしつかりと青年を捉えていた。八方からの視線、青年の立つ世界の至る所から。そして、彼女の周りに巨大などす黒い眼が無数に現れた。邸に溢れていた妖力の全てが彼女に戻り、彼女の力が一点に集まるのを見た。

「貴女が『闇』を歩くのもこれで最後です。もう闇を見るのは終わりにしましょう。お互いに……」

青年は腕を天に掲げ、印を結んだ。

青年の霊力が霧のように漂い始めた。霊力には最初のような鋭さは無く、優しく、力強かった。

忙しく動いていた秘玉は青年の腕の先でぴたりと止まった。そして眩しい輝きを放ち、膨大な霊力が巨大な光の玉を作り出した。

—— 博霊式封印術・夢想封印 ——

第三波、今までのものとはくらべものにならない妖力量の光線が青年を襲う。しかし光の玉はそれを圧倒的に凌駕する力で全てを飲み込んだ。眼は青年の靈力に包まれると、まるで憎悪の念を忘れたかのように安らかに閉じ、やがて消えていった。

月光に照らされる邸、改め廃屋の床。彼女は目を覚ました。近くには紅白の玉が力なく転がっている。

「目覚めましたか。気分はどうですか？」

彼女は放心している。目線の先にはボロ切れと比喻するに相応しい姿の青年がいた。

「気分・・・まあ、今のあんたよりはマシね。」

そう言われると青年は埃まみれの着物を叩いてみせた。

「まず、事後報告といえますか。私は貴女の『闇』、つまり『陰』を平常になるよう『封印』しました。これで貴女の体質の暴走は抑えられた筈です。『陰』と『陽』の調和が実現し妖怪としての力が強くなったかもしれませんが、これに乗じて悪さはしないように。折角救ったのに私が退治することになりかねませんから。」

彼女はゆっくりと起き上がってみた。青年の言う通り、まるで自分の体とは思えないほど動きが軽い。彼女は嬉しくなって邸中を駆け回った。走っても楽しい、歩いても楽しい、転んでも楽しい。そんな気分は生まれて初めてだ。

「撤回するわ。最高の気分よ。」

「それは何より。」

「で、何で私を助けようと思ったの？私、あんたを殺そうとしたのよ？」

青年は唐突な質問に若干の戸惑いは見せたものの、結論は考えずとも至ったようだった。

「貴女は過去の私とそっくりだった。私は幸運にも、手を差し伸べてくれる人がいたけれど、一人一種類の貴女には現れなかった。もし私も一人だったなら、貴女と同じようになっていたでしょうね。」

「ふーん。じゃあ、あんたを救った人間の話聞かせなさいよ。私だ

け話してあんなだけ話さないのも変でしょ?。」

「そこまで気になりますか?。」

『貴方に興味が湧いた』のよ。」

彼女はニヤニヤしながら青年に言い寄った。青年は困り気味に笑みを溢した。

「敵いませんね。さて、どこから話しましょうか……。私の周りには父と母が。父は血の繋がっていませんでしたが、私の師で、本物の父親でした——」

何時間過つただろうかいつの間にか、夜の闇は朝の光によつて剥がされ、辺りは美しく光り輝いていた。邸にも温かい日が射し、明るい朝と出発の時を知らせた。

青年はポツリと溢す。

「私の父と母はとある陰陽師に嵌められ、殺されました。私が生きる理由は、私の幸せという両親の願いを果たすため。そして……。…」
青年はそこで言葉を詰まらせた。ただ、彼女には彼が言わんとすることがわかつていた。

「じゃあ、あんたがやりたいことからやればいいんじゃない?人間はあんたが思ってるよりずっと短命なんだから、少しは大切になさい。」
彼女は胸を張って青年に言った。

その言葉は、青年だけでなく自信にも向けて言っていたのか。答えは言った彼女しか知らないが、少なくとも彼を笑顔にする材料としては十分すぎるくらいだった。

「あ、そう言えば。名前ぐらい言つて行きなさいよ。覚えておいてやらなくもないわ。」

青年は互いに名前を知らなかった事に今気付いたようだった。

「そう言えば、自己紹介もしていませんでしたね。私の名は安倍……。改め、博麗常泰(ときやす)。貴女は?。」

彼女はしてやったりと言わんばかりの顔でニヤニヤと笑った。
「残念だったわね。私に名前なんか無いわ。言い損だったわね。」

常泰は少し驚いた顔を見ると少し考え込んだ後に彼女に言った。

「では『八雲』という名はどうでしょう?。」

「八雲ねえ．．．．．はあ!!?」

予想と180度違う返事。それは彼女の人生で一番驚き、奇々怪々な出来事であった。

「気に入りませんでしたか。八重の雲のような姿の貴女にはぴったり名前だと思っただのですが．．．。」

「???．．．．．って、そうじゃないわよ!普通『名無しだ』って言われて命名する?」

「名無しのままでは不憫でしょうし。」

青年の目は曇り一つ無い。本気で言っているようだ。

「．．．．．全く。分かったわよ。八雲でいいわ。」

(八雲．．．私の名前は八雲．．．．．!)

成り行きのような形で付けられた名前だったが悪い気はしなかった。

名無しの一人一種族の妖怪が八雲に昇華した瞬間だった。

「そう言えば、封印の札ですが、そのままくつついていても華に欠けると思いましたので、結ってみました。似合っていますよ。」

八雲は丁度近くに落ちていた鏡を拾い見てみると、後頭部に大きなリボンが髪を如何にも結ぶような形でへばりついていた。彼女は恥ずかしさのあまり顔を炎のように真っ赤に染めた。慌てて外そうとするが、彼女の手はリボンを通り抜け、触れることすらできない。

「常泰、外しなさい!」

「え、外してもいいですが、またあの状態に戻ってしまいますよ?それに、今の私には貴女と戦うだけの札も元氣ありません。それでは私はこれで．．．。八雲、達者で暮らすですよ。」

「な．．．．．こら、待ちなさい!外すまで逃がさないわよ!!」

美しい日の光が照らす中、八雲と常泰は廃屋を後にした。

先を行く光は、とある妖怪の暗く長かった嵐の夜を照らし、真っ白で何も無い、可能性に満ちた世界へと導いているようだった。それは長い生命の中の一瞬の事かもしれないが、起こりうる出来事はきつと胸の奥に記憶され続けるだろう。

妖怪は悟った。真っ白な世界がどのような色に染まるのかはまだ

誰にもわからないが、白い世界を鮮やかに染めるのも黒で塗り潰すのも自分次第である。作品を鮮やかな傑作として完成させられる保証などどこにも無いが、今はいつか虹色の世界を作れる事を思っ筆を取るだけである、と。

「……さ……。ゆ……。りさ……。紫様。」

聴き慣れた声が入る。とりあえずもう一度寝ることにした。

「ここは貴女の寢床ではありませんよ。起きてください！」

藍の声に若干怒りが混ざる。無理やり起こされた薄い意識で正面の景色を見て全てを思い出した。

「うっかりしていたわ。居眠りだなんて。」

「いつも通り、熟睡しておられましたよ。」

「あら、そう。なら安心ね。平常普遍が一番よ。」

流石の藍もこれには呆れ果ててしまった。

「……まず、報告します。結界の異常箇所は全て修復しました。」

「それはご苦労様。そういえば橙は一緒じゃなかったの？」

「橙は修復途中で飽きて逃げました。」

ということ、実質結界の異常は全て藍が修復したのである。働きの者である。

「突如現れた大量の結界の歪み。そして紫様も見ての通り、季節外れにここの妖怪桜が、それも満開に。異常自体がこうも重なるとなると……。何か不吉な予感がします。」

「そうね。楽しいことが起こればいいのだけど……。」

「紫様、真面目にお考え下さい。」

「今、そんなに構えても疲れるだけよ。それに、貴女が思う最悪の未来に私が動かないとでも？ 仕事は（藍が）済ませたし、そろそろ帰るわよ。藍は今日頑張ったみたいだし、ボーナス（油揚げ）をあげましょう。」

「はー！！」

紫は藍の機嫌を取り戻すとスキマに消えていった。

咎重き

桜の花の

黄泉の国

生きては見えず

死しても見えず

紫桜を見るたびにこれまでも、そしてこれからも思い出すだろう。
人間と妖怪の、満開の桜を思わせるような栄華で、静かな日常を。

— T o b e c o n t i n u e d —

幻想入り編

第一話 非常識を見る人

——都内 某私立高校・屋上

昼休み。ただでさえ怠惰な学校生活でこの時間程怠惰なものはない。食事を済ませても余る40分少々。次の時限の提出物を駆け足で済ませる者、昼間から馬鹿騒ぎする者……

この無駄な時間を削減してその分早く下校させるという事を教師たちは何故実行しようとしなのか彼には解せない。

彼はスマートフォンに付属のイヤホンを挿しアラームをセットした。目には目を、怠惰な時間は怠惰な睡眠を。と言わんばかりに彼は決まって屋上で眠るのだ。

彼の名前は土御門永一。ただの高校生であり、この物語の主人公である。しかしただ一つ、生まれつき世間の人間の常識を逸脱した性質の持ち主だった。

「やっぱりここにいたのか。お前は本当に屋上が好きだな。」

イヤホンの隙間から微かに声が聞こえた。彼の名前は安藤次道。

永一とは中学校からの仲で、彼にとつての悪友である。

「我が眠りを妨げる者はお前か？」

「異議有り。お前が飯を食う時間は20分弱。その後、お前は決まって屋上に足を運ぶ。今の時間は——」

永一は次道の逆転論（仮称）をスピードラーニングの如く聞き流しながらイヤホンをぐるぐる巻きにしてポケットに入れた。

そして一度彼を見るなり目を細くして睨んだ。

「では次の議題に。お前、俺の警告を無視して『また』心霊スポットに行ったな？」

次道はわざとらしく目を逸らす。

「魔女裁判はやめてくれよ……」

「魔女裁判なんてナンセンスだろ。勿論逆転もしない。証拠はお前の

右腕から肩にかけての全域だ。ま、お前に腕を気色悪く増やす超能力があるなら別だけどな。」

彼の言葉が徐々に熱を帯びる。それに気付いた次道は弓の弦を思わせる程に顔を引きつらせた。

土御門永一は簡単に言う。「異形の物が見える人」なのだ。彼の家は代々強力な靈感を引き継いでいる。父親、祖父や曾祖父は勿論、伯父や五歳の甥っ子にまで至るほどだ。

その原因は彼の先祖にある。その人物は誰もが一度は耳にした事があるであろう陰陽師、安倍晴明である。と言っても、掠れるほどの分家で靈感が無ければ自分たちを含め誰も信じないだろう。

「お前には何度注意すれば理解するんだ？行くだけじゃ飽き足らず、何度バケモノ連れてくれば気が済むんだ。いい加減死ぬぞ？」

「・・・サーセン。」

先に述べた「永一にとつての悪友」とは、彼から見て悪い事をしてくる友人ということだ。

「俺はお前の為に言ってるんだ。しかも厄介なことに今回は怨霊みただ。最悪死ぬぞ。」

次道はその言葉を聞いた途端に血の気が引いてきた。

「おいおい冗談だろ。流石に死ぬわけ無いじゃん。」

彼は青白い顔色で、まるで自分に言い聞かせているかのように言った。勿論、死ぬわけではない。単なる脅しである。だが、風邪や肺炎も最悪は死ぬ。妙な悪霊が取り憑いているのは本当であり、暴れだしたら何をするか分かったものではない。そこで、次道が悪霊を連れてきた時、決まって向かう場所がある。

「とりあえず帰りに叔父さんの家に寄るからな。」

「いつも通りだな。よろしく。」

「(次は放っておこう。)」

「あ、そうだ。これ先払いの紹介料な。山吹色(きな粉味)のお饅頭(餅入りチロルチョコ)だ。」

「食い物程度で何とかなる悪霊なんかいないぞ。(鋭い奴：)」

キーンコーンカーンコーン・・・

校内に予鈴が校内に響く。

「そろそろ戻るか。まあ精々放課後まで生き延びるんだな。」

「おう、死んだ時はザオリクしてくれ。」

「つたく・・・」

約二時間半後・・・

永一と次道はそれぞれのクラスでホームルームを終え、伯父の寺へと出発した。

「なあ永一、なんでこんなに離れて歩くんだよ。一人で歩いてる気分なんだが。」

「お前にも見せてやりたいよ。その腕の気色悪さ。」

寺は学校から徒歩10分ほどの距離にある。次道は心霊スポットへ行くたびに悪霊を連れて来るので伯父とは顔見知り、と言うか仲が良い。次道のオカルト好きの影響は伯父が与えていると言つても過言ではない。つまり、伯父は次道の悪(事に加担する)友(人の生臭坊主)だ。

寺までの最後の曲がり角に差し掛かった。そこを曲がった先の長めの石階段を上った先が目的地の寺である。

「よし、無事生還したぞ。後は祓ってもらうだけだ。」

「調子がいいのも今の内だからな。宣言しよう。お前はいつか必ずヤバイ物を連れてくる。ホラー映画レベルのな。伯父さんでも対処出来なくて泣くのはお前だからな。」

「出た、毎回恒例の『寺前説教』。」

永一はギロリと次道を睨みつけた。が、次道に効く訳が無く、

「おお、怖い怖い。桑原桑原。」

と冷やかしてくる始末だ。

ピリリリ・・・ピリリリ・・・

寺の階段に差し掛かった所で永一のスマホの着信音が鳴った。連絡することもされることも無く、携帯音楽プレイヤー付きの文鎮と化していた彼のスマホが鳴る事は天変地異の前触れである。実際、彼も豆鉄砲を食らった。

慌てて画面を見てみると、父親からの電話だった。永一は次道を先

に寺に向かわせると電話に出た。

「もしもし。」

「お、永一か。出てくれて良かった。早速だが今すぐ帰ってこい。」

「えー、今伯父さんの寺なんだけど。後にしてくれない？」

「今すぐじゃなきゃダメだ。まっすぐ帰ってくるんだぞ。」

父は永一の都合など全く無視して電話を切ってしまった。

普通なら父に対して怒りを見せる所なのだろうが、土御門家の父の場合はそれに従うのが得策である。何故なら、父の「勘」は外れないからだ。

父は普段、穏やかで他人の事ばかり考えて行動しているような人間だが、時折こういった自分勝手な事を言うことがある。その内容は突拍子もない事であることが多いのだが、それに従うと、何故か間一髪で命拾いをしたり、良いことがあったりもするのだ。

よって、土御門家では父の勘に従うのが慣習化されているのだ。

学校から寺までは近いのだが、寺から家まではかなり距離があり、一旦家に帰ってまた寺へと行くのは至極面倒である。しかし、恐らくこの一件も父の勘が作用しているのだろう。従うのが吉だ。

永一は次道に連絡を入れると家に向かった。20分程電車で揺られた後、やっと家までたどり着いた。

「ただいま。」

リビングから母の声が聞こえる。

「あら、おかえりなさい。父さんが呼んでたわよ。」

「また『サラリーマンの勘』？」

鞆を無造作にドサリと置き、私服に着替えながら気の抜けた声で問う。

「みたいね。でも今日は関西の出張の仕事を全部放り出して帰ってきたみたいよ。異変でも起こりそうね。」

父は始末書という永一の1000倍の面倒事を生み出してまで帰ってきたようだ。

「父さんは今部屋にいるから、早く行きなさい。」

「はい。」

永一は駆け足で父の部屋に向かった。部屋へ入ると父がスーツ姿のまま何かを探していた。ただでさえ整理が出来ていない父の部屋。今はゴミ捨て場を彷彿とさせるレベルにまで至っていた。

「……。父さん、何か用？」

「おつ、永一か。すまない、ちよつと待ってくれ。」

父は「宝」と称す骨董品の山の中から何かを探しているようだった。「宝」とやらがいくら名品でもこの散らかりようではガラクタの山にしか見えなかった。

物が動く度に舞う埃。永一はハンカチで口を覆った。

「——あつた！」

父は嬉しそうな顔で埃を被った古めかしい小さな木箱を永一に手渡した。中には真つ白な美しい数珠が入っていた。

「……数珠？なんでこれを俺に？」

「サラリーマンの勘だ。なに、お守りにでも持っておけ。」

永一は若干の不安を抱きながら木箱を受け取った。他人から見れば胡散臭く聞こえるが、父の予感は的中する。だからこそ、数珠を渡されるのは恐ろしいことである。

「あ……あのさ。今日のサラリーマンの勘ってどんな感じなんだ？良記事なのか？それとも……」

父は真面目な顔になった。

「わからん。でも永一の行動次第で良くも悪くもなるだろう。」

互いに大なり小なり面倒事を抱えながら勘を信じているというのに流石に無責任過ぎると思った。

「と言っても、今の父さんに出来ることは無いからな。何かあつたら乗り越えてくれ。そういえば、お寺で次道くんが待ってるんじゃないか？早く行ってやりなさい。またあいつ（伯父）が悪影響を与えてるかもしれないしな。」

「あんたが呼び出したんだろ！」

——都内某所 寺

寺に着いたのは良いのだが、目の付く場所には誰もいない。恐ら

く、伯父がお祓いを始めているのだろう。

お祓いをする時に、伯父は決まって依頼者と共に通称、「お祓い部屋」に籠もる。仕事中、伯父はお祓い部屋を見られる事を極度に嫌がる。その為、次道がお祓いを受けている時、永一は小さい甥っ子と遊んでやったり、そのお礼として伯母さんにお菓子を振る舞ってもらったりするのだが、伯母と甥は今不在のようで、絶賛暇を持て余しているのだ。秋の夕方は暗く、冷える。着いた途端に帰りたくなるというのは今のような状態を言うのだろうか。

永一は暇に身を任せ、ぶらぶらと周囲を徘徊し始めた。本当なら来慣れている為、一切の新鮮味がなく更に暇が加速する筈だった。ふと、敷地の隅に置かれた小さな社が目にとまった。彼の背丈ほどの小さな鳥居に小さな祠。わざわざ寺に配置した意味がわからない程に質素な社である。社は寺が建てられた時頃から一緒に置かれており永一も存在を知っている。だが、その時は何故か無性にその社が面白く見えた。

「何で寺に神社があるんだろうな。神仏習合ってことか？そっういえば、どこの神社を祀ってるんだ・・・？」

永一は目を凝らして祠の文字を見ようと試みたが、少し文字が小さいせいかわらなくて見えなかった。境内からなら見えるだろう。と鳥居をくぐった。

「文字が旧字だし達筆すぎる。えーっと、この文字は——」

ドサツ・・・

突然、背中が引つ張られているような感覚がした。視界はオレンジ色に少し白が掛かった景色が広がる。そして、足が地面から離れていることに気づく。振り向こうと首を動かすと、ふわりと土の匂いが鼻を通った。その時、初めて自分が地面転がっている事に気がついた。

起き上がってみると、一面に彼岸花が咲き誇り涼しい風に揺れている。そして振り返ると、季節外れに薄い紫の花を付ける桜の大木が幽

玄に聳えている。

永一は背中に付いた土を払いながらポツリと呟いた。
「ここは……どこだ？」

— T o b e c o n t i n u e d —

第二話 鬼ごっこ

紫桜をブーツと眺めて5分、やっと自分が置かれている状況が理解できた。

「遭難した…。」

彼には伯父の寺にあった社を調べてから後の記憶がない。事件に巻き込まれたのか、はたまた無意識に徘徊してここまで来たのか。普通なら様々な不安がよぎるところなのだが、永一は表情は普段通り柔らかいままだ。人間はその身に起こっている事象が常識を大きく上回ったとき、逆に冷静になるのである。

彼は大きく伸びをしながらゆっくりと立ち上がった。木々に囲まれた空間に、真っ赤な彼岸花が斑なく咲き、その中央に立つのが例の紫桜だ。稀に見る絶景ではあるのだが何故か気分は高揚せず、ただ静かに（季節外れではあるが）花見をしていたかったが、どうもそうはいかないらしい。

彼の第六感、靈感が気配を察知、そしてすぐに肉眼で捉えた。幽霊である。しかも10や20どころではない。悪意を持つ危険な霊はいないようだが、大量に幽霊がいるような空間に長居するものではない。遅くなる前に寺に戻らなければ。

ニヤア、ニヤア。

永一が退路を探している時だった。紫桜の方から猫の鳴き声が聞こえた。仔猫だろうか。さつきまではしんと静かで生き物の気配すら無かった為不思議ではあったが、彼は無類の猫好きだ。早速桜の木に走った。鳴き声の方向を見ると思ったとおりまだ小さな仔猫がいた。背黒腹白のよくいる雑種だ。仔猫は木のまままあ高い位置にいる。親猫がいる訳でもなく木の枝の上で哀れそうに繰り返し鳴いていた。

「なるほど。降りられなくなったのか。」

例え噛み付かれ、引つかかれようと、彼にとって猫に救いを差し伸べるのは当然である。彼は桜の木に足をかけ、枝を掴むと一気に猫がいる枝まで登った。猫の近くに腕を伸ばす。

「——ほら、おいで。下ろしてやるぞ。」

猫は永一の目を見ると鳴くのを止め、彼の腕を無視して軽快に枝を跳ねながら地面に降りていった。すると猫はそのまま逃げるわけでもなく木登りする人間を眺めていた。降りるときも、落ちた瞬間も。

永一は腰を抑えながら猫の近くに寄った。普通、猫は慣れない人間が近づくと逃げるが、この猫は逃げない。それどころか、猫が安心して居る時にする「猫座り」をしている。見た目よりも相当、肝が据わっているようだ。

余談だが、その姿はかまぼこに似ている。

暫くすると、猫が歩き出した。この場所は行き止まりだったようで、猫が行く方向は別の場所に通じているようである。

(ここが行き止まりなら、俺はどうやってこの場所までやってきたんだ?)

疑問は積もっても解決などする訳もなく考えるだけ無駄である。とりあえず今は直感を信じることにした。結果、根拠は無いが猫に付いていけば助かる気がした。

空間の入口。その時は彼岸花に隠れて見えなかったが、足元には中くらいの石が埋まっていた。その石には「無縁塚」と掘られていた。

無縁塚——弔う縁者のいない死者を葬った墓。

彼がこの場所の意味を知り震える事になるのはもう少し後の事である。

彼岸花が続く一本道。

辺は夜の闇を強め、道を彩っていた紅色が少しおどろおどろしく見える。

猫という生き物は「マイペース」や「自由」を売りにしていると思っていたが、この猫はまるで永一に「付いてこい」と訴えているかのよう。彼の足取りに合わせて前を進む。美しい毛並みと綺麗な顔立ちからは普通感じることの無いだろう。「不思議さ」をその猫は持っている。何というか、猫らしくない猫である。

ただし、永一は猫を飼っていた経験はない。

その時突然、猫は動きを止めた。右前足を上げた状態でピクリとも動かない。余りにも猫が動かないので、前に回り込み顔を覗いた。猫は人間ほど表情豊かではないが、その時の猫の恐ろしい形相は圧倒される程だった。その時、視線が永一に合わせて動き、同時にビュンと風を切る音がした。彼は目の前にいたはずの猫に背を向けていた。何が起こったのか解らぬまま猫の方へと振り返ると、猫は口に何かを啣えて座っていた。

遠目であるためそれが何か一瞬で判別するのは難しいのだが、四角く黄土色のその物体には近い記憶の中で既視感がある。それは彼が好きで食べようと思いついてきたものだった。

チロルチョコだ。

同時に彼は鞆の小ポケットに大きな穴が空けられていることに気づき、

人間にとつては美味しいチョコレートだが、猫にとつては生死を分ける程の毒であり、猫を飼う上で最も注意しなければいけない事であることは猫好きの彼にとつて常識である。

…猫を飼っていた経験はないのだが。

歯がパッケージに食い込む。鋭利な歯と体温で溶けたチョコレートに貧弱なビニールと申し訳程度の包み紙はどれだけ持つだろうか。だらりと嫌な汗が滲み出る。

その時、微動だにしなかった猫が永一の考えを知ってか知らぬか思い切り地面を蹴り、一目散に逃げだした。

「待てええええええええええええ!!!」

太陽の沈む10倍の速さで追いかけた。小さい猫の体からは考えられないほどの強靱な脚力に貧弱な高校生が負け始めてきた時、永一と猫以外のもう一つの足音が遠くから聞こえていることに気づいた。ズン、ズン、と重く鈍い音はどんどん近づいてくる。同時に、彼の霊感が危険信号を感じ取った。

——見つけた、見つけた。外の世界の人間だ！——

低く殺意の込められた声に背筋が凍る。絶対に振り向いてはいけ

ない。

今までに感じたことのない霊力。はつきりと存在する実体。出会うなら怨霊やら悪霊の方がまだマシだったのかもしれない。

恐らくこれは一般に「化物」と呼ばれる者だ。

猫がチョコレートを奪って逃げなければ反応が遅れていたであろう。猫ナイス。化物を撒いてチョコレートを取り返した後にめっちゃくちゃ撫でてやろう。

猫は彼岸花の道から抜け、森の中へと飛び込んだ。開けた道よりも森の方が逃げるにはうってつけだろう。永一もすかさず森へと進んだ。暗くじめじめして足場の悪い森は決して居心地の良いものではないが三途の川を渡るよりはマシだろう。

森に入って暫くした頃、足が疲労で鉛のように重くなってきた。しかも頭がクラクラする。だか、こちらの都合など化物には関係無いのだろう。足音がどんどん近くなる。

遂に視界が歪んできた。体力と脳の命令が噛み合わなくなった時、生き物の動きにはそのズレと同じだけの不具合が発生する。恐怖で覚醒した脳、ヘトヘトの体。不具合は顕著に、そして最大の危機として表に現れた。重心が前に傾く。地に付くべき足は空を蹴っていた。永一の体は地面に転がった。

「っ痛・・・！」

柔らかい土がクッションになり無傷だったが幸運ではなかった。彼の背後で鈍い足音が止まった。彼はその身体をガクガクと震わせ後ろに振り返った。そこには見た目は普通の男が一人、嬉しそうな笑みを浮かべながら立っていた。

「ちよこまかと逃げおつて。こんな居心地の悪い場所に長居させるな。まったく外の人間は妖怪から逃げないと聞いていたのだが。しかも、保険のつもりではあったが俺の変装を一瞬で見破るとはなあ。まあいい・・・」

(妖怪?)

男の末端が煙となってゆらゆらと立ち上る。それはだんだん凹凸を生み、次第に顔のような形を作る。

バチリと巨大な瞼が開く。ぎよろりと動く眼球が永一を捉えた。
「貴重な人間だ。ありがたく頂くとしよう。」

妖怪を自称する化物は誇張無しの化物への変貌を遂げた。
巨大な口が凄まじい勢いで永一を飲み込まんとして迫る。

「あ………あ………あ………あ………あ………」

死の恐怖を感じると声が出なくなる事を身を以て知った。

永一は思わず両腕を掲げた。非力な事は承知だったがそれでも必死な抵抗と生命欲の表れだった。その時、突然鞆が光り出した。光は形を輪に変えて広がり、永一を囲う。

妖怪は光の領域に入ると目を思い切り開いて叫んだ。

「ギャっ!?なんだこれは!?!」

永一はその声に気付き前を見た。

「この光は………靈力?」

驚くことに妖怪は後ずさりして、しかも光に触れた部分が煙に戻っている。しかも立ち上る筈の煙は何故か光の中心、つまり永一の鞆に吸い込まれている。妖怪の顔面が半分近くが失われたところで光は消えた。

「小癩なああああ!小僧、ただでは済まさんぞ!!」

消えていた顔面が一瞬で再生する。その怒りに満ちた目が永一を睨みつけた。

妖怪にダメージを与えた正体不明の光は消えてしまっている。腰が抜けて足も動かない。

多少の延命はあったが最早これまでか。

だが、運命は諦めた頃に逆転するのだ。

「伏せて!」

何者かの腕が永一の頭を地面に押し付ける。それと同時に黒っぽい人形が視界を横切った。人形だ。だが、普通の人形とは様子が違う。それはまるで生きているかのように正確に妖怪のど真ん中へと飛び込んだ。

——魔符「アーティフルサクリファイス」——

耳元の腕がバチリと指を鳴らす。同時に人形が爆発した。圧縮さ

れた力は凄まじい衝撃を伴って広がり、辺りの草木をバサバサと激しく揺らした。

「ぎゃああああ!!!」

妖怪は叫びながら衝撃で四散し小人のように小さくなった体で惨めに逃げていった。

永一は突然のどんでん返しに放心していると、彼を押し付けた腕が手を差し伸べてきた。その手を借りて立ち上がって見てみるとそこにはカラフルなドレスを着た金髪の外国人の少女が立っていた。ハロウィンには少し早い。普段着なら若干痛い格好ではあるが、その痛さが自然に見えるほどに整った顔立ちである。

彼女の周りには妖怪を吹き飛ばした人形がふよふよ浮いている。

普通はまずそれがどのような仕組みなのか気になる所だが、彼には生命の危機を鮮やかに救い出した彼女の姿が女神に、そして人形は天使に見えた。

「危なかったわね。怪我は無いですか？」

「はい。助けて下さってありがとうございます。」

深々と頭を下げる。しかし頭を上げた時、彼女は少しムツとしていた。

「勝手に人間を食べようとした不良妖怪は悪いけど、日が落ちてからこんな場所をフラフラしてたあなたもあなた。私を呼びに来たこの子（猫）に感謝するのね。これに懲りて少しは命を大切にすることよ。」

まさか説教されるとは思わなかったが、説教よりも疑問ばかりが重なった。

勝手に人間を喰らう？勝手じゃなければいいのか？この人にも妖怪が見えている？

「あの、ここはどこですか？道に迷った・・・というか、いつの間にかここらへんで寝ていたような——」

突然言葉が出なくなった。少女の姿が二重になって見える。意識が遠退く感覚がスローモーションで襲い掛かる。

「かなり胞子にやられてるみたい。上海、この人を家に……………」

遂に耳も聞こえなくなった。五感が奪われ、そのことに恐怖も感じられない状態を意識不明と呼ぶのだろう。

ただ、薄れゆく意識の中で一つだけ、人生で一番「帰りたい」という気持ちが強いという事はわかった。

— T o b e c o n t i n u e d —

第三話 不思議の国の

気が付くと、永一は見覚えの無い空間を漂っていた。何も無い、全てが真っ白の世界。恐らく、明晰夢というものである。

——貴方が次の継承者ですね。——

何処からともなく声が響くと同時に光の人型が永一の目の前に現れた。彼はぎよつとして思わず身を引いたが、見た所悪いものでは無さそうだ。

「・・・誰ですか？」

「私は・・・いいえ、今はその時ではない。」

「??？」

夢の中であろうと、こういった訳の分からない霊体(っぽいもの)との遭遇は珍しくない。無視が最善だが、今回は迂闊にも会話してしまった為、何とかして素早く退散するのが得策である。

「あのく、お話しのところ悪いのですが、今現実世界の方で取り込んでおりましたか。一刻も早く目覚めたいのですが・・・。」

「そうでしたか。挨拶をしようと思いましたが出てきた次第ですので。こちらあまり長く居られませんので。」

(こいつ、妙に喋るな・・・)

あまりに意識がはつきりした霊体に少々引き始めたとき、

「それでは、目醒めの時です。また何処かで、永一。」

「!」

突如、人型が眩しいほどに輝きだした。体が熱い。それは紛れもない現実の感覚である。

.....

視界を闇が覆う。奇妙な夢を見た挙句、身体が重く熱い上に息苦しいと来た。気分は最悪である。

「.....」

起き上がろうと頭を動かすと、顔面に寝そべる物体がのろのろと動き始めた。同時に闇が晴れ、辺りに見慣れないメルヘンチックな世界が広がった。横を見ると、あの猫が大きなあくびをしながらまた寝そ

べつていた。ここは紛れもない現実だ。腕時計を見ると短針が8を指そうとしていた。

永一は時期が少し早いフリル付きの羽毛布団を引き剥がすとベッドのすぐ下に並べられている自分の靴に入れ、寝起き特有の脱力感に任せて辺りをボーツと眺めた。棚や窓枠、壁に至るまで所々に絵や可愛らしい小物が飾られている。

現状は大方想像が付く。気絶している間、また先の人形の外国人に助けてもらい今に至るのだろう。助けてもらった人間が言うのも何だが、この部屋の落ち着きの無さ、改め「整った散らかり様」と言ったらこの上ない。

勿論、貶している訳ではない。彼女は命の恩人で、感謝してもしきれない。ただ、趣味が違うだけである。シンプルの回し者である彼には到底理解のできない「良さ」なのだろう。

不意に寝そべっていた猫が起き上がった。猫はベッドの上から驚異のジャンプ力で直接ドアに飛びつき、器用にドアノブを回すと部屋の外に出た。虫(猫)の知らせでも受けたかのような唐突な機敏さに驚き、永一もそれに便乗して部屋を出た。

部屋がメルヘンなら廊下もそれである。ここまで徹底して可愛い物づくめであるとむしろ賞賛の気持ちすら湧いてくる。

猫が廊下の先の扉を開けると、そこから食欲を唆る良い香りが鼻腔を突き抜けた。20時間も何も食べていないと匂いだけでヨダレが出る。空腹の胃が物を求めて唸る。脳はそのリクエストに応えるかのように全身に信号を送る。気が付くと、良い匂いの元、リビングの中にいた。

リビングのテーブルには見ただけで美味しさを感じる料理の数々が並べられ、その周りには例の爆裂人形が食器を並べたり、片付けをしたりと忙しく働いている。

そして、テーブル脇のアンティークなソファに膝に猫を乗せ例の少女は座っていた。

「あら、気がついたのね。調子はどうかしら？」

恩人の姿を目にした瞬間、永一の理性が戻ってきた。

(命を助けてもらった上に気絶した俺を家まで運んで泊めてくれた恩人を目の前にしてお礼の言葉を言うこともなくただ食欲を満たす事だけを理由に行動していたとはなんと凶々しく恥ずかしい事だろうか・・・！)

「えーつと、大丈夫・・・？」

(それどころか欲を満たすために一瞬でも己を忘れる失態。礼の心はおろか欲を律する事すら忘れるなど論外も論外。獣と同じでありetc...))

「あのくもしもし？」

永一は一旦部屋を出て扉を閉めた。そして数秒後、また扉を開けると爽やかな笑顔でリビングに入った。

「お早うございます。昨日、助けて頂いただけでなく、お家にも泊めて頂いたとあり、どうお礼すれば良いのか解り兼ねておりますが、今は一言お礼申し上げます。有難うございます。」

「げ、元気そうで何よりよ。(変わった人間ね・・・)」

とりあえず、今の彼にはこれで満足であった。

——数分後・・・

結局永一はなんだかんだで身の安全が保護され、食事にもありつけ徐々に心の平安を得ることができた。特に食事は一流のシェフ並かそれ以上の腕で、見た目、味共に最高級である。それを一口一口を味わい噛み締める彼に少女が問う。

「あなた、現し世からやってきた人間よね？」

「現し世・・・？いえ、俺は東京から来ました。」

「やっぱり、外来人なのね。『東京』は今までに会った外来人から聞いたことがあるわ。」

少女が返事に対して納得している一方で、永一は野菜スープを飲み込んでも話は全く飲み込めないでいた。

「東京が現し世ならここは此岸に当たる場所(ド田舎)という事でしよるか？」

「まさか、私もあなたもまだ死んでないわ。ここは幻想郷。常識と非常識の結界によって現し世と別けられた、あなたから見て『異界』に当たる場所ね。簡単に言うと、現し世が表の世界で、ここは裏の世界。」

少女の説明はきつと幻想郷（非常識）側の住人が聞けば解りやすいのだろう。しかし、現し世（常識）の世界から来た人間にはこれ程までに難解な言葉は存在しない。

「幽霊や妖怪は信じます。実際に見てきましたから。でも異世界は流石に・・・物理的に存在が出来ませんし。」

彼がティーカップの紅茶をぐいと飲み干すと、人形が親切におかわりの紅茶を注いでくれた。森で見た時は気にする余裕がなかったが、空を飛び、勝手に動き、家事をする人形など永一の知る物理法則の世界に存在したのだろうか。

「あなた、やっぱり少し変わっているのね。」

「・・・それは認めますが、多分、幻想郷の住民から見れば外来人はみんな変わり者ですよ。」

「そうじゃないわ。あなた以外の外来人は幽霊や妖怪を全く信じようとしないうちに神隠しは何故か信じて、ただ帰る方法を知りたがっていたもの。それに、『携帯電話』と睨めっこもしていないしね。」

少女の言葉は落雷のように永一の身体に流れた。

「俺の鞆ありますか？」

少女が指を動かすと、人形が永一の鞆を持ってきた。彼は無言で鞆の中に眠るスマートフォンを取り出した。「携帯」する電話の存在を少女に言われて初めて気づいたということに彼女に悟られても言葉では恥ずかしくすぎて言えない。が、最強の帰宅手段に変わりはない。

電源ボタンを押す。充電残量64%。最後の充電から一日以上経っているとは思えない驚異の数字だ。ただ、その隣のアイコンは世界一残念な表示していた。

「圏外・・・」

がっかりする永一を見る少女。

（・・・携帯電話を見て暗くなるのは同じなのね。）

何となく察してはいたが、こうして肉眼で確認すると残念極まりない。最後の希望、GPSも死んでいた事は言うまでもない。

永一の心にどんよりと絶望の雲がかかる。

「そう暗くなる事ないわ。ここで待っていればあなたは直に帰れるわ。」

雲の切れ目に希望が見えた。

「現し世への帰り道を知っているのですか!？」

「私にはあなたを元の世界に返せないけど、それ専門の知り合いが居るわ。さつき人形に呼びに行かせたから直にここまで来るでしょうね。」

その言葉はここまでで体験した恐怖の強さに比例するような安堵感と心の平安を生んだ。永一は何度感謝を述べ、頭を下げてても気がすまなかった。

「その代わり、そいつが来るまでは私に現し世の話をしてくれる？少しだけ興味があるのよね。」

「勿論です！あ、でも一つだけ聞いてもいいですか？少し気になった事が。」

「長くならなければいいわよ。」

「ありがとうございます。さつきの話なんですが、幻想郷の人たちには幽霊や妖怪が見えるのですか？」

少女はその質問に首を傾げた。

「あなたの言っている意味が理解出来ないわ。『そこにある物』が見えない目なんて只の穴でしょう？これがあなたが求める質問の答えになるかは分からないけど、幻想郷では幽霊や妖怪は基本的に見える物よ。低俗霊なんかだと人によるだろうけど。」

疲れていないのに心拍が強さを増し、寒くもないのに全身がわなわなと震える。全身の力が抜け、ソファの背もたれにガクリともたれ掛かった時、永一は初めて自分が驚いていることに気づいた。

「現し世の人は・・・見えないんですよ。普通。」

「なるほど、現し世の人間は人外に対して盲目、よって無知なのね。だから妖怪から逃げずに喰われて命を落とすのね。現し世で妖怪に襲

われたときはどうするのかしら。」

その時、家にノックの音が響く。

「あら、意外と早いわね。殆ど何も聞けなかったわ。さあ、あなたたち。帰る時間よ。」

少女は膝から猫を下ろすと永一を家の玄関まで案内した。

「アリスーっ。来たわよ。」

ドア越しに女の声が聞こえる。恐らく、少女が呼んだ専門の知り合いだろう。ドアの外の声は間違えでなければ彼女を「アリス」と呼んでいるように聞こえた。あだ名ならそれ以上に適当な物は他にないだろう。

少女の人形がドアを開けるとそこには紅白の巫女装束の少女が立っていた。

「早かったのね、霊夢。迷ったついでに魔理沙の家に寄ってお茶してから来ると思ったのに。」

「その魔理沙はここに来るついでに香霖堂でお茶をたかってるわよ。」
想像では大人が来ると思っていたが。本当に目の前の少女が現し世に帰してくれるのか不安ではあったが、普通の人間には無い底知れぬ何かが見え隠れしているように見えた。

「私は博麗霊夢。アリスから聞いていると思うけど、あんたを現し世に帰すために来たわ。神社まで案内するわ。」

「神社？」

「ええ。要するに幻想郷の出入り口よ。」

遂に帰宅の道がはつきりと切り開かれた。こんな恐ろしい世界と決裂できるのなら未練など無い――

「帰り道には気をつけるのよ。」

「はい。命を救って頂き、本当に、本当にありがとうございました。あの、もし良ければ最後にお名前を教えて頂けませんか？」

少女は少し困ったような顔をしたが、永一の顔を見るとその熱意に折れたのかクスリと微笑んだ。

「あなたと自己紹介しても意味がないと思ったのだけど・・・私はアリス。アリス・マーガトロイドよ。」

まさか名前まで不思議の国の住人だったとは誰が思うだろうか。もしくは、名前が彼女をメルヘンチックに変えたのか。確かに名前負けはしていないが。

「俺は土御門永一です。アリスさん。この御恩はきつと・・・永遠に忘れません。」

「悪いけど、私は忘れるわ。きつとあなたの他にも森に迷い込んだ人がここを訪れるもの。」

アリスはこれからも迷える人間を助けるということだろう。本物の不思議の国のアリスはおとぎ話のようなか弱いお転婆少女ではなく、果敢に悪に立ち向かう優しい人形使いだった。

永一はニコリと微笑むと軽くお辞儀をすると猫を抱え巫女の後に着いた。次に振り向いた時にはもうアリスの姿は無かったが、何体かの人形が手を振っていた。

——だが、森を進む途中、永一は心中に芽生えていたちよつとした心残りが次第に顕著になっていくのを感じた。

心の底から求め、探した彼と同じく強い霊力を持った仲間が、少なくとも一人、目の前を歩いているのだから。

— T o b e c o n t i n u e d —

第四話 八雲立つ

昼時の魔法の森。太陽は既に高く上がっているというのにここは薄暗い。おまけに空気が悪い上に湿度も凄まじい為、涼しくらいなのに肌がベタベタして気持ちが悪い。しかし、永一の前を歩く巫女、博麗霊夢は更に劣悪な環境に置かれていることだろう。

「もう、暑いから降りてよー!」

霊夢は猫をむんずと掴むと地面にその前足を地面に促した。しかし、猫は頑として離れようとしなない。持ち前の俊敏さを駆使して、今度は帯のように霊夢に巻き付いた。

彼女は一度ため息を吐くと諦めたのか二度と猫に触れることは無かった。

「同時に数人で幻想入りしてきた人間はいたけれど、猫と一緒にだなんて初めてよ。」

「いやいや。猫はここに来てから拾ったんだよ。幽霊がウヨウヨいるし、秋なのに桜が咲いてて不気味だったな。」

「へえ、無縁塚から来たの…幸運だったわね。」

「無縁塚って事は、あそこは墓場だったのか。幽霊がいても不思議じゃないな。」

「あら、ピンと来ないかしら。無縁塚は身寄りのない者の墓。幻想郷の人間は完全に戸籍で管理されているのに何故こんな場所があると思う?」

「…妖怪に喰われて死んだ外来人の為か…。」

「あら、今度は察しがいいわね。折角生き残えた命なんだから、これらの人生は気を改めて地を這いつくばってでも生きることね。」

「…これまでもそうだし、これからもしごとくこの世にしがみついてもりなだけど?」

「あら、貴方は普通の神隠しだったのね。なら、死ななくてよかったわ。」

「ええ…。」

先進国日本の闇の一端がまさか異世界にまで迷惑をかけていると

は笑えない話である。

そうこうしているうちにようやく鳥餅のような湿気から解放され、開けた場所へ出た。久々の直射日光に思わず伸びをし空を仰いだ。その時、白黒の物体が凄いスピードで視界を横切つように見えた。物体は永一の視界の中心で動きを止めるところちらへと向かってきた。大きな帽子にフリルのドレスが箒に跨り突き進む。最初は遠近法で虫が大きく見えたせいだと思ったがどうやらそうではないらしい。あれは紛れもなく人間だ。

「引きこもりの道具屋は外に出て、方向音痴の巫女は迷わずに猫を使い魔に、と。これでオーロラでも出れば私の無駄足は無駄じゃなくなるんだが。」

「大きなお世話よ。」

その少女は当然のように空から舞い降り、箒を地面に突いた。

魔女。永一の脳内はその単語で埋め尽くされた。伝説や物語に限り存在を許された存在、そして彼が幼少から焦がれた存在が今、目の前に存在しているのだ。初めて童話を読んだ瞬間を想起する。驚く前に心が躍った。

「あ……ああ、貴女は……魔女ですか？」

白黒の少女はまじまじと彼を見た後に霊夢を見た。

「私は霧雨魔理沙。普通の大魔法使いだ。」

魔法使いである霧雨魔理沙からすれば普通(?)の反応も、子供の心を取り戻した一外来人には感無量である。

後で聞いた話、アリスは*捨虫・捨食の術を習得した完全な魔法使いだという。驚きはしたが、浮遊する人形を思えば不思議では無かった。

*魔法使いになるために必要な術。捨虫の術は成長を止め不老長寿になり、捨食の術は食事と睡眠が不要になる術である。

巫女と魔法使いの相性が良いなんて話は微塵も聞いたことなかったが少なくとも目の前の二人は仲が良いようで、一世代前のガールズトークが始まった時にはもう彼女たちの意識から永一は抜けていただろう。

特異な人間に得意な世界を。ふと浮かんだくだらない筈の洒落に心が傾くのを感じた。

——博麗神社

森を出てからここに着くまでに時間はかからなかった。が、神社までの一本道は強制的に獣になったかのような気分を感じさせられ、草の香りとマイナスイオンを嫌というほどに浴びられる緑の道だった。人間の永一がこの道を通るには少し勿体無さ過ぎるだろう。

道を抜けると長めの石階段が現れた。その先に真っ赤な鳥居が見える。目的地の神社は目の前だ。

猫はいい加減飽きたのか霊夢から降りた。

「おっと、いいのか。お前の夏用マフラーが逃げるぜ？」

「うるさい。」

魔理沙が汗だくの霊夢を見てケタケタと笑う。暑い中、ご苦労様だ。

猫は軽快に階段を登って行く。その様子を見て、霊夢は少し難しい顔になって永一達に問う。

「あの猫・・・なんだかまぼこに似てない？」

「わかる！俺も最初そう思ったんだよな。」

永一は指をパチリと鳴らした。大した事でなくとも共感を得ると謎の嬉しさを感じるのは何故だろうか。

「はあ？どこをどう見ればあれがかまぼこになるんだよ…。」

「どこをつて、見ればわかるでしょ？」

「お前らのセンスを疑うぜ・・・。」

魔理沙はどうにも腑に落ちないようで猫を追った。それを茶化そうと霊夢もニヤニヤしながら階段を駆け上がった。永一もここは空気を読んで二人を追いかけた。

階段を登る途中で振り向いてみると、幻想郷の景色が広がっていた。永一は写真で見たような田舎の風景に自分でも驚く程過剰に感動していたのだった。紅葉途中の彩豊かな山。そこから流れる川とそこに栄える集落と広大な田畑地帯。そこには人の姿も見え、腰を屈

めて仕事に一生懸命だ。

永一にはこの風景からは都会の夜景からは見えない「何か」が見えた。この風景こそ彼がこれまで見た恐ろしい世界、幻想郷の正の部分で、現し世には無い彼を惹きつける魅力だった。

ところが、階段の最上段に足を付けたところで彼の身体はピタリと固まった。全身に悪寒が走り、ジワリと不快な汗が出る。境内では猫と戯れる少女たちの微笑ましい絵画のような日常が繰り広げられているが、本能はこれ以上進むな、と警告していた。

「逃げろ!!!」

堪らず永一は叫んだ。彼にとっては讃えられるほどの勇気の働きだった。

「な、何!? どうしたのよ急に。」

「なにか変な物でも食べたか?」

彼は弱々しい小動物の如く小刻みに体を震わせながら境内の中心を指さした。

「何って・・・気づかないのか? ...どす黒い塊...、目の前にいるじゃないか!」

どす黒い塊。それは彼の人生で見たものでこれ以上に黒く、恐ろしい力を秘めている存在はなかった。物体は大きく歪みながら膨張すると人の貌を成し永一に迫る。

その時、彼の耳元でゆっくりとした息継ぎの音が聞こえた。

——人間、鋭すぎるくらいが丁度いいわよねえ..... ——
「.....!!!」

彼は最早震える事すら忘れ、まさにメデューサに睨まれた者の末路であった。

「やれやれ...夜行性のスキマ妖怪まで早起きとは。今日は厄日だな。」

魔理沙はそろそろ呆れてきたようだ。

「少しおふざけが過ぎたわね。退治した方がいいかしら?」

霊夢が譴責すると、何も無い空間に一筋の裂け目が現れた。そこからは一切悪びれもせず知らん顔の少女が現れた。

「フフフ...私に懐を見せすぎたあの子が悪いのよ。」

「あんたねえ……この人は外来人。現し世に帰すんだから邪魔しないで。」

「あら、帰るか帰らないかは貴女が決めることではないわ。」

少女は永一に目を向け一度拍手すると、放心していた彼の意識が戻ってきた。

「……こ、殺さないでください!」

「殺す? そんな勿体無いことしないわ。むしろ、私は貴方の味方。私は八雲紫。この幻想郷の賢者をしています。」

賢者と言われても此方の事情などわからない為何の役職なのか皆目見当も付かないが、霊夢や魔理沙の態度から見て味方である事は事実のようだ。

なぜなら

「あら、可愛らしい猫。『かまぼこ』そっくり。」

「紫もそう見えるの? やっぱリセンスがないのは魔理沙(あんた)じゃない?」

「む……私がおかしいのか……?」

紫に素直に撫でられているからだ。とはいえ、猫は普通人が近づいたら身構える筈だが。

「……。なるほど、やっぱり。これを持っているという事は……。」

いつの間にか紫は手に永一の数珠を掛けていた。彼はそれに気づくや否や鞆をひっくり返し数珠の木箱を開いた。その瞬間、箱から紫が持っているはずの数珠を持った細い腕が飛び出し、彼に手を振ると数珠を置いて消えた。

霊夢はそれを見るなり紫に注意した。

紫と木箱を交互に見ながら謎の超常現象に唾然としている永一に紫は一つ提案した。

「気に入ったわ。今日は気分がいいから、貴方の願いをどんな事でも一つ叶えて差し上げましょう。その代わり、一つだけ私の暇つぶしに付き合ってもらうけれど。どうかしら?」

「賽銭箱いっぱい金塊と信仰。」

「私は賢者の石が欲しいな。」

「わかつてると思うけど、貴方たちには言っていないわよ。」

どこをどう気に入られたのか皆目検討もつかなかったが、まず彼はこの言葉からは高額当選メッセージ以上の胡散臭さを感じた。普通は無視するような話が何故かその時は、その悪魔の囁きに自分でも気味が悪いほどその言葉の魅力や希望を信用しきっていたのであった。

「ダメよ。妖怪の言うことよ？こんな話に嘘に決まっているわ。」

霊夢は先ほどとは打って変わって顔色を変えて止めに入った。

「おいおい、僻んでるのか？なに、どうせまた脅かされるだけだぜ。」

「違う、紫は本気よ。この顔は私を試した時と同じ顔。きつと返答次第では……その、えーと……あれ、私何を言おうと……？」

こちらを見て怪しく笑う紫。魔理沙は全てを察し声を潜めた。

「地位、名誉、お金、たとえ永遠の命でも、叶える事は私の力の下では他愛もない事。貴方の了解の一言で望むだけ、望んだ形で差し上げますわ。」

永一は自らの人生を顧みた。決して貧しい生活を強いられることもなく家族関係も良く、勉強や趣味にも縛られることもなく好きなかだけ打ち込み、ただひたすらに普通の幸せに恵まれた人生を歩んできた。彼もそれに満足し、それが死ぬまで続くのも悪くないと思っていた――

「嬉しい機会ですが結構です。」

永一は予想に反してあっさり断った。紫はニヤリと笑った。

「随分と謙虚ねえ。あの二人には少し見習って貰いたいわ。」

「…紫さん、でしたね。貴女ほどの力をもつてすれば俺の願いを叶える事はとても容易かもしれません。ですが俺は欲しい物がわからないのです。それが大層なものなのか、くだらない冗談なのすらも。わからない物は願えませんし、勿論叶える事もできません。」

——しかし、ここ（幻想郷）に来てから何故か、そして初めて、これまでの人生が物足りないと感じた。突然異世界へ飛ばされた時の底知れぬ不安や妖怪に襲われて死にかけるのは叶うことならもう一生したくない経験だ。ただ、神社に来るまでの道のりで時折、胸の内霧が掛かった様な気分に見舞われた。

わからない願い、それはここに来てから無意識のうちに感じた「何か」なのかもしれない。

「その答えは『居場所』よ。可哀そうに、貴方にはその概念が無いのね・・・」

「!!!」

紫はまるで永一の思考に被せるように答えた。当然、彼は驚きを隠すことができなかった。

「フフフ：ますます気に入ったわ。そうね・・・じゃあ、願いなんて曖昧な言葉はやめにしましょう。私は貴方の意思を汲んであげる。それでどうかしら？」

彼は当然、何も口に出さなかった。何も考えないようにしていた筈だった。しかし、彼女はたちまち笑みが浮かべ、「決定ね」と一言呟くと彼に言った。

「怖がることは無いわ。居場所も、認めてくれる人も。ここには貴方が望む物の全てがある。安心してこの世界に身を委ねなさい。幻想郷は、全てを受け入れるのですから。」

その言葉は槍のように形を変え彼の胸の奥を貫く。今までに感じた事のない感覚がビリビリと響く度に不思議と視界が滲む。情けなく小さく唸るような声が初めて自分の声だと気が付いた。

——数時間後・・・

日が落ちた神社の縁側。永一の歓迎会という名目で、実質、スキマ妖怪主催のプチ飲み会が催されていた。

ちなみに主役のはずの永一は一切酒が飲めない。それは未成年という理由もあるが、こつそり母親が飲むビールを飲んでみた結果、二口目で卒倒した過去を持っているからである。父親の遺伝だ。

「あーあ。バカねえ。本当にここ《幻想郷》に残るなんて。あっち《現世》の方が便利な道具とかいっぱいあるんでしょ？」

幻想郷は結界によって現世から隔離された結果、技術の発展が遅れているのだという。

「その技術発展の産物は俺が持つても時計付き電卓以上にならない

けどな。」

「電卓…？」

「えっ？…じゃあ…算盤だ。」

「ふーん。」

永一は霊夢と魔理沙にスマートフォンを見せた。二人曰く、携帯電話はよく見るがスマートフォンは見たことが無いらしい。まして動く物は携帯電話ですらほぼ無いという。

スマートフォンを弄ぶ二人の反応は、ベタなタイムスリップ物のそれその物で見て面白。

それを肴にお茶を飲もうと湯呑を持つと、そこから紫が飛び出した。はた迷惑なランプの魔人である。

「(放心)。」

「全く、情けないわねえ。こんな事で驚いているようではお先真つ暗よ？」

「…普通に話しかけられないんですか？」

「しようがないじゃない。あの二人から貴方みたいな良い反応は見込めないもの。」

「かと言って俺を驚かす理由にはなりませんよね？」

「それでは約束通り私の暇つぶしに付き合っつて貰おうかしら。」

(せめて暇つぶしで驚かして欲しかった…)。

すると紫は何も無い空間をフアスナーのようにすると開き手を突っ込んだ。しばらくすると、彼女の手が入る程度のスキマにも関わらずかなり大きい布の塊が引つ張り出された。

永一は驚きすぎて感覚が麻痺しているのか四次元ポケット程度では大して驚かなかつた。紫は不服そうだ。

彼女は一言、「着てみなさい」と言うのと彼に布の塊を渡した。

広げてみると、それは袴だった。絹製で現し世基準ではかなり高級品かもしれないが、所々擦った跡があったり、過去に穴が開いたのか当て布がされていたりとお世辞にも状態が良いとは言えない。

両肩から腕にかけての網目のような模様や胸の擦り消えた五芒星の痕。袴にしては派手だと思つたのも束の間、背に巨大な陰陽対極図

が描かれている事に気づき啞然とした。ここまで厳つく模様が描かれてしまうと最早ヤンキーのそれである。

とりあえず、紫に言われた通り袴の袖に腕を通した。永一には少し大きく、若干袖が余り全体的にゆったりしている。彼の華奢な体が更に華奢に見える。

この場にいた誰もが絶望的に似合わないと感じざるを得なかった。

「…覇気の欠片も感じないけれどまあいいわ。貴方には私の下で、名付けて『八雲式陰陽道』を修得なさい。」

一拍分の静けさ。

「「ええええええええ!!?!」」

— T o b e c o n t i n u e d —

第五話 模方《もほう》

彼女が放つ独特の胡散臭さとは打って変わって変わって常人には理解し難く極めて難解な台詞が意識の隅々を駆け巡る。

「あんた何考えてるのよ！まさか、何か企んでいるんじゃないでしょうね!」

「なるほど。育ててから頃合いを見て喰うんだろ？流石は妖怪の賢者と言いたいところだ。」

「あら、失礼ね。そんな恐ろしい事は露ほどにしか思っていないせんわ。それに妖怪が妖怪を殺す術を教えるなんて最高に面白い暇つぶしだと思わない?」

と、紫は永一に目を向ける。彼自身、予想だにしない要求に思わず空に焦点を合わせた。

「安心なさい。約束するわ。私が貴方を殺すことは無い。だから貴方も約束くらい守るのが筋じゃない?」

「えっ——」

彼が目の前に広がっていた筈の世界から消えた事に気づいたのは紫に飛ばした筈の言葉が反射して消えた後だった。明るくも暗くもないが無限に広く感じられる絵に描いたような異空間に対する何とも言えない不信感を横目に何故か若干の期待も感じていた。そこに紫が現れるのはそれから間もなくの事だった。

「早速最初のレッスンに入るわ。覚悟なさい。」

「・・・はい。」

永一 of 天敵に捕らえられた小動物のような哀れな表情とは裏腹に紫は楽しげだった。

「まずは基本を叩き込むつもりなんだけど。貴方の能力は何?」

紫はさも永一に特殊能力があるかのように問う。八雲式陰陽道、初めから躰きそうな予感がした。

「能力・・・といえますと?」

「そのままの意味よ。勘が鋭すぎる、稀代の幸運持ちだ、とか。何か思い当たる節はあるでしょ?」

その時、彼の脳裏に他の思考を吹き飛ばしながら巨大な一単語が現れた。

『無い』と。

「そうですね……。勉強なら並みの人より出来ると思いますが……。」

「……………」

「……………」

気不味さに似た何とも微妙な空気が広すぎる異空間を覆い尽くす。

「……私の見誤りだったかしら。」

(そうでしょうね。)

「まあ、それは追々分かる事として本題ね。」

「はあ……」

『見誤り』だけでよく分からない事に巻き込まれているとしたら、この現状を吉と見るか凶と見るかは現時点では誰にも判らなかつた。

見誤りじゃない事を祈りたい。

「先ずは霊力コントロールの基本、刀印の結び方かしら。でも相手に悟られるから今回だけ。普段は使わせないように矯正するわ。」

「指の動きだけで悟ってくるような相手と戦う事なんてあるんですか？」

「私は少しでも指が動いたら警戒するわ。」

「……………」

紫は利き腕の人差し指と中指を突き出し、親指はそのまま指に沿えるよう指示した。永一が知る刀印は両手で結ぶ所謂忍者ポーズなのだが、八雲式陰陽道では「戦闘において両手を塞ぐのは論外」らしい。

彼は言われた通り見よう見まねで『八雲式』刀印をした。

「それじゃ、指先に意識を集中してみなさい。」

彼は指先に神経を集中してみた。

確かに指先から霊力が湧き出て来るのだが、水芸の失敗作のようにじわじわと流れ出るだけでとても彼女が求める物とは言えないだろう。

案の定、彼女は不服そうな表情を向けていた。

「微妙ねえ。なら見本を見せてあげる。こうやってやるのよ。こ・

う。」

紫は指先を永一の顔に近づけながら言った。指先から湧き出る彼女の妖力が腕にかけてぐるぐるすると鋭く輪を作る。

「なるほど。やってみます。」

永一はこれも『見よう見まね』で再現してみた。

彼の腕に巻く霊力の輪は紫ほどの鋭さや安定感はないが、我ながら初めてにしては上出来だと思う。

「努力はしましたが、やっぱり紫さんのようにはいきませんね。何かコツとありますか？」

と、彼は謙遜交じりに彼女に聞いた。が、笑っていたはずの彼女は目を思いきり見開き、顔を強張らせていて思わず恐怖すら覚える程だった。

妙な謙遜が気に入らなかつたのか、はたまた出来が絶望的過ぎて啞然としているのか。とりあえず謝っておくのが定石かもしれないが、謙遜が気に入らない相手ならば火に油だろう。

すると、何も考えられずわなわなと震える永一に紫が近づいてきた。全身から妖力が溢れ、オーラのように身に纏う様は逆鱗を撫でられた龍神を斯くやと想起させる程である。

「貴方、何を見たの？」

シンプル過ぎる一言が彼の精神に重くのしかかる。これは一般的には口封じに殺る寸前の言葉である。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！でも俺なんつっにも見ていません！ただ、紫さんの真似事をしたままで・・・それでも何か不味いものを見ているのならこの口が裂けようと誰にも喋らず何が何でも墓まで持ち帰ります！ですからどうか命だけは奪わないで!!」

「・・・私が貴方を殺す？そんな事しないわよ。でも何を見たの？」

「殺さない・・・拷問!!誰か!誰か助けて!!」

永一は断末魔を上げながら逃げ出した。だが、紫の空間で作った本人から逃げられる訳もなく、

「わあ。」

「ぎゃあああああああああああ!!!」

!!!!!!!

案の定、袴の袖から飛び出した彼女の餌食となったのだった。

「まったく。私に貴方を拷問する気も殺す気も無いわ。最初に約束したでしょう?」

「殺さない・・・ですか?」

「私は義理堅いのよ。」

永一はがくりと項垂れた。それが安堵なのか限界を超えた恐怖だったのかは彼自身にも判らなかつたという。

「じゃあ言い方を変えましょう。貴方は私の印を見て何を参考にしたの?」

「何って言われましても・・・」

彼は目に映った事を出来るだけ細かく説明した。彼には正直、真似た事に対してここまで言い寄られる意味が分からなかつた。

紫にある程度話し終えた所で彼女は先より胡散臭い表情に戻った。

「やっぱり・・・貴方が私に気づいている事に気づく前に、貴方は私に気づいていたのね!」

「????」

気持ちの悪い言い回しが普段よりも高い声で彼にぶつけられる。上機嫌とも取れる彼女の態度からは不思議にも微塵も良い心地がせず、暑くもないのに脂汗だけがだらりと流れた。

「気分が変わったわ。貴方に課した暇つぶし、免除することにしたわ。」

「え、いいんですか?」

「もちろん。でもその代わり、暇つぶしの域を超えた肩慣らしに付き合って貰うわね。フフフフ・・・覚悟なさい。」

永一は紫の眼光の前に抜け殻と化した。今思えば、少しでも妖怪に人間の感性を求めたのが大間違いだったのかも知れない。

人知を超えた暇つぶし改め肩慣らしは時間を忘れる程続いた。

——博麗神社

縁側に現れたスキマから紫が顔を出した。

「お待たせ。お酒、まだ残ってるかしら?」

「なんだ紫か。随分早かったじゃないか。残ってるも何も取りに行くって席を外したのは紫だろう?」

「そんな事より永一はどうしたのよ?まさか食べてはいないと思うけど...」

「まさか食べる訳ないでしょう?でも、今宵のいい肴にはなるでしょうね...」

紫がスキマから足を踏み出すと続いて永一も現れた。彼の表情は何かを超えて何かを悟ったかのような涼しい表情をしている。その只ならぬ表情に霊夢と魔理沙は啞然としながら互いに目を合わせた。

「永一...大丈夫か?」

彼の返事には思いの他精気があった。

「ん、魔理沙と霊夢か。久しぶりだな。俺は大丈夫だ...全くもつて...でも——」

彼はジワリと額を汗で濡らし、軽く深呼吸をしてから続けた。

「あの空間ではな長時間死ぬほどの苦行をこなしても、一定の周期で疲れがりセットされるんだ。その上眠くもならないし空腹も感じなかった。人間じゃなくなつたみたいだったよ...」

二人は彼の言葉から得体の知れない何かの一端を垣間見た気がして思わず息を飲んだ。

「あらあら。永一、そんなどうでも良い経験話しても酒が不味くなるだけよ?そうねえ...霊夢、ちよつと飛んで見せなさい。」

脈絡のない話を突然振られても困るだけである。

「何するつもりよ?それに何で私が?」

「私や魔理沙じゃ『動力』が違うのよ。貴女じゃないと正確じゃないわ。」

「...?よくわからないけど、お酒の事もあるし。」

霊夢は訳も分からぬまま地を蹴った。それきり、彼女の身体は地上の呪縛から解放され、当然のように宙に留まっている。

「ふむ、上々ね。では永一、出来るわね?やってみなさい。」

永一は有無を問わせない紫の言葉には思わずたじたじだが、長すぎる数分間は彼にそれくらい物ともしない程度の自信と技量を与える

のには十分であった。

彼は心身を落ち着かせると彼女に巡る霊力の流れを視た。グルグルと鋭く旋回しながら全身に走る霊力は見事なまでにくつきりとし、一切の歪みを許さないようであった。

つまり、達者な者の動き程視やすい物は無いのだ。

彼はゆっくりと膝を曲げ、つま先で地を蹴った。それから彼の身体は煙のように立ち上り、落ちる事は無かった。

「驚いたわ。外来人があの短時間で飛べるようになるなんて……。」

「本当だな。霊夢は自力で飛ぶのに苦労したもんな。私と違って。」

「昔の事なんか覚えてないわ。」

紫は二人の会話にニヤニヤしながら言った。

「フフフ……。案の定、貴女たちは勘違いしてくれたようね。私が只の空を飛ぶ人間《フライングヒューマノイド》を見せて満足する訳ないでしょう？ 永一は、霊夢の霊力流を再現したのよ。」

霊夢と魔理沙は紫の難解な言葉に互いに目を合わせた。

「どういう事？」

「妖術や魔法を使う時、必ずその対価として自らの力を使うわ。それは勿論、空を飛ぶ事も例外ではないわ。霊夢、術を使う時、貴女は具体的にどうしてるの？」

「どうって……普通に札とか投げて適当に……。」

「……魔理沙は？」

「私は事前に用意した魔力を道具に込めたり、それ自体を変化させるぜ。」

「じゃあ、魔力を込めたり変化させる時は？」

「そんなの、決まった方法や手順を踏んでやるが、ここから先は企業秘密だぜ。」

「そう、手順よ。永一はその『方法』や『手順』が全て、肉眼で『力の流れ』として見えるのよ。名付けて『流れを見る程度の能力』ってところかしら。」

「何だって!?!」

驚愕に表情を歪める魔理沙に対して、はて何と言わんばかりの霊

夢。

「まだ気づかないのか？あいつはさつき、お前が飛ぶ姿を見てその通りに真似て空を飛んだんだ。つまり、術を完全に模倣して使うことも、術の弱点を一瞬で見つけることも朝飯前って事だ。」

「うーん、術の弱点がバレるならそれを補う術を使えばいいよな……。私の記憶の術を真似て来た妖怪は地底にいるし、それに慣れない術なんて使えたものじゃないわ。それに、幻想郷には時間を止める人間もいれば不老不死の人間もいるし、そんなに珍しい能力でも無いんじゃない？」

魔理沙の好奇心と霊夢の無関心がぶつかるともなくすり抜け、勝手に相殺される様は傍観者の紫には少し期待外れであった。

「それよりも紫。アレ、不味いんじゃない？」

霊夢が空中を差し指摘する。彼女が指差す先には先ほど飛んだきり忘れられていた者が隼のように速く、蠅のように不規則に上空に暴れまわっていた。

紫のスキマに回収され地上に戻ると永一は膝を付きだらりと腕を下ろし、「助かりました」と一言呟いた後、この身に命がある喜びに感謝し言葉なく安堵した。美しい袴の袖が情けなく地面を擦る。

「なあ霊夢……なんというか。」

「覇気が無いわね（よな）」

霊夢と魔理沙は失笑し、紫は大きいため息を吐いた。

「覇気が無い」。永一に向ける言葉でそれ以上に的確に刺さるものは無いだろう。紫は、自らが弟子に取った青年の酷い言われ様が気持ちいい程に合点がいつてしまった自分の分もため息を吐くのだった。

——数分後

空には月が昇り夜の幻想郷を照らす。丁度良かった外気温も今では肌寒くなり、厚手の上着が恋しくなる。

「そろそろ、今日の本題よ。判つての通り、貴方はまだ未熟も未熟。でも貴方が能力と私の教えを完全に活用出来たならばもしかすると成功するかも知れません。」

永一は成功率1割以下と見た。

「フッフ：橙以来ね。さあ見せてちょうだい。貴方の式神を！」
式神の術の成功。それは彼の幻想郷暮らしの土台であり、柱であり、屋根になるものだった。

— T o b e c o n t i n u e d —

第六話 式神

式神にはおおまかに上級と低級の二つが存在する。

まず、低級式は主に対象を動かす等の簡単な命令をする時に使い、主に護符などの道具や小動物等に付ける事が多い。これは必要な霊力が少なくて済むため、全く靈感の無い人間でも訓練次第では作成できるものである。神社や寺院に売られているお守りや札の中には低級式を施している物もある。

一方で上級式は複雑な命令をする時に使う。現代風に言えばAIに似た物でいちいち式に命令する必要はないが、その代わりに鬼神や神霊などの強力な霊を付与させる必要がある。人形などに付与させる事は勿論、霊と術者が強力なら妖怪をも服従させる事が出来てしまう恐ろしくも魅力的な術だ。

しかし、鬼神、神霊を式神の核とする場合、前にも述べたように術者の実力も問われる。使役させる筈の霊に返り討ちに遭い、逆に取り殺されては元も子も無い。普通の人間は勿論、手練れた術者でも触れない事が多い代物である。

そして今回、永一が挑戦するのは察しの通り後者である。彼が上記の一行目より詳しい説明を受けていないのは言うまでもない。

「初心の貴方に鬼神を一から用意させるなんて鬼の所業は致しませんわ。この周辺に私が用意した鬼神が放されています。それを貴方の霊力で引きずり出しなさい。」

「はい。」

永一の中での鬼神のイメージは幽霊に毛が生えた程度でしかない。まさか紫が初心者自分に命の危険が伴うような恐ろしい事はさせないだろうと高を括っているのである。（もしくは言い聞かせている。）

ちなみに、魔理沙は初心者に鬼神を対峙させる時点で鬼の所業だと思ひ、霊夢は「変な物放さないでよー」とご立腹である。

「よろしい。手順は教えた通り、この周辺で一番力を持った霊よ。始め！」

永一は刀印を結ぶと目を閉じ、深呼吸をしながらその指先にありつたけの霊力を込めた。球が楯円に、楯円が柱に、指先に集まった霊力が行き場を求めて歪む。高密度に圧縮された霊力が悲鳴を上げているのだ。彼にしか見えない彼の未熟さである。

一方で神社の縁側。山菜の天ぷら少々を酒のつまみに小宴会を続ける二人も退屈そうにその様子を見ていた。上位霊との対峙の危険性は嫌というほど知っている。実力も含めて二人は紫を信頼しているが、ただの人間にしか見えない永一がやはり心配であった。

魔理沙は瞑想する彼を見て首を傾げた。

「なあ、霊夢。永一はずっとあの調子だが、一体何をしているんだ？」
魔理沙はつまみを口に入れつつ霊夢に問う。

「何って、式神の術でしょ。」

霊夢もまた、箸で天ぷらをつまむ。空を仰いでいた猫の興味が幾度も口と皿を往復する二人の箸に移った。

「そんな事はわかってるぜ。だがここに肝心な鬼神はいない。何かするならまず鬼神を用意してからじゃないのか？」

「そうなの？」

明らかに余白が多い皿。一瞬互いに目を見合わせると再び視線が皿に移った。

「・・・この手の術はお前の専門じゃないのか？」

「興味がないから知る由もないわ。」

二組の箸が凄まじい闘気を帯び、一直線に皿上の小さなつまみへ向かう。

「あら、案の定無関心ね。もう少し勉強熱心になっても損は無いわよ？」

いつの間にか二人の間の空間に紫がいた。驚く二人をよそに皿に残った最後のつまみを口の中に放り込んだ。

「永一の監督はもういいの？」

「今はね。用事の序でに勤勉な魔法使いに答えを教えに来たのよ。」

霊夢は天ぷらの腹いせに猫を撫で始めた。

「聞いていたのか。それはご苦労だな。折角なら教えてもらおうか。」

「ソナーって知ってるかしら？」

「ああ、河童の発明にあつたな。川の脈を測るとか。」

「そう。具体的には水中に放った音波の反射を捉えてその様子を知る為の道具。漁師の目ね。」

「・・・それとこれに何の関係があるんだ？」

「百聞は一見に如かず。丁度永一の準備もできたみたいだしね。」

永一の指は、彼のキャパシティを裕に超える膨大な霊力を帯びながら薄暗い神社の境内には眩しすぎる程に輝く。

微動だにしていないのにも関わらず全身から汗が吹き出し、心臓は異常な鼓動を止めない。身体が悲鳴を上げているのは言うまでもなく、そう感じている間にも体力は震える程に減り続けている。

地面と水平に指で空を切ると、絵筆のように霊力が弧を描いた。半円に満たない線は彼をぐるりと囲うように広がり、やがて美しい輪となって浮遊した。そして永一は両手で刀印を結び勢い良く腕を広げた。同時に輪も彼の動きに合わせてように大きく広がり神社周辺の一帯を巡る。

霊力の弧は当然、霊夢、魔理沙の元にも届いた。

「なんだこれは、弾幕か？」

「あら、まだわからない？永一は音の代わりに霊力を放ち、自らがソナーとなって鬼神を探しているのよ。決まった身体を持たない霊体は霊力を歪ませ、永一《レーダー》に『違和感』として伝わる。強力な霊体は違和感も大きいから、それを厳選して式とするのよ。」

「型破りな発想は面白いが魔法の参考にはなりそうにないぜ。」

「当然よ。魔法とは根本が違いますわ。」

その時、大きな拍手が一度、境内に響いた。同時に神社がギシギシと家鳴りした。

「紫さん、捕まえました！」

「あら、随分早かったわね。かまぼこ猫、おいでなさい。」

すると紫は霊夢の膝で身を預けている猫を抱き抱えると永一の方へ向かった。天ぷらだけでなく猫まで持っていかれ、彼女の不満はついに表情にまで現れた。

「捕獲できたのね？」

「はい。でも流石に疲れました……。こんな時はチョコレートでも食べたい気分です。」

「あら、幻想郷でチョコレートなんて手に入らないわよ？」

「え、そうなんですか!？」

永一は初めて幻想郷にがっかりした。

「それにしても眠いなあ……。紫さん、少し仮眠を取ってもいいですか？」

「あら、眠いの？まだ式神完成して無いわよ？」

「すみません。さっきのアレで異常に疲れてしまったみたいで……。少ししたら起きますので……。」

永一はあくび交じりの声で言った。水泳後の国語の授業並みの快眠が期待できそうだ。

「そうねえ……。うーん。でもまあ、永一も頑張ったし多目に見ましよう。」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて……。」

彼は自力で縁側まで歩くと、柱に寄りかかり目を閉じた。

「あ、そうそう。眠ると死んでしまうから気をつけなさいね。」

「……………ん……死……………」

「ええ。鬼神を直接霊力で縛っているのだからその間は常に消耗し続けるわ。霊力《いのち》が無くなってきているのだから眠くなるのは必然ねえ。」

その時、自分でも驚く程驚き、紫の顔を四度見した。ただ、四度見していたのは永一だけではなかった。

「そういう事はもつと早く言え!!!」

「何戯けた事言ってるのはバカ妖怪!!!」

「お お お おおお!!!」

人は極限状態になると声が出なくなること永一は身をもって実感した。

すると今度は霊夢と魔理沙が永一の胸ぐらを掴み

「起きろおおおお!!!」

思い切り、しかも往復でビンタした。

「いたいたいたいたいたいたいた！！！！」

数分後・・・

顔の痛みと睡魔に苦しみながらではあるが、永一の式神との契約が始まった。

まずは鬼神の召喚である。鬼神はあくまでもソナーに要した霊力を集中させて「捕まえた」だけの状態である為、この場に連れて来る必要があつた。

紫は地面に傘を突き刺して永一に指示した。

「霊力を込めながらこの傘を抜きなさい。」

「・・・これで鬼神が召喚されるんですか？」

「当然、私がそうなるように細工したのですから。」

彼はまじまじと傘を眺めたが、見れば見るほど只の派手な傘である。ただ、半信半疑で霊力を込めてみると異常なほど通りがいのので気持ちが悪い傘だ。

彼はゆつくりと傘を抜いた。

——「断と続の境界」——

傘が地面から離れた瞬間、目の前にある巨大な霊力体の存在に気が付いた。霊体は彼の霊力に包まれ微動だにしない。肉眼では不気味な霧のように見えるそれは、元々この場にあつたかのように空間に馴染み、現れた瞬間、彼自身も不気味なほどに全く驚かなかつた。

「召喚は成功みたいね。鬼神は私が押さえるから安心して力を解きなさい。」

永一は深呼吸をしながら少しずつ霊力を抑えると、霊体から彼の霊力が抜けていき同時に彼の元へと戻って行つた。

これでやつと命の危機から解放されたのである。

彼の霊力が抜け、霊体の元々の形が露わになってきた。

「おやっ・・・」

紫は目の前の予想外に首を傾げた。こんな霊体に見覚えは無かつたのである。

実体のない霊体は不安定で、何かの拍子に形が変わってしまうことはそう珍しく無い。実際、永一の膨大な霊力に揉まれたせいで霊体を持つ元々の霊力は彼のものと同化してしまっている。しかし、その性質を一瞬で変える事は容易ではない。例としては元が妖怪や死霊から信仰で神になったミジヤグジ様や菅原道真などが代表的だ。

彼女が用意した鬼神は恨みの強さから祟りを起こし祠に封じられたが、時間と共に忘れ去られて妖怪化しかけていた鬼神（超危険）である。

対して目の前にいる霊体は極めて純粹で、神霊に近い存在である。紫が用意した方は経緯を見ると多様な性質変化を経た霊だが、根底には「恨み」というマイナスの面がある。普通の霊よりイレギュラーはあり得るが、眼前の霊のような純粹さを得るのは難しいだろう。

何にせよ強力な霊体である事に間違えない。今は強力な式神との契約の成功の方が重要で、用意した霊か否か今はどうでもよかった。契約の儀。式神の術における最終過程かつ最重要過程である。と言つても、最難関の鬼神を屈服させる過程はソナーによる捕獲の際に意図せずに済ましていた為残るは命令である。プログラムの施されていないソフトは只のデータに過ぎないように、命令されていない式神は霊力を食う置物である。「式神」というソフトウェアの核であるが故、失敗すると誤作動やバグを引き起こし、最悪は全てが水の泡になる。

「放すわよ。幸運を祈るわ。」

そう言うと紫は霊体を閉じ込める結果を解いた。永一は変わらず静かに浮遊する霊体に迫ると、再び刀印を結び霊力を込めた。

「左青龍避万兵、右白虎避不祥、前朱雀避口舌、後玄武万鬼。我、四柱の神の加護を受け、聖域を齎す者なり。」

詠唱に続いて四方に霊力の柱が立った。その瞬間、彼の周囲の空気が一気に変わった。それは秋風の冷たさとは違う、鋼のように重く、冷たく、張り詰めた空気である。彼の肌に触れるや否やピリピリと針のように彼に刺さった。

四神の加護は彼にとってには余りにも荷の重すぎる力だった。

彼は指先を前歯で噛み切る・・・と痛いので、森で転んだ時に作った傷の瘡蓋を剥がしそこから出た血を指先に塗った。

「紫さん、準備できました。付与対象の護符をください。」

「言われなくてもわかってるわ。」

永一の手元に紫のスキマが現れた。スルスルとファスナーのように開くスキマに彼が手を伸ばすと、護符ではなく温かい何か彼の手のひらに足を付いた。手のひらには次第に体重がかかり、すぐに支えきれなくなり手を払ってしまった。驚いてスキマの下を見ると、かまぼこ猫が座っていた。

「紫さん！何出してるんですか!?!」

「見れば判るでしょう?猫よ。」

「そうじゃなくて、式神は普通、人型やら形代を元に生成するんじゃないんですか!?!」

「ええ、そうよ。でもこの子を式にした方が面白そうだから。しかも、上級式神にはしっかりと命名が不可欠よ。貴方の猫なんでしょう?式神にもこの子の名前を付ければ丁度いいじゃない。」

「こんな話一切聞いてませんし、何もかもが違いますよ!この猫は無縁塚にいた野良猫で、決まった呼び名もまだ無いんです!」

「無縁塚・・・」

紫は一瞬真面目な顔になったと思ったら今度は邪悪な笑顔を浮かべて永一にとってこの状況では脅威の提案した。

「誤差の範疇ね。永一、早急にこの猫に命名なさい。貴方の式になるのだから良い名前を付けてあげなさい。」

「はあ!?!」

今、永一にとって何故脅威なのか。それは四神の加護の結界を維持する時間に限りがある点と、彼の優柔不断な性格の為だ。

まず四神の加護とは、結界内の霊力を浄化、そして彼に不足した技量の補助をする為の物である。しかし、この結界術も十分高等術である為、使用時間に厳しい制限がある。その為、結界が張られている短時間に複雑な式を打たなければならずそれだけでもかなりの難題だったのだが、命名というさらに恐ろしい難題を吹っ掛けられたの

だ。

自販機のジュースすらすぐに決められない彼が一つの尊い存在の命名に要する時間は計り知れない。もし、早急に命名できたとして、もし式を打っている途中で結界が破れば、未熟な永一の場合逆に魂が霊体に取り込まれ兼ねない。

フル回転する脳、猫に関する記憶が想起し錯綜する。彼に悩む時間は残されていないなかったが、今回は思いのほか時間は取らせなかった。自然に浮かんだと言っても過言ではなかった。

その名の由来は猫に關しての今に至るまでの記憶で一番印象に残っている事から生まれた。

「チョコ泥棒。チロル・・・いや、きなこだ！主、土御門永一の名において命ず。式神『きなこ』、其の命を其の身に刻み、我が鉾と成りて忠義を示せ！」

永一が霊体になりつたけの霊力と術を込めると、それは蒼白く輝きながら水のような流動を始め遂に形を失った。

「・・・上出来ね。さあ、かまぼこ、いや、『きなこ』に力を与えてあげなさい！」

彼は右人差し指の先を噛み切ると、紫から渡されていた札を取り出し流血に霊力を込め文字を書き綴った。

「我が血を代に契の儀を取り行う。主の名は土御門永一。式の名は土御門黄菜子！」

永一は霊体に向かって札を飛ばすと『黄菜子』と書かれた血文字と霊体が反応して互いに共鳴するのを感じた。

そして彼は再び刀印を結びその指を猫の方へ向けた。霊体はそれに倣って真っ直ぐと猫へと放たれた。その様はまるで流星を思わせる美しさだったという。

霊体は猫を包むと徐々に小さくなっていった。鬼が出るか邪が出るか。その様子をその場にいる一同はまじまじと見つめていた。

そして光が弱くなり、段々と式神の姿が露わになる。

「はあ。まったく・・・」

透き通った呆れ交じりの気怠い声。

「どうして私の同居人は・・・」

小柄な身体に細い手足。

「こども甘い人間ばかりなのかしら。」

思わず後ずさりする程の覇気。

鬼や邪とは程遠い、綺麗な長い黒髪の小町娘こそ、土御門永一の生涯における最初で最後且つ最強の式神となるのである。

— T o b e c o n t i n u e d —

第七話 天衣無縫の武神

「・・・先生と相手の親御さんから連絡があったわ。永一、どうしてこうもトラブルばかり起こすの?」

強く睨みつける両親の姿。永一はそれに負けじと鋭く睨み返した。

「俺は何も悪い事はしてない。仕掛けてきたのはアイツだ。」

「そうなのかも知れない。だがお前はその前に悪霊の話を持ち出したそうじゃないか。家の外でそういう話をしちやダメだと何度言ったらわかるんだ?」

毎回の決まり文句。永一は親に対して抑えていた鬱憤を刃のように振り回した。

「父さんと母さんだつて見えてるじゃないか!俺が嘘を吐くと怒る癖に都合が良い所では当然のように嘘を吐かせる。どっちが嘘つきだよ!分かってるだろ、誰のせいでこんな思いをしていると思ってるんだよ!」

「それは・・・」

「もう沢山だ・・・言い訳なんか。俺は普通になりたいんだよ!こんな、こんな呪われた家系になんか産まれて来るんじゃない!!」

両親の若干の驚く表情の後のとてもし悲しい顔。それが鉛のように重い鈎針となつて心に突き刺さり、決して放さないのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ぎゃっ!!!」

悪夢で飛び起きるのは久々で、気持ちがいい程に目は冴えているが目覚めは最悪である。小学生の頃、怒りに任せて親へ言い放つてしまった冷たすぎる言葉。両親とはその後きつちりと和解したのだが、罪悪感からのトラウマが未だに夢にて想起されるので恐ろしい物である。

幻想郷に来て二日目。色々あり過ぎて親の存在などすっかり忘れていた。結果的に無断外泊、もとい無断独立をってしまったている訳で、両親の心配する顔は容易に想像がつく。ただ、何故かその辺は一切気にしなくとも大丈夫な気がした。根拠は無いが直感は信じるク

子だ。

そんな事より永一が心配しているのは今の状況である。一切見覚えの無い広い和室に自らが眠っていた一揃いの布団。いつの間に眠ってしまっていたのか、今に至るまでの一切の経緯が思い出せない。その上頭が割れるように痛い。

その時、入り口の縁側の方から凄まじい妖力がこちらに迫るのを察した。彼は縁側に続く障子の戸から距離を取ると刀印を結び身構えた。

障子の奥に動く巨大な影。鶯張りの音が一步一步近づいてくる。それは部屋の中心部辺り、つまり彼の布団近くの戸の前で動きを止めた。木に爪が掛かる音。障子の戸は擦り音を立てる事無く静かに開いた。

「もう起きていたのか。具合の方はもう大丈夫なのか？一応、胃薬と二日酔いの薬は持って来たけれど。」

大きな影の正体は紫の式神で九尾の妖狐、八雲藍だった。その大きな尻尾のせいでこちらからは大きく見えたのだろう。

永一は八雲藍を知っている。しかし不思議なことに、何処で会ったのかはさっぱり覚えていない。

「藍さん、非常に妙な事を聞くとと思うのですが、ここは何処ですか？」「ん？ああ。ここは紫様のお屋敷だ。昨日の宴会で酒を飲むなり卒倒したきりだから覚えてないのも無理もないさ。」

宴会、酒。こんな単語にまつわる記憶など彼の記憶に存在しなかった。

「宴会？俺、酒なんか飲んだんですか？未成年なのに？」

「覚えていないのか？黄菜子が出来たすぐ後に紫様がお前と黄菜子の歓迎にと宴会を開きなさったんだが、主役のお前は酒を飲むや否や気絶したんだよ。私も長く生きてきたが、こんな下戸は初めてだ。」

「つまり、この割れるような頭痛は……」

「二日酔いだな。この薬を飲むといい。効果は保証するよ。」

枕元に置かれた盆の上には水の入った湯呑と蓬萊薬局の薬袋が乗っている。彼は中学の授業で行われたアルコールパッチテストの

結果で自らの恐ろしい程に脆弱な酒耐性を知り、何よりも未成年である理由もあつて、自分が酒飲をしたという事実にはわかにも信じがたい物であつた。

粉薬は口に入れるや否や思わず顔を顰めたくなるような苦味が口に広がつた。良薬口に苦しであつてほしい所だ。

「そうだ、朝食は食べられるか？もし食べられるようなら永一の分も用意するよ。」

「頂きます。」

この異常な空腹から察するに永一は宴会の最序盤に倒れており、従つて殆ど何も食べていないのだった。

邸は食卓までの道のりだけでも彼を圧巻させるには十分すぎる程の景色が広がつていた。国宝の仏閣にも引けを取らない庭園、優雅な四神が描かれた襖、邸の細部にまであしらわれた装飾。彼はそんな風景に心を奪われながら、自分はこんな場所で眠つていたのか、と驚きながらも心躍るのだった。

邸の見学はあつという間に終わりを告げ、居間へと到着した。藍が戸を引くと温かい空気に乗つて食欲をそそるいい匂いが永一の嗅覚を刺激する。

いざ、部屋に入ろうと一歩踏み出すのと同時に、正面に広がる食卓にて幸せの具現のような表情で料理を味わう少女と目が合った。彼の式、土御門黄菜子である。その時、一瞬だけ彼女の箸が止まったように見えたが、彼女は彼の事などお構い無しに茶碗の大盛りご飯を頬張る。

ここは八雲紫の邸、出る食事もアブノーマルな物かと不安と期待の半分半分だったが、彼女が食べる食事は一般的な和食だった。

「じゃあ、食事の準備をしてくるから少しの間、空いてる場所でくつろいでいるといい。」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて。」

そう言うと永一は黄菜子のはす向かいの席に座つた。ただ、今の彼は何も考えずにくつろげる状況ではなかった。幻想入り直後からずっと一緒だった筈なのだが、姿が変わつただけで初対面のようにそ

の上彼女と会話した記憶まで曖昧で、どのように接すればいいのか分からない。むしろ、完全に初対面の方がやり易いとも思う。愚かにも飲酒してしまった自分を呪うばかりだった。

そこで永一は、初っ端から記憶喪失を暴露し、自分から話を切り出すという賭けに出る事にした。そこで、フランクな口調か真面目なトーンかというどうでも良い所で迷っていると黄菜子が机に空になった茶碗を静かに置いた。

「記憶が吹っ飛んであたしとの接し方がわからないって顔してるけど正解？」

黄菜子は永一に表情をニヤニヤとさせて言った。彼はあまりにもピンポイントで当てて来るので露骨に驚いてしまった。

「もしかして当たり？安心してよ。昨日は大して話はしてないから。何せ話し相手が早々に離脱しちやっただからね。」

彼女の皮肉100%のある意味純粹な笑顔に当人の永一は流石に苦笑いである。

「お前はあの猫・・・なんだよな？ここに来るまでの間、いろいろと助けてくれてありがとう。」

「ん？永一が勝手に付いて来たんでしょ？ていうか、藪から棒ね。一応ファーストコンタクトなんだから、自己紹介辺りから始めるもんじゃないの？」

「いや、まあ。もし会話をする機会が出来たら最初に言いたかったから。」

「ふーん。意外と義理堅いんだね。じゃ、あたしから一つ聞いていい？」

永一は当然と言わんばかりに首を縦に振ったがそれからが恐ろしかった。

和やかだった空気が一変してヒヤリと冷たくなり、それと連動するように、笑顔だった黄菜子の表情は何処までも無表情だった。

その時、彼女の背後から黒に近い深い紫色をした不定形な「何か」が現れた。「オーラ」とでも呼ぶのだろうか、それはたちまち無数の剣の形を成して部屋を覆うようにして支配した。

精神を締め付ける感覚に背筋が凍り付く。それは彼の視覚限定の情報からではなく、精神、五感、魂が直感に近い形で底知れぬ何かに圧倒されてしまったのだ。オーラは消え、同時に彼女の口がゆっくりと開く。

秒にも満たない間の出来事だが、永一の記憶に深く刻まれたのは言うまでもない。

「永一はあたしに『式神』の術を施したんだよね？」

「あ……ああ、そうだけど……。」

「何を命じたのか話してくれない？」

「えっと……術者の味方になる事と、対象が望んだ姿になれる事と、対象の自我を主とする事。細かいのは色々あるけど、その辺は紫さんの指示に従って——」

「本当にこれだけなの？」

「ごめん！何かマズかったか？悪気は無かったんだよ、これだけはわかってくれよ……。」

彼女の威圧を籠らせたような声に反射的に謝ってしまった。

それに対して黄菜子は一度大きな溜息を吐くと少し頬を膨らませて永一を睨んだ。

「やっぱり、自己分析の通りだった。永一はこの危険性を何つつにも分かってない。甘いんだよ！」

「えっ?」

黄菜子は顔を赤くしながら永一を怒鳴りつけた。突然怒り出した事にも驚いたのだが、それ以上に彼は先の恐ろしい一瞬を見た後でただ普通に怒られている事に驚いた。強いて言うところ、一切恐くない。

「あんたは昨日今日に会ったばかりの私にリミッター無し of 便利な力を与えたの！もし私が姿を変えた妖怪だったらどうするつもりだったの？幻想郷に外来人を守る規則は無いからね。」

前話でも記した通り式神に成された命令はその全ての要となる。よって式神にとって命令は絶対であり破ることも叶わないのだが、黄菜子に施されたものは「命令」という制約からは逸脱したものしか無かったのだ。自我をそのままに、生き方を選べる力。つまるところ、

永一は黄菜子に一切の制限を与えなかったという事だ。

「・・・まあ、確かに危なかった訳だけど、結果的に今生きてるし、黄菜子の優しさに万歳という事で・・・」

「この期に及んで何言ってるのよこのバカ。あーあ、外来人は平和ボケしてるって聞いたけど、ここまで頭悪そうで脳内お花畑な人間が私のパートナーだなんて・・・」

その時、永一の何処かのスイッチが入った。

「あのさあ。散々俺の事貶してるけど、お前は俺の式神だからな？その上、お前の言う通り便利な力を得てるし自由だってある。例えば、お前が持つてるその箸。猫のぷにぷに肉球で握れるとは思えないが？ありがた〜い叱責もいいが、お礼の一つぐらい言っても損は無いだろうさ。」

「何か色々勘違いしてない？あたしは永一のクドい甘さがあたしの足を引っ張る事が一番嫌なの！一食でも抜くようなことがあったら承知しないからね？それと、あたしは好きで式になったわけじゃない。わざわざ永一の式になってやってるのよ。よってあたしは永一を主として扱う気はないから。全く、あたしの優しさに万歳ね。むしろお礼を言っただけなのよ。こっちの方なんだけど。」

「ならなんで・・・」

「お前は俺の式になれたんだ？——と言いかけた所で永一は口を噤んだ。対象の自我を主とする命の中には、黄菜子本人が式となるか否かの意思を汲む意味も含まれていた。今、彼の目の前にいる式神黄菜子は彼女自身が選択して決めた結果なのである。」

「・・・調子が良いのも今の内だ。ところで黄菜子、お前は食べる事が相当好きと見た。」

「それがどうかしたの？」

「なに、いざれ分かるさ。」

黄菜子はその言葉が全く解せないようだったが、永一は彼女を掌握する最大の武器として機能するだろうと相当の自信があるのだ。

「えーっと、そろそろいいかな？」

藍が永一の食事を持ってやってきた。遅いと思ってはいたが、どう

やら二人の口論が収まるのを待っていたらしい。空気を読んで来なかった彼女の行動だったが、彼は逆に無駄な気を使わせてしまったように少し申し訳なくなった。

「黄菜子、紫様から伝言を預かっている。『今すぐ庭に来なさい』だそうだ。」

「了解しました。それにしても何かなされるのですか？永一でなくあたしが？」

「皆目見当も付かないな。そもそも白昼に活動なされている事自体が珍しい事だ。しかも二日連続で。」

妖怪は夜行性なのか、と勝手に解釈したが目の前の働き者の狐妖怪は朝早くから家事の全般をやっていたらしい。そもそも狐の多くは夜行性である。

「永一も食べ終わり次第来るといい。待ってても暇だろうしな。」
「はい。」

確かに黄菜子の言う通り自分ではなく彼女が呼ばれるのは少し妙である。関係ないとは言え、何が起るのか気にはなるので彼は急いで朝食を完食した。

——八雲邸・大庭園

庭は居間と繋がる縁側から降りた所に広がっていた。真っ白の枯山水の上を幽玄に聳える四季の古木。そして池に映る青空が眼前に広がる絶景を引き立てている。

黄菜子たちは枯山水の中心にいた。紫はこの庭園には紅く異質で巨大な球体に寄りかかり黄菜子と会話をしている。会話の内容までは聞き取れなかったが、それを聞く藍は何やら顔を引きつらせている。

「——大丈夫なのか？これはお前が思っているよりも厄介な相手かもしれないぞ？もう少し余裕を持って……」

「このレベルは十二分に余裕を持った結論ですよ。藍様の御心配は分かりますが、これでも一勢力を仕切る立場でござります。」

「そういう事。本人もそう言っているのだから、尊重してあげるのも

いいでしょう。」

「ううむ……」

藍は表情を曇らせるとまじまじと紫と黄菜子の顔を仰いだ。後から来た永一にこの状況はさっぱりだが、黄菜子が何か無茶を言ったという事は容易に想像がついた。

「紫さん、おはようございます。うちの黄菜子が何か我俣でも言いましたか？」

「そんなことは無いわ。藍のいらぬお節介よ。」

「いらなくてもお節介は焼きたくなります。」

藍は依然と困った顔をしている。一方の黄菜子は何事も無かったかのような顔で平生を保っている。

それはさておき、永一は先ほどからずっと目の前の謎の球体が気になっていた。初めて視界に入れた際には真つ赤な球体だと思っていたが、近くで見ると初めて白い部分に気づいた。角度を変えてよく見ると、その球体は巨大な陰陽対極が形取られた物であることが分かった。

見れば見る程不気味である。

「あの紫さん、この球体は何かのオブジェですか？」

「これは私が作成した傀儡の『神玉』よ。少し前までは結界の警備と修繕の為に稼働させていたのだけど、何者かに壊されてしまったのよね。まったく、悪質な悪戯よね。」

「そのお陰で私の仕事は倍に……」

藍にはその苦労人顔が型に嵌ってしまっているらしい。そのせいか失礼ながら永一はその顔が似合っていると思ってしまった。

ここで言う傀儡とは、あらかじめ造形と施術を施した抜け殻、現代で言うロボットである。術の構造は式神のそれと似ているのだが、依代に独立した命令が成された傀儡は鬼神を運用させずとも燃料（霊力）だけで動かすことが出来る。ただしパター的な動きが多くなりがちなので、命令の変更も容易に出来ない為、機械的な作業には向いても変則的な作業には向かない。

「何となく見えてきました。神玉を使って黄菜子に何かさせるのです

ね。」

「普通に考えてここで神玉を使わない方がおかしいでしょ！」

黄菜子から間髪入れずに突っ込みが飛んでくる。確かにそうである。

「しかも、今からする試験は紫様が永一の為を思つてのものなんだから。ま、本当はその必要は無いくらいなんだけどね。」

「そうなんですか？と云うか試験とは一体・・・？」

すると紫はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりの表情で答える。

「試験内容は、被験者、土御門黄菜子による神玉の討伐よ。未熟で温室育ちの貴方を守る上で黄菜子の実力が十分か否かを、修理した神玉で測ろうと思つていたのよ。」

「いた、という事は今は違うのですか？」

「ええ。黄菜子にその事を話したら『折角試験をするならもつと強い相手にして欲しい』との要望があつたのよ。だから趣旨を変更して、黄菜子の実力がどの程度なのか測ることにしたの。そこで、神玉を再調整して戦闘用に改造したのがここにある『神玉・改』なのよ。傀儡とは言えその辺の妖怪程度なら木っ端微塵に出来る実力は備えているわ。」

「約束された完全勝利より、多少被弾する可能性がある方が面白いしね！」

「なら、期待できるわね。この自信が見掛け倒しじゃない事を祈りますわ。」

術師と強者、双方のプライドが破音を立てながらぶつかる。どちらもそのプライドは本物で、絶対的な自信があるのだろう。ただ、永一はこの勝負は黄菜子の負けと予想した。何故なら、彼の眼に黄菜子は只の人間にしか見えなかつたからだ。結局、朝食前の黒い影が何なのかはわからないままではあるが、相手の神玉はあの八雲紫の自信作である。もし危険な物を感じたら直ぐにでも救出する準備は出来ていた。

だが、彼女はそんな彼の気など知りもせず、軽快なステップで神玉から距離を取った。

「・・・調整終了。神玉、再起動。」

紫は神玉に手を当てると凄まじい量の妖力を込めた。神玉の中を基盤のように敷き詰められた術が導線となり妖力を巡らせる。すると神玉は球体から分裂、それぞれ術師、妖怪の姿となり上空に浮遊した。

神玉の持つ霊力が紫の妖力を纏うかのように渦巻く。永一から見て、他人の力を手足のように操る神玉には天晴であった。ただ彼はお手並み拝見と言わんばかりに微笑む紫をよそに、どこことなく不思議な感覚に苛まれた。

この霊力はどこから湧いたのだろうか。と、まるで簡単を失敗し続けているような気色の悪い物だった。

対して黄菜子は依然余裕で準備運動がてら大きく背伸びをした。

「いつでも攻めて来てください。ここに立った瞬間からあたしの準備は済んでいますよ!」

その時、永一は神玉たちの霊力が急激に増幅し出した事に気づいた。すると二人は肩を並べると手のひらを合わせ、増幅した霊力を互いの指先へと集中した。指先の終点には言うまでもなく黄菜子がい

た。

「よろしい。では神玉——」

「黄菜子!!危ない!!」

永一は全ての力を飛翔に込め、黄菜子の身体を浚った。その時、彼女が立っていた地面が破音と共に砕け散る。二人は爆風に扇がれ邸の方まで吹き飛ばされた。幸い落下点に藍が現れ、抱えられる形で事無きを得た。

「二人とも、大事は無いか?」

「うう・・・藍さん、助かりました。」

「当然です。っていうか永一、邪魔しないでくれなさい?」

黄菜子はこの状況でさえ一切の動揺を見せない。最早、肝が据わっている程度の言葉では表せない何かなのだろう。

「ならよかった。それより、これは一体どういう事ですか、紫様?」

「フフフ・・・想定外の事が起こったわね。」

藍の背後から紫が現れた。今度は彼女の尻尾の中から出てきたようだ。永一は慣れたと思っていたが、まさかの不意打ちで不覚にも驚いてしまった。悪戯の道具にされた藍は一切気にしていない様子だ。「神玉は傀儡、私の指示より前に動くななんてありえないわ。そういえば、永一はそれ以前に気付いていたようだけど・・・」

「はい。神玉の起動と同時にその霊力が大きくなるのが見え、救出に向かいました。何というか、まるで・・・」

「私の力を取り込んだかのよう、でしょう？なるほどね。まさか、神玉に付喪神が芽生えていたなんてね。」

付喪神とは、主に長い年月を経た道具に生じる靈魂の一種である。長い時を経た事で強力な力を得、晴れて妖怪の仲間入りを遂げた人物は易く脳裏に浮かぶだろう。

神玉に現れていた付喪神はまだ若く力も弱かったのだが、紫の強力な妖力と神玉に施された術によって急成長を遂げ、偶然にも今の力を得たのである。強い自我を持つが元の道具として与えられた命令「黄菜子を倒す」事が優先されている今、個としての自由を手に入れるために彼女の殲滅を遂行しているのだという。

つまり、今の神玉は主を無くした式神のような存在なのであった。

「これは黄菜子には流石に荷が重すぎるかしら。藍、邸に被害が出る前に片づけておきなさい。」

「はい。」

「お待ちくださいー！」

黄菜子は藍の前に立ちふさがった。

「紫様、藍様、余りあたしを見くびるのは止めて頂けませんか？神玉の標的は藍様じゃないでしょう。それに、あたしって凄く強いんですよ？」

その時の黄菜子の表情はこれまでにない程の自信と好奇心に満ちていた。その挑戦的な目に紫は純粹に面白さを感じた。

「いいでしょう。好きなようにしなさい。その代わり、期待を裏切ることは許しません。」

黄菜子は無言でお辞儀をすると神玉の元へと向かった。藍は流石

に焦燥で顔を歪め紫に訴える。

「紫様、相手は傀儡とはいえ、貴女様の力を取り込んでいます。流石に危険が過ぎるのでは？」

紫はにこりと笑ったきり何も答えなかった。

黄菜子は永一とのすれ違い様に一言呟く。

「永一は幸運だよ。形だけでもこのあたしの主になれたんだから。」

その瞬間、朝食前に感じた恐ろしい感覚を覚えた。振り向くと黄菜子の背から例の深紫のオーラが余す事無く伸びていた。

神玉は黄菜子の存在に気づくと同時に超高速で飛翔しながら先の霊力砲に加え、嵐のような弾幕を浴びせた。相手の弾幕が地面を抉り、眩む程の閃光が視界に弾ける。

その時、オーラがゆつくりと天に昇った。目が痛くなるほどの視界の中、永一は彼女の震えあがる程に純粹で恐ろしい満面の笑みを見逃さなかった。瞬間、オーラは一点、神玉を貫いた。それから彼には須臾の世界がスローモーションで動き始めたようであった。緩やか弾け飛ぶ土、そよ風に揺れる草木。ゆつくりと動く世界の中、一つの人影が身を低く構えると小さな拳を力強く握る。彼女の足元の地面に生じた罅に気づいた時には既に視界に彼女の姿は無かった。

次の瞬間、地を揺るがすような轟音に空間が張り裂ける程の爆風が入り混じりながら辺りに響いた。その先には神玉たちを拳一撃で貫く彼女の姿があった。

澄み切った天空を舞う破邪の一閃。純粹に戦いを楽しんでいるかのような透明な笑顔。まさに、武神の具現であった。

永一が気が付いた時には眼前の光景は最悪を極めていた。粉々になった神玉の残骸と大穴だらけの美しかった枯山水。その中央から黄菜子が先と変わらぬ軽快なステップを踏みながらこちらへと戻ってきた。

「上出来ね。中々面白い物を見せてもらったわ。でも、随分派手に散らかしたわねえ。」

紫は藍を見た。藍は全力で知らんふりをする努力を試みたが、残念

ながらこの惨状がある限り片づけという悪魔からは逃れられないようだ。藍はとぼとぼと庭の事態の収拾に始めた。その表情はまさに死ぬ寸前の草食動物のそれである。

「合格・・・は言うまでも無いわね。じゃあ二人とも、私に付いて来なさい。」

すると紫は目の前の空間をスルスルと開きその中へと誘った。

「どこかへ向かうのですか？」

「向かう？ 帰るのですよ。貴方たち二人の家へ。」

スキマから見える鬱蒼とした草木。言葉通りの自然に紛れるように古めかしい木造建築がひっそりと佇んでいた。

— T o b e c o n t i n u e d —

第八話 町人、土御門兄妹

スキマの先。眼前の二階建て木造建築はカラフルな秋色に模様替えた木々と地を隙間なく生い茂る黄緑の草、極め付きには壁まで苔とツタに占領され、正に自然との一体化を実現させている。一言で言うと寂れている。

「ここが今日から貴方たちが住む家よ。これは永一の荷物。で、こっちの風呂敷は私からのプレゼントの二人の着物よ。では二人とも、また会いましょう。」

「はい、紫様！短い間でしたが、お世話になりました！」

紫は目の前のスキマから荷物と風呂敷を出すと、お辞儀する黄菜子と状況を飲み込めていない永一に手を振りながらスキマへと入り始めた。

「ちよ、ちよつと待ってください！今の状況を全く掴めないのですが・・・」

彼の焦り混じりの言葉に紫は首を傾げた。

「ここは今日から貴方の家です。これ以上の説明が思いつかないわ。」
「そうじゃなくて・・・要するに、俺たちにここで暮らせということなのですか？」

「もしかして遠慮しているの？気にすることは無いわ。元々は私が管理していた家ですもの。貰える物は貰っておくものよ。それに家が無かったら困るでしょう？」

「そうじゃなくて・・・」

「ふああ・・・。早起き続きで眠いわ・・・。あ、術のレッスンは私の気が向いた時に行いますから安心なさい。では、おやすみなさい。」

紫は大きなあくびをすると虚空に消えていった。永一は今、心も体も野に刺さる案山子のようなであった。

「もしかして、紫様の加護の下で生活出来るとでも思ってた？」

黄菜子は笑みを浮かべ冷やかすように問う。

「思ってた。」

永一は素直だった。実家から学校に通っていた一般高校生だった

彼の考えの中に独立なんてものは存在していなかったのである。しかしどんなに嘆いても頼れるのは目の前の陽気な小童しかおらず、彼も覚悟を決める他無かったがやはり不安なものには変わりなかったのだ。

そんな永一をよそに黄菜子は入り口に生い茂る雑草も気にせず上機嫌で家の扉の前に立った。

「ま、折角だし早く入ろうよ。」

「入ろうよって・・・簡単に言うなあ。」

と、まじまじと建物を見る。眼前の家は何故か近づきがたかった。と言うよりも、この家が、土地が、空間が彼を拒んでいる、そんな気がするのだ。

永一が荷物を持ちもたと近づくのを確認すると、黄菜子は引き戸に手を掛けた。鍵が掛けられているのか、はたまた立て付けが悪いのかギシギシと木と金属が擦れる音がした。

「やっぱり開かないのかあ・・・。永一、紫様から鍵とか貰ってないの？」

永一に鍵の記憶などさっぱり無かった。紫の悪戯で着物や鞆、上着のポケットに忍ばせている可能性も考えたが、そんなことは無かった。

「貰ってないみたいだ。家を渡すだけ渡して鍵は無しか・・・紫さんもいい加減だな。」

「やっぱりね。この扉は術で閉まってる。」

『やっぱり』って、前から知っているような口ぶりだな。」

「当然よ。ここはあたしたち猫の管轄の土地で、あたしが直々に管理してて、30年前まであたしとお父さんが住んだ家、易社・幾星霜だよ。術はお父さんが掛けた物だよ。」

永一は「へえ」の一言と共に気の抜けた会釈をしたせいか、多すぎる驚愕情報に気づくまで時間がかった。

「ここお前の家だったのか!?お父さんて誰?術師なのか?てか30年とか長生きだなお前!!」

「落ち着いてよ。お父さんは昔、あたしを拾ってくれた人で占いのス

ペシヤリストだよ。だからここはずつとあたしの家。長生きなのはいつの間にか普通の猫じゃなかつたから。」

「なるほど……。つまり黄菜子は妖怪だったのか。なんだ、その言葉で今までの奇行の全てが納得した。」

「そこは驚いてよ。」

「なんだ」とは言ったが永一は彼女が妖怪と言う割には霊力の流れが普通過ぎて逆に気になった。黄菜子本人が妖怪と言っている為か殆ど気に留める事は無かつたが、今のところ妖怪判別は百発百中だったせいしか少しだけ悔しい半分、内心で自分の式神の術を自賛した。

「とにかく、さっさと封印解いちゃってよ。紫様がこの家の封印も解かずに永一に渡したのはワザとだよ。コホン：「この程度の封印は解いて当たり前ですわ」とか絶対思ってるよ。」

彼女による紫の声真似は地味に似ていて滑稽だったが、本人が何処かで監視していないか心配で素直に笑えなかつた。

家に入らなければ何も進まない。とりあえず永一は目の前の引き戸を調べてみた。よく見ると、戸の鍵穴の奥に不自然な霊力流が見える。それが影響しているのは明白だった。

彼はまだ式神関係以外の術を教わっていなかった為解術の方法などさっぱりだったが、紫から少し教わった事の中に「制の教え」というものがあつた。

制の教えとは、敵の術師と対峙した時、相手の術を破壊せずになそれを相殺、あわよくば無効にして支配してしまえというものである。

例えば術同士がぶつかり、弱い方が壊れるとする。勝負においては強い方が「打ち勝つた」となるが、言い換えると術を相殺する以上の過度な力が掛かっている事を指す。その場では破れても長期戦に持ち込まれたときに勝つのは最小限に力を抑えられた者である。

しかし、温存して戦うだけでは只の持久戦である。制の教えの真髄は術を制する事にある。

ここで言う術を制すとはそのままの意味で相手の術を奪う事である。術を飛来するガラス玉と仮定した時、同じ強さのガラス玉を投げれば互いは碎け散る。しかしガラス玉を上手くキャッチした場合、捕

らえた玉をそのまま相手に投げつける事が出来、新しい玉を用意する手間が無くなる。真逆の力を与え術を無効化しそれを奪う、それが八雲式陰陽道における術を「制す」と言う事である。

無駄な力を抑え、敵の武器を奪う。極めて画期的な戦術こそ「制の教え」である。永一有能力、流れを見る程度の能力でも無い限り困難を極めるだろう。

实例を挙げると式神の術の際、彼が鬼神を捕らえ縛り付けていた術がその応用である。普通の術師なら圧倒的な力で鬼神を鎮静させてしまうのだが、鬼神が普通のそれより強い上に彼の未熟さが故に叶わなかったのだ。

永一は式神の術を思い出しながら鍵穴に触れた。鍵穴に込められていた術は割と単純で、対応した霊力流を帯びた物体を当てれば解除される仕組みになっているらしい。正に鍵のような仕組みである。当然鍵を作るより無効化させた方が楽な為、彼は術とは逆の流れの霊力流を流した。鍵穴から一度、カチリと爽快な音がした。

「もしかして開いた？」

「よし、やったぜ。・・・あ。」

永一は期待をつのもらせる黄菜子に満足げに指を鳴らして見せた。その時、指からまだ霊力が出ていた事に気づいた。若干高ぶった満足感が若干の霊力となつて真つ直ぐ鍵穴へと放たれた。鍵穴の術は静かに消滅していった。

「どうしたの？」

「いや、今で術が壊れた見たいでさ。いやあ失敗ば——」

バゴツ・・・ゴトンゴトン・・・

それは突如として永一の頭上に重力ダメージを与えたのである。彼の脳天に衝撃が走ると同時に凄まじい金属音が耳の奥へと飛び込んだ。頭を押さえながらその落下物見ると、そのベタさから最近ではバラエティー番組から姿を消した罰ゲームアイテム、洗い桶ことたらいが地面に転がっていた。

頭上は美しい青空に秋色の枝が重なり、たらいなど置く場所はない。犯人も動機も分かっている。そして何となくだがこの御仕置に

は先の黄菜子の分も含まれている気がした。

呆れ混じりでたらいを拾い上げようとその縁に手を掛けた時、ある事に気づいた。

「あれ、草が消えてる。」

「草？」

「この辺いっぱい生えてただろ？隙間も無いくらい。」

「何言ってるの？さつきも言ったと思うけど、ここはあたしの家で、この土地はあたしが管理してたの。綺麗好きなあたしが雑草が隙間無く生えるほどの状態まで放置するとも思ってた？どうぶつの森じゃあるまいし。」

永一は黄菜子が綺麗好きいな事より最後の情報をどこから持って来たのかが気になった。

彼は敷地から出て全体を見ると、玄関周辺だけではなく雑草が生え放題だった庭や壁の苔やツタも控えめになっていた。この一瞬の間に、この家の敷地全体がさつぱりと落ち着いたのだ。

今の永一には眼前の古民家が質素だがどこか懐かしく思え、先のような拒絶反応は微塵残っていなかった。

「ははあ．．．もしかして人払いの術が掛かっていたのかな？」

「人払い．．．？」

「幻や人間が嫌う気の流れを作って空間から人を遠ざける術だよ。さつき永一が壊した戸の封印は人払いの核の役割もあつたんだね。」

「なるほど．．．この家から感じた嫌な雰囲気は術の影響だったのか。全く気付かなかつた。」

「ふーん、この術の流れは見えなかつたんだ。お父さんの人払いは普通の術とは違って風水の応用のさらに応用。．．．そっか、紫様は永一にこの家の人払いの術を見せて、風水みたいな超自然的な物の流れは見えないって事を伝えたかつたのね！」

永一の眼は霊力や妖力、魔力まで幅広く見ることが出来るが、重力や風の動きのような完全な自然の流れは見えない。風水はあくまでも自然に力を任せながら気の流れを操る術である為、彼の眼に映ら無かつたのである。

「まあ、いざ開いた事だし、さっさと作業に入るよ！」
「作業？」

永一は黄菜子の張り切った言葉の意味をいまいち解り兼ねていた。だが彼はその言葉の意味を数秒後、嫌でも理解することとなる。

彼女が戸を引くと先とは異なり爽快な音と共に戸が開いた。その瞬間彼らの視界に飛び込んできたのは、ジグソーパズルをひっくり返したような散らかり様の玄関とそれに倣った居間だった。黄菜子は30年ぶりの実家に目を輝かせているが、無論永一は言葉を失った。「懐かしいなあ〜30年前のままだよ！そこに積まれた本。目の前に本棚があるのに意地でも入れない徹底ぶり。本当に、時間が止まっていたみたい……」

その時二人は別の意味で感極まっていた。

「さあて、永一。分かっているよね？」

黄菜子は立てかけてあった藁箒を構えると永一に先程沸いたたらいと雑巾を投げ渡した。

「……お前、綺麗好きじゃなかったのか？」

「逆に、なんで綺麗好きになったと思う？」

とある秋の日の午前、土御門家のちよつと早くて極めて遅い大掃除が始まりを告げた。

——三時間後……

ひたすら片づけ続け三時間。黙っててもつまらないので、永一は黄菜子に現し世の話をしながら作業をしていた。それが功を奏したのか否か、あつという間に玄関は片付き二人は居間の片付けに入っていた。

日が高くなるにつれて肌寒かった気温も丁度いい具合に暖かくなったが、何故か黄菜子の表情は優れなかった。正確には不機嫌に近い表情である。話の内容も他愛無いものだったので永一は理由など思い当たらず、不意な何かで刺激をしないように出来るだけ気配を消していた。

しかし、とうとう業を煮やしたのか黄菜子は作業を止め彼の元へと向かった。無心で部屋の隅を拭きまくる彼だったが、背後の気配に恐る恐る振り向いてしまった。そこには恐ろしい程の無表情が彼を見下ろしていた。

「永一。」

ただ一言の呼びかけが、先ほどとは全く異なる言葉の重さを帯びていた。

「な、なんだ？」

彼は強張った表情で返事をするも返事はすぐに帰ってこなかった。否、彼がそう感じただけかも知れない。

彼の言動の何かに不満があったのか、はたまた全く別の要因が故なのか。少なくとも彼女にとっては何かのつぴきならない事情が有る事だけは感じた。彼は他人の感情というアンノウンに表情を強張らせながら彼女の次の言葉に構える他無かった。

そして遂に彼女の唇が動いた。

「超・お腹空いた！」

その瞬間、黄菜子が作っていた空気感とのギャップに加え、永一が身構えていた分の感情が推進力となった言葉のRPG―7が彼の張り詰めた精神をいとも簡単に撃墜した。

時計の針は確かに丁度いい時間を指している。

「何かと思ったらこんな事かよ！俺の心配返せ。」

「はあ〜??あたしのぐ飯事情を『こんな事』呼ばわり??聞き捨てならん！永一、覚悟！」

永一が応答するより先に黄菜子持ち前の俊足ステップから繰り出される回避不能の凄まじい小ジャブが浴びせられる。地味に痛い。

「ちよ、待っ・・・あー、わかった！わかったから落ち着けい!!」

「参った？」

黄菜子は楽しそうである。

「腹が減ってるのは俺も同じ。飯は何か用意するよ。でもあの炊事場はお前も見ただろ？流石に今日いっぱいじゃ片付けきれないだろ。少なくとも生活スペースを確保するまではお預けだな・・・。」

炊事場。つまりキッチン半分物置と化している上に煤や油汚れで最悪の状態だった。

「永一はあたしを見くびっているでしょ？その程度の理由じゃあたしのご飯がお預けになる理由にはならないよ。」

そう言うとき黄菜子は炊事場へと向かい半笑いで永一に手招きした。彼は誘われるがままに其方へと向かうと、荒れ放題だったはずの炊事場が見違えるように片付き、最後に見たときの光景は見る影もなく良い意味で変わり果てていた。煤だらけで乱雑に放置されていた竈や飯釜は新品同様の輝きを見せ、今にも使ってくれと訴えているかのようにならなっていた。

「黄菜子には敵わないな。早速俺は昼食の準備に……」

黄菜子の目が輝きだした所で彼は根本的な問題に気づいてしまった。

「……材料ないじゃん。」

「あつ……」

二人は揃って俯いた。

「あつでも、ここは人間の里。材料が無いなら買ってくれば万事解決だよー！」

「それだ！早速買いに行こう！……ただ、ここから店までの道のりはわからないな。」

「買い出しはあたしに任せて。人間の里は猫（あたしたち）の庭だもん。」

黄菜子は食事に関わるとよく動く。

「よし、じゃあ任せられてくれ。金は財布に入ってる。」

「いくら位あるの？」

「二万円はある。」

その言葉を聞いた瞬間、黄菜子は表情に影を落とした。

「そうだった……永一は外来人だから……」

「どういう事だ？俺の財布には諭吉も一葉も、英世なんか五人もいるんだぞ？小銭だって合わせれば英世一人分くらいには……」

「永一、残念ながら幻想郷ではお金の桁に普通、『万』はおろか『百』も

なかなか付かないんだよ。幻想郷で流通してるお金の殆どは円、銭、厘の硬貨。紙幣なんてまず見ないよ。つまり、幻想郷では永一の持つ二万円は只の偉人ブロマイドってこと。」

永一にとつて銭、厘なんて単位は御伽噺だけの物だった。幻想郷の取引手段は物々交換が主流なのだが、この家に転がっている物を見れば見る程、そのガラクタの無価値さが伝わってくる。

「詰んだ」

永一はがつくりと床に膝を付いた。が、黄菜子は強者の波動を放ちながら玄関へと足を向けた。

「ちよつとひと狩り（モンスターハント）してくる。」

「ちよつと落ち着け。」

「これが落ち着いて居られるかあ!!」

と、黄菜子は玄関に転がしておいた風呂敷を思い切り蹴飛ばした。風呂敷の包みが解け、中の衣服が玄関の空を舞う。その中から一つ、見慣れない大袋が飛び出し永一の顔面に直撃した。ズシリと重いその袋は大きなお手玉のような感触だった。

彼女はその存在に気づくと床に伸びている彼の顔面を持ち上げその縛りを解き中を覗いた。その瞬間、彼女の表情は一変して日の光のような輝きを宿した。

「米だー！！！！」

黄菜子は感極まって叫ぶと袋をひっくり返して見せた。中には米に加え、砂糖や塩、醤油等の調味料入りの小瓶や少々のお金まであった。

永一が食材の山に驚いていると、その中に紛れる一枚の走り書きを見つけた。

——永一、黄菜子へ

新生活に手ぶらでは困るだろう。少ないが役立てたら幸いだ。勝手な言い分なのは承知だが、我が主の気まぐれを許して欲しい。

「藍様、紫様には内緒でこの袋を仕込んでくれたのかもね。」

「そうかもな。なら藍さんの思いに応えて美味しく頂くのが吉だな。」

「その言葉を待ってた!」

「期待して待ってるよ。さて、俺の趣味を光らせる時だ。黄菜子は掃除でもして待っててくれ。」

現し世を捨てて幻想郷にやってきた永一とて現し世で全く楽しみが無かった訳ではない。その楽しみこそ、彼、唯一の趣味である料理だった。きっかけは母親の家事を手伝うという他愛無い物だったが、時を追うごとにその深さに魅されていったのだ。料理の海にのめり込んで10年、そのバリエーションは卵かけご飯から高級フレンチ(自称)まで多岐に渡っている。

この日をきっかけに、永一に流れる一流料理人の血が覚醒するのはまた別のお話である。

——約1時間後……

幻想郷に来て初めての料理。それは、彼が思っていた以上の苦戦を強いられた。材料の少なさは仕方がないが、そもそも設備が違ったのだ。例えば火元、IHヒーターやガスコンロならお手の物だが竈は初めてでそうはいかなかった。引き出しにあつた湿気たマツチで薪に何とか火を灯すも、その維持に極めて難航した。火吹き竹で火に酸素を送り続けなければならず、そして当然だが火を使っている訳なので息を吹く度に熱風が吹きつけた。米と水を入れてボタンを押すだけの炊飯器とは手間が雲泥の差だ。

高が米を炊くだけと甘く見ていたが、中々手こずらせて来る。……だがそれが良い!

しかし、彼は腕が熟練したからこそ忘れかけていた楽しみを思い出せた。イレギュラーこそ彼にとつては料理の醍醐味だったのだ。

永一が完成した昼食を居間のちゃぶ台に並べると、黄菜子が食器が触れる音を聞きつけてやってきた。

献立は塩と味噌の焼きおにぎりとみそ汁(具無し)だけでかなり質素であるが、彼女はただ食欲を満たしたいという思いだけでここに

立っているようだ。

「材料が少ないかったから大分質素だが我慢してくれ。」

「そんな事は気にしない、味が良ければなんでもいいよ。でも今はお腹に入ればそれだけで100点!!いただきまー」

と言うと黄菜子はおにぎりにかぶり付く。そして一言、

「美味しい・・・」

と呟く。一食遅くなっただけでこの様である。永一は中々手間が掛かる生き物を式神にしてしまったようだ。永一もおにぎりを口にしました。米が良いのか、自身の達成感のせいかわからないが、炊飯器よりも美味しく出来たと感じた。品目も少なくこの上なく質素だが、初めての竈飯にしては上出来なのではないかと今日の料理には満足した。

その時、黄菜子はお碗のみそ汁をすすると一端箸を止め難しい顔になった。

「味噌や塩の具合や焼き加減、更に言うところ飯の炊き加減までも完璧。永一、料理は現し世の誰かに習ったの?」

「竈は林間学校で使ったときに試行錯誤した位だな。料理は基本、独学だな。」

「独学・・・先人の知恵も無しにこれほどまで竈を扱えるなんて・・・。三竈柱神、はたまたウエスタの加護でも受けているとでも・・・?」

「えーっと、要約すると?」

「美味しい!!!」

「ありがとうございます。」

そう言うともた食事再開した。最初は少々ご飯を炊き過ぎてしまったと思っただが、おにぎりは視線を逸らす度に姿を消していった。「みそ汁、具が入ってないのが惜しかったね。」

「そうだな。今度具を買って来ような。」

その時、永一は生活する上で初歩的且つ最重要の問題に気づいた。「仕事とか考えなきゃだよな。」

「あー。まあ考えてはあるよ。」

「ふーん。バイトとか?」

「培土?・・・ああ、それなら確かに補助もいいし絶対に食べていける・・・。永一にしては名案だけど、あたしの読みが当たってたら却下。」

「何の話?」

「農業でしょ?」

「??」

培土とは、作物の栽培にてその株際に土を寄せ茎が倒れる事を防ぐ為の作業である。

その時、永一の背後から何やら可愛らしい鳴き声が聞こえてきた。「にゃ。(我が君。只今参りました。)」

驚いて振り向くと、そこには綺麗な真つ白い猫が座っていた。永一は一切の気配を感じなかった為か若干肝を冷やした。

「あ、玄光。お疲れ様。」

「黄菜子の知り合いなのか?そんな事より可愛いなおい。」

「この子は玄光《くろみつ》。猫の重臣にしてあたしの右腕だよ。」

真つ白なのに玄の名前。永一の場合は人の事は言えないが、凄いなーミングセンスである。よく見ると体内に妖力が流れている。後に彼は黄菜子から玄光が猫又である事を聞くことになる。

すると、玄光は永一の前にやってきて視線を彼の目に向けた。

「(永一様、でございますよね。某の『玄光』の名は、貴方様が我が君に御名をお与えなされたのを機に、君様が直々に下さったのでございます。このご恩は永一様のお役に立つという形で返させて頂きます。某には勿体無い程の名前ではございますが、ありがたく頂戴致します。)」

「うくん。何かを訴えてきてるのはよく分かるんだけど・・・。黄菜子、翻訳できるか?」

「『玄光です。宜しく。』だってさ。」

それだけの内容にしては大容量な挨拶な気がした。ただ何となくこの妖怪猫の性格が凄く良いことは分かった。

「そう言えばさっき『お疲れ様』って言ってたけど、玄光君に何かさせてたの?」

「そうそう。この子に里の人間の需要について調べてきて貰ったの。早速だけど玄光、報告お願い。」

すると玄光は心なしか申し訳なさそうに見える表情をすると黄菜子に報告した。

「(誠に伝えづらい事柄ではございますが・・・里の需要と供給は不気味なほどにつり合っております。恐らくは他勢力の干渉に依るものと・・・)。大結界創造当初、分断された幻想郷に——)」

「わかったわかった。この辺はあたしの読み通りだったから問題ないよ。おにぎりあげる。ご褒美だよ。」

と、黄菜子は玄光に永一特製おにぎりを差し出した。しかし、玄光は猫らしくなく後ろ歩きをしてそれを拒んだ。

「(折角の御恵みではございますが、受け取れません。某だけ美味しい思いをしては仲間たちに申し訳ない。それに、某は貴女様に仕えているだけで満足なのでございます。では、某はこれにて。)」

玄光は立ち上がり永一と黄菜子にお辞儀のような仕草をすると玄関から帰って行った。

「玄光は完璧だけど、その辺の要領悪いよね〜」

一連の会話は猫語を習得していない永一にはいささか難解過ぎた。

「えーっと、黄菜子さん？結局何が分かったんですか？」

「ひ・み・つ」

黄菜子は永一に邪気溢れる笑顔を向けた。とりあえず碌な事ではないのだろう。

「それよりさ、現し世の話の続きとか聞かせてよ。今度は便利な道具の話とかさ。」

「?、いいけど・・・?」

それから数時間。思いつく話題を全て話し終えた所でようやく自宅一階の掃除が完了した。今朝の地獄のような有様と比べると文句なしの極楽浄土である。二人で達成感に浸っていると縁側から西日が眩しく照っていた。

「もう夕方か・・・。夕飯の準備しなきゃなあ・・・。」

「不要だよ。永一は最初に着ていた服に着替えてね。」

「なんで？」

「つべこべ言わずとつと着替える！」

永一は、昼間にあんなに騒いでいた人間が何を抜かしているのか、と内心ツツコミを入れながら急ぎで着替えた。黄菜子はワンピースの裾をはたくと先ほどまで掃除で使っていたたらいを持つと玄関に並べてある紫からのプレゼントのサンダルを履いた。

「着替えたね。じゃあ行くよ。」

「は？どこへ？」

「人間の里。」

永一には話が急展開過ぎて全く見えなかった。しかし、彼が戸惑っている間に黄菜子は家の敷地から抜けていたのでとりあえず鞆と貴重品を持って追いかけた。

二人が住む場所は人間の里西部の広大な田畑地帯の中でも魔法の森付近の場所、つまり里のギリギリ境界線内に位置している（人間の居住地域外は明確な境界線は存在しない。どちらかは怪しい所である）。したがって里の人口密集地までの距離はそこそこあり、暫くの間喉かな風景が延々と続いた。

ちなみに一般的に「里」を指すのは居住地域の境界である大門の内側であり、今の二人の位置から大門はまだ遠い。

収穫を終えた田から秋の虫の鳴き声が響き、辺りを囲う色鮮やかな山々が西日を浴びて美しく輝いている。

「うーん、ちよつと遅かったかな？急ぐよ！」

「あ、おい、待ってって。」

都会育ちの永一にはとても新鮮な景色も黄菜子にとっては日常である。その上何かを急いでいるようなので彼に景色を楽しませる余裕を与える気は無かった。

それから走り続けて5分程で遠かった大門がもう目の前に見えた。周りには仕事を終え帰路に就く農家の里民がちらほら見られるが、彼女はそれにも気にせず疾走を続けた。里民は夕方の畦道をたらいを持ちながら全力疾走する見慣れない人間たちを不思議そうな目で見ていた。

——人間の里・大通り

この道は里で人が最も行き来をし、交通だけでなく経済の中枢としても人々に親しまれている。今のような夕方は仕事を終えて帰る労働者や子連れで買い物へ向かう主婦などの様々な年齢層日の人々が交通する日で最も人口が集中する時間帯である。

道には様々な露店が並び、昼にも増して活気で溢れている。

「よーし。丁度いい時間。．．．って、永一、遅すぎ。」

永一は普段の運動不足が祟ったのか、里の門を潜った辺りから黄菜子に付いて行けなくなっていた。一分ほど待って、やっと黄菜子のいる場所へと到着した。

時代劇を彷彿とさせる町並みに着物姿の人々。いつもの彼なら眼前に広がる、まるでタイムスリップでもしたかのような世界にいつもなら感動しその余韻に浸るところだが、今の彼にそんな余裕は無かった。ここへ何をしに来たのかすら分からない上に、もうへとへとで死んでしまいそうな程だったのだから。

彼は飛翔をマスターすることを心に誓った。

「ハアハア．．．．．結局．．．．．そんなに急いで何を．．．．．」

「あたし達にしか出来ないキャッチフレーズのお仕事だよ。今日は自己紹介だよ。」

その時、永一には言葉の意味が一切理解できなかつたが、数秒後その真意を目の当たりにする事となる。

「永一が今日心がける事は二つ。一つ、言う事は事実の二割増し。二つ、お互いに言った事を貫き通せ。分かった？」

「まず何をするのか分からないんだが。」

黄菜子は永一の有無を言わせずにたらいを足元に置いた。そして一度深呼吸をするとしつかりと目を見開いてニヤリと笑みを浮かべた。

その時、黄菜子の背後から例の深紫色のオーラが現れた。今回は伸びるだけでは飽き足らず、無限に分裂、増殖をし、彼女の頭上を黒く染めた。

その時、オーラはその鋭い刃を通りの通行人全てに狙いを定めた。「バカ、やめろ！何やってんだ！」

しかし、永一の警告は遅かった。彼女の刃は全ての通行人の身体を貫いた。同時に人々の歩みが一齐に止まり、静止画のような世界が生まれる。

おろおろ焦る永一に対し、黄菜子はその瞬間を待っていたかのようであった。

「皆さん！初めまして!!」

彼女のその言葉と同時に刃は姿を消し、眼前の民衆全ての視線が二人のいる場所に集まった。彼はその様に驚き、恐怖すら感じていた。「あたし達は現し世からやってきた者です。本日はあたし達はこの場をお借りして、自己紹介がてら現し世の知られざる実態を知って頂こうと思立ったのでございます！」

当然のようにざわつく周囲。どんどん大きくなる人ばかり。しかし永一の精神はその300倍騒めいていた。

「なんだって、そんな話は一切聞いてないぞ。」なんて言葉はいくらでも思いついたが、黄菜子が作り出してしまったこの空気の中でそんな言葉は口が裂けても言えなかった。

「あたしは土御門黄菜子。隣のは兄の永一です。なんと永一こう見えて、かの伝説の陰陽師、安倍晴明の血だけでは飽き足らず、意思まで受け継いだ現し世最強の陰陽師なんですよ。ね？」

—— おおー——!!!

期待と尊敬の込められた歓声、それと同時に黄菜子に集まっていた視線が永一に移った。

—— こんな実力者がいるなら妖怪だって怖くないぞ！——

—— 今まで倒した妖怪で一番強かった相手は誰？——

—— 何か術とか使えるんですか？——

「・・・はい。」

永一は泣きたかった。しかしその時流したかった涙は寸でのところで枯れてしまっていたのだった。

「あたし達兄妹は、現し世の知識という大太刀を振りかざし、皆様の生

活に力を貸せる猫の手のような存在になりたい。店の宣伝から悪霊退散まで幅広く対応いたします！旧・易社、幾星霜にて皆様のご依頼をお待ちしております！」

黄菜子がお辞儀をするのに合わせて永一もお辞儀をすると、盛大な拍手が浴びせられた。

彼女が玄光に調査させた里民の需要とは、現し世の知識を持つ者、つまり外来人の専門知識供給の有無の調査だったのだ。需要が無いなら作ればいい。正にコロンブスの卵である。

黄菜子はただの食いしん坊では無かった。永一は凄い者を式神にしてしまった事を再認識したのであった。

「さて、紹介が済んだ所で本日の本題に入りましょう！土御門永一語り、現し世閑話です、どうぞ！」

(は?)

突然振られても何も用意してないぞ！と永一は黄菜子に視線で訴えた。彼はアドリブが利かない男だったのだ。

そんな事は知らん。精々頑張り給え。と彼女は視線を逸らした。

(この悪魔め！)

最初の方の語りは躓き続きで見えられない物だったが慣れとは恐ろしい物で、昼間の話を踏まえての黄菜子の補助もありなんだかんだでずっと喋り続きだった。幻想郷住民にとって永一の閑話はとても新鮮味があり好評だったらしく、彼女が持ってきたらいい入れられた沢山のお金がその度合いを示していた。暫くは食いつなげそうである。しかし、慣れないことをしていたせいか労力の割には凄まじい疲労度だった。

そして何より翌日から二人は慣用語にもかけた「猫の手」という名で家政婦兼、広告業兼、陰陽師兼・・・所謂なんでも屋を開業する事になったのだ。

黄菜子曰く、計画通りではあるらしいが、そう簡単に経営出来るとは思えない。世の中そう甘くないことは言われなくともわかる。

そんな不安で一杯の帰り道。対して黄菜子は甘味屋から団子の差し入れを頂いて機嫌が良さそうである。

その時、二人の進む道の先に既視感のある不気味なスリットが現れた。

「ごきげんよう。二人とも、頑張っているみたいね。」

「ありがとうございます。でもまだまだ始まりに過ぎませんから、期待して見ていてくださいね。」

「黄菜子は相変わらず面白いわね。対して永一、『現し世最強の陰陽師』には似合わない顔ね。」

(見ていたのか・・・)

只の冷やかしだが彼の目前で矢に形を変え、その胸に深々と刺さる。現し世最強の陰陽師、なんてよく言えたものである。それもこれも黄菜子のせいである。

「紫さん。弟子からのお願いです。俺を里の人たちを騙せる實力にして頂けませんか？出来るだけ迅速に・・・。」

永一は嫌な予感しかしなかったが、人々の信頼を保つ為にはこうする他なかった。紫は彼の考えなど当然のように見透かすと不気味に笑みを浮かべた。

「いいでしょう。可愛い弟子の頼みを断る理由はありません。そうですね・・・30秒レッスンを3分にすれば問題ないわね。安ずることは無いわ。覚悟はいい？」

ここで言う3分とはあくまでも現実世界換算である。体感が何時間に相当するのかは誰にもわからない。

「・・・はい。」

こうして土御門永一とその式、黄菜子の人間の里での生活が始まったのだった。しかし、彼が望んでいた喉かな田舎生活は始まる前に終わりを告げ、この先待っているのは摩訶不思議な魑魅魍魎との非日常という事を今の彼は知る由もないのである。

第X話 Time

遡る事二日前・・・

——八雲邸

紫は扇を開くと改まった表情で藍を見た。

「昨今の結界の大規模修復の件における貴女の働き。歪みの早急な発見と迅速な対応は評価に値します。よって、その褒美として目の前の極上を貴女に進呈します。心行くままに味わいなさい。」

藍はゴクリと喉を鳴らした。机に並ぶ豪華な料理の中に一際異彩を放つものが一つ。黄金色に輝くそれは彼女が本来持つ生物としての最大欲求を最大限まで満たすには十分すぎる品だった。興奮に震える指先で箸を掴む。しかし箸はそれに吸い込まれるように向かい、つまんだ暁には二度とそれを放す事は無かった。箸で口に持つていく前に思わず口がそれを迎えに行っている事に気づいた。しかし、今の彼女に行儀など気にしていられる余裕は無かった。

唇に触れた。同時に歯、舌。そして喉。その時、彼女は恐怖にも似た言葉では表せない異常な感情に支配されていた。

深呼吸を更に深くした後小さく口を開く。

「・・・谷口屋。竹田の油揚げ……!!」

「(名答)」

その時、藍は全てを解き放ったかのように二口目、三口目に箸を進めた。

「おいしい！おいしすぎる!! (語彙喪失)」

「当然よ。入手に苦労したんだから大切に食べなさいね。」

と言ったところで藍の勢いは収まる事は無い。大きな油揚げは酒と共に次々と消えていく。

「浮かれるのもいいけれど、反省点も忘れないこと。橙(しき)の扱いかね。」

「心得ております。橙の処分なら——」

机寄りの半開きの襖からガタガタと物音がする。

「!!——!!!」

襖の外、結界によって閉め出された哀れな式神が一匹。開けて下さい、と必死で壁を引つ掻く様は元の猫そのものである。藍はその襖に開いた小さな穴に刺身と鰹節を近付けた。が、近付けただけだった。「・・・貴女もなかなかやるのね。」

「辛いですが、今回は私も鬼になります。それが後の橙の為になると信じて…………。」

「そうねえ…………（凄い怨念・・・パワーアップを凶ったのかしら。）」

紫は例の刺身をつまみながら相槌を打った。その時、彼女は箸を止めると顔をしかめて一点を見つめた。

「どうなさいましたか?」

紫は藍の丁度真上の天井の空間を指した。

「その結界・・・歪んでる。」

「本当ですね。」

二人はじつと空間を見つめた。

「……………」

「……………」

「……………?」

「……………」

三十秒ほどが経過したが何も変化が無い。

博麗大結界の境界に位置するこの八雲邸。小さな結界の歪が起ることはよくある事で、強力な結界故に小さいものは勝手に元通りになるのが自然である。しかし、この歪は不自然にもその場で維持され続けている。可能性はゼロではないのだが、不自然というものは余り心地の良いものではない。

痺れを切らせた藍が立ち上がった。

「修復して参りまつ——」

ズシャアアアア!!!

藍の頭上から謎の物体が落ちてきた。人間である。脳天直撃の会心の一撃に藍はあえなくダウンを取られた。余りの勢いに部屋中に埃が舞う。紫が咄嗟のスキマで埃から食事を守った。

「ちよつと藍、大丈夫?」

「痛い…重い…」

主人の食事の防衛は早かった。

降ってきた方は放心状態なのか、無言で天井を見ている。突然異世
界に飛ばされたのだから無理も無い。

「そのの貴方、藍がもふもふして気持ち良くてたまらないのはわかる
けど私の式神なの。退いてくださらない?」

「紫様……」

藍はもつとマシな事を言つて欲しかった、と心で嘆いた。その時、
男はクスクスと笑いながら返す。

「…うん。僕は『予想』通り、幻想郷のこの場所にいる…。健
在でよかった。」

男は起き上がるとしわくちやなスーツを叩き紫を見た。

「お久しぶり、ですよ?紫さん。」

「あ、貴方は!!!」

藍は驚いて飛び上がった。

「帰ってきてくれたんですか!!?みんな貴方を心配して——」

紫は橙の部屋の結界を解くと橙は只ならぬ空気を察知したのか逃
げ出した。

「藍。少し外しなさい。」

「でも、紫様!貴女だつてずっと——」

「急急序律令。『式神』八雲藍に命ず。下がちなさい。」

紫は冷たく言い放つと、藍は悲しそうに部屋を出た。

「…遺憾ですよ。藍ちゃん（ねえさん）にこんな事する貴女を見た
くは無かったな。」

「あら、随分な立場の言い分ね。それに貴方はもう現し世の者でしょ
う?この地に立つ資格はありません。」

「資格は無くとも今回だけは多めに見てもらいます。」

「質問に答えなさい。貴方は何を企んでいるの?」

紫は男を厳しく睨み付けた。男は彼女の威圧に負けて大きく目を
逸らした。

「……僕は何も企んでません。ただ、これを渡しに来ただけです。」
男は名刺程の紙切れを渡した。紫はそれを見るなり今度は無表情
になって男に問う。

「……一斉に歪み始めた結界。貴方の仕業ね？」

「結界？ああ、副作用というのはそのことか……。でもまあ、それだけ大
がかりつてことです。答えはいずれ判ります。」

「もう一度聞く。貴方の目的を吐きなさい。」

紫が聞くと男は顎に手を当てあからさまに困った顔をした。

「僕の本当の目的はここにやってこれた時点で果たせています。内容
は……。何と言えればいいでしょうか……。そう、保険と恩返しです。」
男はパチリと指を鳴らしわざと笑顔を作った。紫も目を細めて男
に微笑んでいる。その瞬間、空気が凍りついた。同時にスキマ経由で
男の首元に妖力の針を突きつけた。鋭い針先が男の皮膚に吸いつく
ように向く。

「気を付ける事ね。戯言も程度を知らなければ禍事を呼び寄せるで
しょう。例えば……。貴方の喉元に風穴が空く……。とか。」

その時、男の笑顔に覇気が加わった。絶体絶命の状況下にも拘わら
ず、頼りなかった表情から一変して異常な程の自信が満たされる。

「そうですか。気を付けます。でも紫さん。かなり卑怯ですが、本気
の僕に禍事は有り得無いのをお忘れで？」

「そうだったかしら？なら、試してみようかしら!？」

「どうぞ、おかまいなく！僕の言葉に一片でも戯言や悪意があったな
らば貴女の魔針が僕の命を貫き死がもたらされるであろう!？」

男が今までに無い満面の笑みでそう言い放つと、奥の部屋から藍が
飛び出し紫に流星の如く突進した。紫は全く微動だにせず、逆に弾き
飛ばされるも今度は腕に噛み付いた。

「止める!!例え親であり、師であり、主である紫様とて、これ以上は許
さない!!」

紫の冷ややかな視線が藍に向く。藍の表情は変わらず鬼の形相
だったが、彼女の袖が濡れていることに気づいた。

「本当に卑怯者ね。」

紫の針は音も無く消滅した。彼女が抱きしめると藍はゆつくりと力を抜いた。

「・・・最悪だ。僕はこんな酷い事をしに来たつもりじゃなかった。」
男は表情はまた頼りなくなり、加えて罪悪感に満ちていた。

「貴方には強力な力封じの呪詛が施してあつたはず。並大抵の事では解けない筈なのだけど?」

「すみません。これも答えられません。」

「・・・徹底しているのね。」

男は藍の傍に近寄ると目の前で正座した。

「姉さん、ありがとう。・・・ごめんなさい。」
「・・・」

藍は何も言えずにただ涙を流していた。

暫くすると、男の体が徐々に半透明になつてきた。

「時間みたいですね。僕はあくまでも『不正な手順』で幻想郷に来たので。生憎もう『鍵』を持ち合わせていなくて・・・。だから僕の『未来を創造する程度の能力』でしたっけ?、を使わせて貰いました。」

苦笑する紫に対し、男は真面目な表情で彼女に頼んだ。

「やっとな決心が付きました。僕からの最後のお願いです。僕に『博麗の永呪』を掛けてください。」

博麗の永呪。それは魂を依り代にして永遠に能力を封じる術である。紫は一度深呼吸した。

「本当に良いのね?」

「はい。僕がここに来た理由はその為ですから。それに、わからない方が面白いって言つて私に呪詛を掛けたのも紫さんですよね?」

「あーあ。そういう事なら、もっと利用しておくべきだったわね。まあいいわ。」

紫は男の頭に手を置いた。

——博麗の御霊よ。八雲の名の元に命ず。其の魂を結び、全ての苦から解放せよ!——

術は静かに男に掛けられた。効力も効果も無い、壮大な詠唱だけに見える術だったが、その男の持っていた未来を動かす腕はシャボン玉

のように消えたのだった。

「もう、行ってしまうのですね。」

「・・・うん。でも僕はもうちゃんとお別れしたから。姉さんたちはまた会えるよ。」

男の言葉は九尾の妖狐ですら難解であった。

「それじゃ、さよならです。また・・・また会いたいなあ・・・。」

男は最後に目に涙を浮かべながら消えていった。

それから数分、残された二人はその場で立ち尽くしていた。最初に口を開いたのは紫だった。

「それにしても、藍が私に口答えするなんてねえ。それも物理的に。」

紫の冗談交じりの問いかけに対し藍は悲しそうな表情で返した。

「申し訳ありませんでした。式神という立場でありながら自己を抑えることができませんでした。どんな罰でも覚悟の上です。」

藍は紫に深々と頭を下げた。いつもとは違い、藍からは罰や叱責への恐怖を感じている様子は微塵もなかった。紫は、自分の式神のこれ程まで哀れな様子は見たことが無かった。

「藍、よくできました。」

「え・・・それはどういう意味ですか?」

「そのままの意味よ。」

「しかし、私は紫様の命令を無視しました。式神失格です。」

すると、紫はにっこりと微笑んと言った。

「いいえ、貴女は私の命令をちゃんと守っていたわ。今まで、私は数えきれないほどの式神を使役したけど、その中に私の真の命令まで遂行した子はいなかったわ。」

「それは偶然です。私は咎められる必要があります。いえ、そうでなければ私の気が済みません!」

「そう、そんなに罰を受けたいのね。」

すると、紫は藍を力強く抱きしめた。突然の事に藍は豆鉄砲を食らったかのように目を丸くした。

「紫・・・様?」

「貴女は私の式神として永遠に私の元で仕えなさい。毎日家事や見回

りに縛られて自由なんて皆無。無期懲役ね。妖怪、ましては九尾狐の貴女には最高のお仕置きだと思わない？」

そう言い終えると、紫は藍の頭を包むように撫でた。

「さて、明日から忙しくなるわ。貴女もしっかり休んでおきなさい。あと、机の上の油揚げも片しておきなさい。」

紫は藍の返事の前にスキマの中に消えた。

藍の

書齋にて、紫は机上手紙を開きまじまじと見つめた。

手紙には一言、こう書かれている。

—行雲流水 by Magician of time reading—

「流れに身を任せる・・・ねえ。訳が分からないわ。全く、誰に似たのやら・・・。」

と、彼女は憂鬱そうな溜息を洩らした。

只の人が見れば走り書きと筆記体だが、彼女にとっては悩みの種を植えつける魔導書の一ページだった。

—To be continued—

里の日常編

第九話 人里に混ざる妖

人間の里に来て数日。黄菜子は置いといて、永一は里での生活に多少は慣れ、連日の仕事で割と忙しい毎日を送っていた。ただの家事代行も「現し世の技術」と付ければ客が特別感を感じてくれるのでいい仕事である。

ただ最近では現し世閑話によるボーナスを得る機会が少なくなった。正確にはわざと少なくしたのだが、理由は簡単、ネタ切れ防止である。外来人の永一とてその知識は有限である。不定期開催にして知識を小出しにすることでブームを長く保とうと考えたのだ。

流行は風だ。灼熱の中、一発の強風よりも持続したそよ風の方が涼しいのと同じである。

とある秋の昼下がり。その日はたまたま次の仕事までしばらく時間が空いていたので、永一は黄菜子に留守番を任せて夕飯の買い出しに出ていた。

鯉と野菜が買い得だったので夕飯は鯉濃に決めた。最近になって一気に冷え込んできたので丁度温かい料理が食べたいと思っていた所だった。

買い物を終え大きくなった風呂敷を背負いながら帰る途中、目線の先に魔理沙の姿が見えた。記憶の無い宴会以来会っていないかったので、少し追いかけて声を掛けてみる事にした。

この通りの中央には川が流れており、永一から見て魔理沙は川の対岸にいた。「おーい」と声を上げて呼んでみてもいいだろうが、この辺りは住宅地と店が混在しているせいかな人が多くなるとなく気恥ずかしかったので普通に声を掛ける事にした。

永一が橋を渡りかけた時、彼女は人とぶつかっていた。相手の少女は育ちが良さそうだが彼女と比べるとかなり華奢であり案の定軽く突き飛ばされ。「きゃっ」という高い声を上げると同時に持っていた風呂敷から包んでいた古びた書物を散らせた。

その時、一瞬だったが幽かに妖力の波を感じた。一瞬でかつ距離があり、波が極めて微弱だった為か発生源と詳しい場所は判らなかつたが、タイミングと感じた方角からして魔理沙と少女の方だった。魔理沙の霊力は知っている。そうなると妖力の主は少女という事になる。人間に化けた妖怪がいるのは日常だが、化けるだけなら妖気まで消す必要は無い。もつとも、妖気を消している妖怪を黄葉子以外に見た事が無いのだが。何か企てて里に進入している妖怪なら曲がりなりにも術師を語っている身としては放って置く訳にはいかない。

彼の流れを見る能力は確実だが、靈感のように物を透過して感じる事はない為、直接対象を見る必要がある。という事で永一はさりげなく二人の脇を通っていく事にした。

「駄目ですよ。今、返しに行く所です。やっとひとつ本を書き終えたので・・・」

どうやら魔理沙と少女は知り合いのようだ。断片的な会話から少女は物書きで、落とした書物は資料らしい。見た所少女は人間のようだが、その霊力は何故か普通とは異なつて不思議と「古めかしい」感覚を覚えた。少女の事も若干気になるが、今は妖力の出所を突き止めるべきである。

その時、少女は一瞬不機嫌そうな表情を浮かべると、魔理沙から離れ早歩きで先へ進んでしまった。永一の予想では恐らく妖力は少女から出ていた。もし妖怪化の片鱗なら危険である。この際魔理沙はどうでもいい、と彼は走り出した。

「お、永一じゃないか。久しいな——」

「悪い。今、急いでるんだ。」

魔理沙は上げかけた腕のままその場にポツリと残された。

「・・・何なんだ？」

やっと少女に追い着いた。永一の作戦はすれ違い様に少女を霊視するというものだったが、実行寸前で少女は予想外に90度左折し、店の暖簾を潜った。

幸い、ぎりぎりのところで何とか成功し、発生源を突きとめた。予想外に妖力は少女ではなく本から出ていたのだ。その場で彼は「なん

だ、只の人間か」と安堵したのだが、それからすぐに更に面倒な事も気付いてしまった。

少女は先程、この本は借り物で返しに行く所だと言っていた。とすると、あの妖力を持つ本には持ち主がいて、それは恐らく少女が入っていたこの店の人間だ。本から感じた妖力は決して良性ではない。もし、その本の悪性を知り、意図的に所持しているのなら問題である。永一は店の入り口を覗いてみたが、目に映ったのは悍ましい光景だった。暖簾が揺れるたびに外に漏れる不自然な妖力霧。そして何より、指では数えきれない数の靈魂や先の本に似た妖力源を感じた。「鈴奈庵、か。」

永一は鞆からスマホを取り出し、店をその画面に収めシャッターに触れた。

この店は間違えなく黒だ。俺の最初の術師の仕事はここか、と唾を飲み込み武者震いした。

——自宅

永一はこの日の仕事を終えて、夕飯の準備に取り掛かっていた。料理中、黄菜子がずつとつまみ食いの隙を狙ってくるので、彼女には風呂の用意を任せていた。

そんな時、彼は昼間の話を思い出し彼女にその話をしてみた。

「妖力が出る本と危険な店？」

「ああ。食材買いに行った時に見たんだ。店はとりあえず写真で撮ってきた。空気に妖力とか、霊力とか……とにかく色々混ざってて、変な靈魂まで沸いてたんだ。あれはヤバイよ。」

「こういう事は霊夢お姉ちゃんや紫様に相談するべきじゃないの？」

「霊夢お姉ちゃんとは言っているが歳は確実に黄菜子の方が上だ。」

「まあ、確かにそうなんだけどさ。……ほら、俺らが解決した方が店の宣伝になるだろ。」

「ふくん。ま、自惚れじゃなければいいけどね。」

永一は夕食の調理の片手間で風呂掃除を終えた黄菜子にスマホを投げ渡すと、彼女は小馴れた手付きで写真を画面に表示した。彼女の

適応能力にはしばしば驚かされる。

「んー、貸本屋の鈴奈庵・・・？そんなに危険な店には思えないけど。玄光は何か知ってる？」

「(いいえ。人間、妖怪共にこの店の妙な噂は出ておりません。仲間がその婦人に食事の施しを受けたとは聞きますが。)」

「!!・・・何時の間に?!」

永一が振り向くと、玄光は黄菜子の膝の上で寝転んでいた。黄菜子もそうなのだが玄光は永一の靈感と能力を突破する。只の妖怪ではないようだ。

「でも妖力を持つ本なんてそう珍しくは無いと思うよ。本だけに限らず、古くは道具なんかには付喪神が潜んでることもあるよ。」

永一は先日神玉騒動を思い出し震えた。神の名はあれど、あれはどう見ても妖怪である。

「他には、製本に妖怪が関連している本とか。ほら、魔導書(グリモワール)って言葉ぐらいは聞いた事あるでしょ？後は妖怪の手紙とか小説。一見普通の本でも古い妖怪が封じられてたりもするし。とにかく、そう言う本を総じて『妖魔本』って言うんだよ。」

「妖魔本・・・。」

妖魔本とは、主に昔の妖怪が作成・執筆した書物を指す。古典、手紙、魔導書など種類は様々だが、本来は人間の持ち物ではなく、更に数が少ないが故に稀覯本と呼ばれる。しかしその大半は人間には文字すら読む事が出来ず、供給はもちろん需要も無い。

「解説に凝ってた時もあったっけ。懐かしいなあ。」

「(何日間も動かない時もありましたね。その度に猫たちが大騒ぎになったものです。)」

「久々にまた読んでみようかな」

「(お止めください・・・)」

永一に玄光の言葉は判らないが、玄光の嫌そうな表情はわかった。一本次元を超えた内容である事は間違いない。

「今言った中で言うと妖怪が封じられてるのが近い気がする。と言うか、妖怪が封じられてるような本が普通の人の手元にあつたら不

味いだろ。」

「うくん。封じられてるってのは語弊があったかな。永一が見たのは『死んだ妖怪』を記録した本、言いかえれば妖怪の墓だね。実は、この手の妖魔本が一番多いんだよ。妖怪にとつての死は人間に忘れ去られたり存在を否定される事。でも裏を返せば・・・」

「その妖怪の存在が再認識されるようなことがあったらその妖怪は復活するって事か？」

「そう、永一君に座布団一枚！その手の妖魔本はある意味、一度は死んだ妖怪を復活させる為の物、とも言えるね。」

「もしあの店が妖魔本を意図的に集めていたら・・・。」

永一は相槌をしながらご飯を盛りつけるとあらかじめ卓上に用意しておいた鍋敷きの上に鍋を置いた。鯉と味噌の良い香りが部屋を制す。この部屋に入った物は鯉濃鍋を食べる事を強いられているのだ。

早速黄菜子を取り皿ひたひたままでそれをよそった。「うまい！」と一喝。料理人冥利に尽きる。

「ま、明日確認に行ってみよう！あたしも気になるし、お仕事の予約も明日は朝の時間帯しか無いからお昼ご飯食べてからが丁度いいね。」

人間の里に来て、初めて術師らしい事が出来そうで腕が鳴る。

「ごめんください。」

玄関口からかすれた小さな声が聞こえる。少々遅い時間の来客は初めてだが依頼だけなら22:00まで受けている為不思議ではない。

自宅の玄関は前住民が残っていた椅子と小さな机を並べるだけの極めて簡易的な事務所になっている。玄関は土間と繋がっている為比較的広く、依頼の受注窓口や待ち合い室はこの空間だけで事足りているのだ。

永一がどうぞと応答すると、客はゆっくりと玄関に入ってきた。客は立派な着物を来た貫禄のある老人だった。髪は抜け落ち、眉も長い髭も真っ白でかなりの歳に見えるが、背筋が伸び杖も突いていない。晩秋の暗い道を一人、里外れのここまで徒歩でやって来れるのだから

かなりパワフルな老人に違いない。

永一は紫から貰った羽織袴に袖を通すと接客に応じた。袴は仕事着として営業中は必ず身に着けている。

「いらつしやいませ。猫の手をご依頼ですか？」

「儂は稗田家の者じや。少々現し世の知識を貸して頂けないじやろうか。」

「はい、何でもささせて頂きます。現し世の知識と努力でお客様を満足させるのがうちの看板ですから。」

「これは頼もしい。では、午後の4時頃、稗田邸にお越しくだされ。ではまた……。」

「里までお送りしましょうか？」

「いえいえ、お心遣いだけ頂戴致しましょう。」

老人は一度お辞儀するとゆつくりと帰っていった。

いざ夕食の続き、と思った瞬間、威勢のいい「ごちそうさま！」の声。急いで居間に戻った永一の前には空の鍋と寝そべるうわばみの姿が対比するかのように並んでいた。

お返しにあらかじめ炊いてあったご飯と溶き卵を鍋の残り汁に投入しておじやを作り、シメだけに見せしめに喰い尽くしてやった（結局は彼女の全力謝罪に根負けして少しだけ食べさせた）。

お腹いっぱいいい気分の二人。ただ、それを破壊するかのよう胡散臭い悪魔は永一をスキマに飲み込んだ。

「ごきげんよう、永一。今日も嘘の加担に来たわよ。」

しかし、悪魔との契約は自業自得だったのである。

——鈴奈庵

「……やっぱり昨日の通り、変な店だなあ。」

「んまあ、それは納得かな。看板の『庵』が傾いてる所とか。」
「そつちかよ。」

相変わらず気の抜けた会話ではあるが今日の二人は戦闘体勢ではある。黄菜子さておき、永一は昨晚の術の修行を紫に頼んで霊符の作成に変更してもらった事が功を奏し、彼女直伝の強力な霊符と護符を

用意できたのだ。対妖怪の戦力も意気込みも十分である。

そして二人は怪しく揺れる暖簾を押し魔境へと潜入した。

暖簾に付いていた鈴の音が鳴ると同時に「いらっしやいませ。」という店番の少女の声が聞こえた。それに対して軽く会釈するとそそくさと本棚の奥へ身を潜めた。店内は案の定、色々な力が渦巻き、それに引き寄せられたのか、はたまた沸いたのかも判らぬ精霊や弱い神霊がそこかしこに漂っている。数こそ多いがこの程度霊なら彼が出口に向けて少し霊力流を作ればそれに従って流れていくだろう。しかし今日の目的は店の換気ではなく、至って普通の客を装い店の素性を明らかにする事だ。

永一が本棚の影で様子をうかがっていると、黄菜子が近くに積んであった本を手に取り目を輝かせて激情した。

「永一、すごいよ!!!ネクロノミコンだよ!!!しかも第一漢字の写本、これなら読めるかも!ああ・・・まさかこんな所で出会えるなんて・・・」
黄菜子のこの表情は空腹からの夕食の時ぐらいしか見ない。喜ぶのは良いが入店30秒で潜入の型を破っていくのは止めて欲しい。
「——黄菜子、自重しろ。よくわからんが今は潜入調査してるんだぞ。」

永一が小声で注意すると、

「よくわからない?!こんな稀覯本を目の前にして平然としてられる神経が判らないわ!!」

と大声で反論された。その声を聞きつけてなのか、店の奥から少女がやってくるのが見えた。

「君、ネクロノミコンなんてよく知ってるね。」

ターゲットに話しかけられてしまった。永一の計画は台無しである。とりあえず挨拶代わりとして愛想笑いに一度のお辞儀を添えてみた。

「何かお探しですか?うちは外来本から子供の絵本まで幅広く取り扱ってますよ。」

「あたしたちね、珍しい本を探してるの。」

「へえ、どんな本かな?」

黄菜子は暴露確認の為なのか永一の方へ振り返った。

目が合った。彼の「やめろ、はやまるな」のサインは苦しくも彼女の鋼のようなすつとぼけた表情に弾き返された。

「妖怪の事が書いてある本が見たいの。例えば、妖魔本・・・とか？」
黄菜子の目はまっすぐだった。それに対し彼は穏やかな表情のまま静止した。怒りはなかった。むしろ彼女の素直さに称賛し、圧巻されていたのかもしれない。人はそれを諦めと呼ぶ。

「・・・お客さん、お目が高いですね。もちろんございますよ！どうぞ、こちらへ。」

少女の表情は急に明るくなり、楽しそうに二人を店の奥の机まで案内した。すると引き出しの古い本や巻き物を全て机上に放り出しにこにこ笑顔で黄菜子に目を向けた。向けられた方かというと、机上に広がる宝の山に釘付けである。

一方、永一はその宝の山を見るなり一瞬口をへの字にし溜め息を吐いた。

「・・・あった。」

黄菜子の言う通り、妖魔本こそ彼が感じた妖気の正体だった。彼はその一帯を行き交う奇妙な妖力に圧されそうだった。

少女の名前は本居小鈴。この貸本屋の娘で自称、幻想郷一の妖魔本コレクターだという。その自己紹介と腑抜けた表情によって、永一の心配は完全に杞憂に終わったのだった。

「すごい。よくこんな稀覯本をいっぱい集められたね！」

「いや〜それほどでも・・・あるかな！」

永一からすれば、ここまで感じた危機感と若干の期待を返してもraithたいものである。「よくもこんな本集めてくれたな」という台詞は心にしまっておいた。

「この類の本は集めると危ないかもしれないよ？例えば、この本なんて妖怪化してるし・・・」

「おおー永一さん、よく判りましたね。これは付喪本という本で、本に憑いた付喪神が妖怪化したものらしいわ。」

と、小鈴はその本についての解説を始めた。それを半分聞き流しな

がら彼は適当に手元にあつた本を捲つてみたが、昨夜の黄菜子の話の通り一文字も読めない。小さな子供が描いた意味不明な落書きを集めて羅列したような書物に、何故眼前の少女たちはここまで夢中になれるのか。彼から見れば妖魔本の奇々怪々な文字よりそちらの方が難解である。同じ机上に置かれたレコードの音色に疲れた心を委ねながら小鈴に問う。

「小鈴ちゃんも黄菜子みたいに解読するのが趣味なのか？」

「解読？」

他愛も無い質問に小鈴は首を傾げた。永一は彼女が質問に対して詰まる理由が分からなかった。今までしていた本の解説では確かに、読んでいないと分からないような内容の核となる部分も話していた。「読んでないの？あたしもてつきり解読するのが趣味だと思つてた。古代天狗文字とかゴエティックなら少しは読めるし。」

「解読して読んでのの!?!:黄菜子ちゃんって・・・何者?」

「只の勉強家だよ!」

驚く小鈴に永一が「強欲な」と付け足すと勉強家に思い切り足を蹴られた。

「じゃあ、小鈴お姉ちゃんはどうやって読んでのの?」

「それはね……」

小鈴は本を開くと書面に手を置いた。その時、永一の目は彼女の手、否、本から剥がれるように立ち上る煙のような妖力を捉えた。それこそ、昨日彼が見た妖力霧の正体だった。

「例えばこれは鉄草、〃刃のように鋭い葉を持つ草で地獄全域で見られる多年草”って書いてあるわ。」

阿然として小鈴を見る二人に彼女は少し困っているようだった。

「最近目覚めたのよ、こういう力に。」

「あれは、小鈴ちゃんの力だったのか。」

「え?」

二人はこれまでの経緯、そして今日この店に来た理由を彼女に話した。

「なるほど、最近噂に聞いた陰陽師って永一さんと黄菜子ちゃんだっ

たのね。」

「ごめんね小鈴お姉ちゃん。騙すつもりは無かったんだよ。でも本が大好きなのは本当だから。」

「ううん、全然気にしてないよ。むしろ本好きの友達が出来て嬉しいわ。」

「大事じゃなくて本当に良かった。妖怪に取り憑かれてたら危険だからね。」

妖怪騒ぎを解決し、陰陽師としての名声を得ようと思っていたとは口が裂けても言えない。

「でも永一さんにこんな力があつたなんてねえ。しかも外来人ときた。これは阿求が黙ってないわね。」

「阿求？」

チリン……

暖簾の鈴が鳴る。振り返ると、いかにもお嬢様という感じの少女がこちらへ向かってきた。よく見ると昨日、魔理沙とぶつかってた少女である。

「いらつしやいま……あら、阿求。」

「今日は『なんだ』じゃないのね。これ、残りの本。」

どざりと数冊の外來本の雑誌を机に置くと、本棚近くのアンティークなソファに腰掛け退屈そうに脚を組んだ。

「確かに、これで全部ね。」

「小鈴に來客なんて珍しいわね。あんた友達少ないから。」

永一は無害そうな少女の口から放たれる魔槍のような猛毒舌に震撼するのを感じた。だが当の小鈴は大して動じる様子が無いのがますます恐い。

「さつき丁度阿求の話題に触れた所だったのよ。」

と小鈴が紹介しているのをよそに、上の空の者が一人。

「あ……あの。貴女が九代目阿礼乙女、稗田家当主の阿求先生……ですか……?」

黄菜子はいつにもなく声を震わせて問う。阿求が少し引き気味で肯定すると一点、黄菜子は目を輝かせて彼女の手を取り勢い良く握手

した。

「幻想郷縁起、読みました！あたし、先生の大ファンなんです!!」

「え……ええ。ありがとう。」

永一は取り乱した黄菜子の手から阿求を解放し注意すると一度謝罪した。気持ちは分かるが阿求のその分かりやすい愛想笑いもその辺にしてやって欲しい所である。

「聞いて驚かないですよ？永一さんと黄菜子ちゃんはなんと、現し世から来た外来人なのよ！」

「ええ、知ってるわ。」

小鈴には先の毒よりこちらの方が数段堪えたようだ。すると阿求は永一と黄菜子の顔を見てにこりと笑い丁寧に挨拶した。

「初めまして。お二人の事は聞いていますわ。改めまして、私は九代目御阿礼の子、稗田阿求です。」

「え、じゃあ貴女がこの後の依頼の？この後はよろしくお願いします。」

その時、背後から射られた痛い視線が永一の背に突き刺さった。

「永一、依頼なんて初耳なんだけど……」

「ああ、ごめん。色々（鍋のシメ作ってた）あったから言い忘れてた。」

「馬鹿なの!?!仕事のほうれんそうを怠るなんてありえない!!」

「ほうれん草?」

「報告、連絡、相談の総称、常識でしょ!というか永一、最近生活が軌道に乗り始めたからって調子に乗ってない?」

「とりあえず、報連相（報酬（食事）・連絡・相談）は出来てるんだから許せて。」

「は?」

「……すみません。」

そんなやり取りを苦笑いで見る少女二人に彼は愛想笑いをした。

「……少し早いけれど、もし良ければ私の屋敷に来てくれるかしら？ここでは少し狭いかもしれないので。」

流石の小鈴もこれには口を尖らせた。ただ何とも言えず的を得ているので「居心地は良いですよ」とフォローしておいた。

出発前に騒がせたお詫びも兼ねて、一冊だけ本を借りていく事にした。黄菜子が選んだ本は勿論「ネクロノミコン」。詫びにしては高額だった。黄菜子に選ばせたのが間違いだった、という後悔は先に立たない。

依頼の内容を聞いて外来本を多く取り扱う貸本屋の娘が興味を持たない訳も無く、屋敷には四人で向かうことになった。その道中で小鈴が「妖魔本、流行ってきたのかしら」と言ってきたので「それは無い」と永一と阿求は即答で否定した。なんでも午前中、霊夢と魔理沙が妖魔本を見るために訪ねてきたというのだ。恐らく、一人も永一、黄菜子と同じような理由で来たと思われるが、なんとなく黙っておいた。

それから少し歩いていくと塀が真っ直ぐ長く続く道に出た。大きな迷路のように複雑な道が多い人間の里にしては珍しい真っ直ぐな一本道。これ程に妙な圧迫感は初めてだが、なんとなく予想は付いていた。一行は塀の長さに相応しい大門の前で止まった。

「ようこそ。ここが私の屋敷です。ゆつくりしてってくださいね。」
外周を歩いて把握した広大な敷地。そして門の奥に見える大豪邸はその周りに広がる日本庭園に映え、偏に京都の国宝をも彷彿とさせるような荘厳さを感じる。

広い玄関に屋敷の小間使いが主とその客人をその人数以上で出迎えた。

流石に引き気味の永一だったが、よく見ると以前からの友人且つ得意先でもある小鈴ですら慣れないようだ。

彼らは小間使いの案内で、人数に対して十倍は広い大広間に通された。

「・・・大層なお屋敷ですね。」

「相変わらずね・・・」

庶民感覚は小鈴と合っているようだ。永一は屋敷の空気に圧され畏まっているが、その対称に黄菜子は如何にも慣れているかのように平然としている。

その時、トントンと畳を叩く音が近づいて来た。

「みやあ」

(あ、猫だあ)

音の方向には一匹の黒い猫がいた。手入れが良く行き届いているようで、毛並みの美しさは黄菜子といい勝負である。黒猫は永一と目が合った瞬間、全身の毛を逆立て低い唸り声を上げた。それに気づいた阿求が「はっ」と声を上げた時にはもう遅く、甲高い鳴き声を上げながら彼目掛けて飛び付いていた。

「やめろー痛い、痛…痛だだだだだだ!!!」

飛びつくだけでは飽き足らず、今度は牙に凄まじい殺意を込め彼の腕に思い切り噛み付いた。防御の為、咄嗟にかざした腕だったが、逆に防御される側、そして患部へと変わった。

「いらー止めなさいー!」

阿求が猫を引き剥がそうと掴みかかるが、逆に牙が食い込み痛みが襲う。そして距離を取る小鈴。

猫一匹に苦戦する人間たちに痺れを切らしたのか黄菜子は惨状に近づき一言呟く。

「だめだよ。」

—そこのお前。—

その瞬間、猫はピタリと動きを止め、素直に阿求の腕に捕まった。「あたし、貴方のご主人様に用があるの。だからここは今、私の縄張り。わかった?」

—この者は私の使い、お前の主を傷つける事は無い。それともこの私と知つての不敬であるか?—

黄菜子にはっこり笑って言った。すると猫は阿求の腕から解放されるなり尻尾を地に付くほど下げながら一目散に逃げ去った。

一体何を聞いたらここまで怯えるのか、猫のみぞ知る言語である。

「永一さん、大丈夫!?怪我してるじゃない!誰か、手当てを!」

すると数秒も待たずに二人の女中が救急箱を持って走ってきた。幸い怪我は歯形が付く程度で済んだのだが、女中はご丁寧に消毒と包帯を巻いてくれた。

「ご免なさいね、普段は暴れないのだけど…。それにしても黄菜子

「ちゃん、貴女、猫と会話出来るの?」

「うん!動物ならなんでも意志疎通できるよ。」

「驚いたわ。まさか聞き耳頭巾の力を持つ人間がいるなんてね。」

阿求はすっかり黄菜子に興味深々である。永一は傷がヒリヒリと熱を帯びるのを感じつつ気を取り直して席に着いた。

——数分後……

「それでは、いろいろ聞かせてもらいますね。」

「はい。でも、メモ……もとい、記録などはなさらないのですか?予定では夕方まで掛かると聞いていますので。」

「ええ、私は一度見聞きした事は忘れませんので。あと永一さん、もう少し力を抜いた方がいいわ。黄菜子ちゃんを見習ってね。」

阿求が持つ能力、求聞持の力とは一度見聞きした物事を忘れない稀代の記憶能力である。

「ありがとうございます。でも、仕事との切り替えの為、敬語は使いますね。」

永一は最近是人前で話す事が多かったが、改まって説明するとなると相手が少人数だろうと最初は若干緊張した。

それからは時間が経つのが早かった。阿求からの質問に永一が答え、黄菜子が補足し小鈴が笑う。仕事というよりも雑談だ。

彼は幻想郷に来てから運命ほどに曖昧で気まぐれな物は無いと切に思う。土御門永一の人生は神より受けた力によって散々苦しめられた。しかし今はその忌み嫌っていた力がきっかけでこの世界に立っており今に至るのだ。

雑談でこれ程まで自分の話をしたのは初めてだった。人という楽しいと思っただのも久しぶりだ。もし彼が普通の人間だったのなら当然のような経験で、当たり前の日常として処理されていたのだろう。こんな他愛も無い事に価値を見出せる日常こそ、人間として一番幸せなのかもしれない、と彼は一瞬一瞬を噛み締めるのであった。気が付けば日は低く沈んでおり、辺りはかなり薄暗かった。

「そろそろお開きにしましょうか。」

「本当だ、もうこんな時間。読書と駄弁ってる時の時間は一瞬で過ぎ

るよね。」

「駄弁ってるって・・・一応仕事だったんだけどね。」

永一と黄菜子は今、仕事だったことを思い出した。小鈴の言う通り、時間の流れは楽しいほど音速で過ぎていくものである。

「いろいろ参考になったわ。過去に外来人から聞いた話の何倍もね。」
「いえいえ、お役に立てたなら光栄です。」

駄弁っていただけで仕事になっているのだからいい仕事である。

「そういえば二人は幻想入りしてきたばかりで戸籍と住民票の登録がまだじゃない？」

「まだしてないです。やはり幻想郷にもあるんですね。」

「幻想郷でも戸籍や住民票の登録は重要な物よ。里の記録になるだけではなく、それが人間である証明になるの。戸籍は元々あったけど、過去に人間に化けた妖怪が里に潜んで人を襲ったという事件があった、その時から住民票も登録するようになったらしいわ。その事件の時、『阿求』は存在していなかったから言伝だけどね。」
「？」

永一には変な言い回しだと思いつつも最後の言葉の真意は理解できなかつた。

「発行の手続きをするから永一さんと黄菜子ちゃんはこちらに来て。」
「なら私は先に帰ってるわ。じゃあまた——」

その時、阿求は帰ろうとする小鈴の首根っこを掴んだ

「ダメよ。夜道は危険だから。すぐ終わるから小鈴は玄関で待って。」

「はいはい。全く、あんたってこういう所はお節介よね。」

小鈴は少し口を尖らせながらも阿求のお節介には感謝していた。

阿求は二人を屋敷奥の部屋まで案内すると、その襖に手を掛けた所で動きを止めた。

「永一さん、黄菜子ちゃん。貴方たちは本当に人間なのよね？」

永一は阿求の探りに悪寒が走った。急に土御門家のトップシークレットに触れるのは反則が過ぎる。

「急にどうしたのですか？」

「簡単な確認です。里の人間であることの証明書を作るのですから、この確認は絶対事項なのですよ。里には妖怪もいるようですが、あくまでも人間の里は人間の土地。妖怪が居城を持つ事は許されません。」

「な、なるほど。でも、そんなに心配する事なのでしょうか？妖怪も全員が悪ではないのでは無いでしょうか？」

「永一さん幻想郷に来たばかりですから、そう考えるのも無理はありません。ですが・・・」

その時、阿求の表情が一変した。その氷のように冷たい威圧に恐ろしきすら覚えた。

「幻想郷において妖怪は人間の敵。そういうルールという名の真実の中で社会は動いているわ。このルールが破られた時、この世界のバランスは崩壊する。それを踏まえてもう一度問います。二人は人間ですか？」

彼女に圧されながらも永一は即答出来ずせめてもの場繋ぎを図っていた。彼は幸いにもポーカーフェイスは得意だったが残念ながら嘘は苦手である。

とうとう圧に負け真実を吐いてしまいそうになったその時、何故か急に精神が楽になるのを感じた。一種の臨界を突破したのかと不思議に思っていると、胸に黄菜子のオーラが突き刺さっている事に気づいた。霊力とも妖力とも分からない謎の力に驚く最中、彼の背後にいる黄菜子の声が響いた。

「当然。あたしは『人間』の土御門黄菜子。永一の妹で絶世の美少女！なんちやって。」

「は、はあ・・・。」

ほかんと口を開く阿求。黄菜子のテンションに彼女の圧が破られた瞬間であった。この空気の中でここまで堂々と嘘を付けるのは最早才能の域である。

「なら、問題ないわね。ではこちらへ。」

襖を引くとその先は彼女の書斎だった。何とも言えない雰囲気か漂い、それが逆に違和感であった。本棚を初め部屋の至る所に新古

様々の書物が積まれている。はつきり言って、ここは「図書館」とは呼べても「女の子の部屋」では無かった。

阿求は机の上に置かれたランプに火を灯すと、棚の引き出しから二種類の書類を二枚ずつ出し目の前の机の上に並べた。

「これが住民票でこっちが戸籍。印鑑は無いでしょうから要項を埋めて下されば結構です。机と筆は一つしかないから、そうね・・・黄菜子ちゃんから書いてくれる？」

その時、永一は阿求の何気ない言葉に何故か引つかかった。何故わざわざ指名する必要があったのか。妙な胸騒ぎに彼は動いた。

「俺はボールペンを持っているのでその点は大丈夫です。戸籍の書類、貰いますね。」

彼はそそくさと書類を回収し確認すると、恐ろしい事が分かってしまった。この紙切れは一見普通の書類に見えるが、触れた瞬間に妖怪を縛る強力な術が仕込まれているのだ。術にはまだ疎い彼が何故一瞬で気づけたのか。それは自分が用意した護符と瓜二つの術だったからである。まさか護符がこんな場面で役立つとは露ほどにも思わなかった。その上周りをよく見ると、壁や天井にまで対妖怪用の術が込められており、人間に紛れ込まんとする妖怪を迎撃し絶対に逃がさない設計になっている。この部屋に入った瞬間感じた妙な違和感の正体である。発動のトリガーは書類の術の発動である。阿求は最初から黄菜子を妖怪だと疑っていたのだ。

「黄菜子ー」

「何？」

永一の指摘は一步遅かった。黄菜子は返事をしながら書類にガツツリと触れ、自分の目の前へと手繰り寄せていた。

青ざめる永一に対して黄菜子は彼の表情に不思議そうな顔をして硯に小筆を付けていた。

「・・・言う事ぐらい整理してから話しかけてよね。あ、もしかして変顔のつもり？面白い面白い。」

黄菜子はそう言い流しながら書類の上に小筆を滑らせた。その達者な筆捌きを見ながら永一はしばらく固まっていたが、書類の術は当

然、部屋に施された術も発動されることはなかった。逆に、何故発動しなかったのか不思議ではあったが、兎に角今は安心しておいた。

「阿求さん。折角なので俺も筆で書いても良いですか？外来品は壊れやすいみたいです。」

「ええ、いいですよ。」

阿求の笑顔には少し驚きが混ざっていたが、心なしか安堵しているようにも見えた。

——人間の里・夕方

「今日は楽しかったわ。良かったらまた現し世の事を話しに来てくださいね。」

「じゃあその時は何割か貸し本のサービスして貰おうかな！」

「もし黄菜子ちゃんがうちの常連さんになってくれるなら、そのくらいのサービスはしてあげるよ。」

「む……まさかこう来るとは……。じゃあ毎日行くしかないね！」

「(小鈴ちゃんの思うツボなのでは……?)」

小鈴を鈴奈庵まで送り届け、家路に着く二人。なんだかんだで無事、戸籍と住民票の登録を終え、晴れて人間の里民になり、その上話しているだけで多くの報酬を手に入れられた為、最高の気分である。何処へ行っても金持ちの依頼は太っ腹でありがたいものだ。ただ、永一には所々多くの疑問が生じていた。

「住民票登録の話だけどさ、黄菜子は気づいていたのか？」

「あの紙の事？なんだか細工されてたよね。不良妖怪に人間の証明させちゃ不味いし、あれぐらいのトラップは当然だよ。ていうか、このあたしが気づかない訳ないでしょ。」

「気づいてたのか。なら尚更だけど、よく触ろうと思ったな。」

「んまあ、あたしに効果が無い事はわかってたしね。あの術は多分、生粋の妖怪か『人間が必要』な妖怪にしか効かないんだよ。多分。人間の里は人間の住処で、その他は妖怪の住処。だけど、人間でも妖怪でもない存在だっている。その人たちも出来るだけ引き入れる為のふるいが『住民票の術』で、そのふるいで弾くのが……」

「人を喰うか否か……って事か。」

永一の脳裏に森で妖怪に襲われた時の記憶が想起した。もしあの妖怪が人間の心を持つていたとしても、里の人間から見れば恐怖の対象である。

「正解。あたしは人間を食べないから引つかからなかったって事。」

「なるほど……って、ちよつとおかしくないか？黄菜子は確かに人間を食べないのかも知れないけど、そもそも猫だし、妖怪化したのなら生粋の妖怪に当てはまるんじゃないか？」

「あー、それね。実はあたしにもよく分からないんだよね。」

思わぬ返答に永一は少々困惑した。

「？……いつの間にか妖怪化したんじゃないのか？」

「その筈んだけど、未だに自覚が無いんだよねえ。て言うか、永一の『眼』でも判らなかつたんでしょ？」

事実彼は黄菜子を初めて見た時から今に至るまで、妖怪の持つ妖気の流れを感じた事は無かつた。オーラと言い、種族と言い、自分の式神である筈の眼前の少女には謎が多すぎるのである。

「ま、分からないものは分からないし。そんな事より夕飯どうするの？」

「あー。じゃあ今日は奮発して肉でも買って帰るか！」

「待ってた。その言葉を待ってたよ永一！」

しかし、謎の少女も彼の料理の前には只の食いしん坊へと成り果てる。永一から見ると、生意気だが自身の手掛けた料理技術を褒めてくれる可愛い同居人である。一旦、彼女の謎は頭の引き出しの隅にでもしまっておく事にした。

—— 稗田屋敷・書齋・深夜

阿求は書物のいつも通り幻想郷縁起の編纂作業をしていた。幾つもの人生にてライフワークとしてきた作業ではあるが彼女も人間である。座っているとは言え長時間同じ体勢でいると疲労を感じずにはいられず、仕事をそろそろ切り上げて眠ることにした。

自分を中心に散らかる本を一か所に積み上げ、机の端に置いていた

ランプの蓋に手を掛けた時、永一と黄菜子の書類が目にとまった。重要な書類である為に優先で処理しなければならぬ筈だったが、仕事に溜まっていたが故にうっかり後回しにしてしまっていた。時間が遅いのもあり今はどうすることも出来ない為、とりあえず忘れないように書類に目を通しておく事にした。

その時、彼女はあることに気づいてしまった。生年月日の記述を永一は現し世の西暦で書いているのに対し、黄菜子は幻想郷特有の紀年法を用いていたのだ。

「・・・これは少し、探ってみる必要があるそうね。」

彼女はランプに蓋を被せると書斎を後にした。闇に包まれる稗田屋敷。そこには少女の足音と着物の擦れる音だけが微かに木霊するのであった。

— T o b e c o n t i n u e d —

第十話 悪戯、少々の絶対零度を添えて（前編）

—— 獣道・博麗神社付近

Side of medium

その日は霊夢に少々相談事があつた為、永一と黄菜子は仕事の合間を縫って博麗神社へと行った。黄菜子のアニマルネットワークによると昼のこの時間帯は99.5%の確率で神社の縁側でお茶を啜っているはずだったのだが不運にも残りの0.5%を引いてしまい生憎の留守だった。

少々待つてはみたものの仕事の時間が迫り、現在帰宅中である。ただ不思議な事に、行きよりも長い時間を歩いているのにも関わらず獣道は二人の先に延々と続いている。行きと帰りで距離が違う、と聞けば耳なじみのあるチープな怪談だが、今の永一には怪談の枠を超えた妙なりアリテイを感じた。

Side of fairy

獣道沿いの木の上。稀に見る通行人の行動を観察する者が三人。

「スター、状況は？」

「迷ってる。しかもちよつと戸惑っているみたいね。」

「ふっふっふ。行きはあえて見逃して帰り道で迷わせる、名付けて『奥の細道作戦』！いたずらも成功するし、間抜けな人間の姿も拝める、我ながら完璧な作戦ね！」

「行きで気づかなかつただけでしょ。」

「失礼ね。これは過去の失敗から生まれたれっきとした作戦なのよ！」

「そう言えば、神社に参拝客なんて珍しいこともあるのねえ。しかも兄妹で。」

彼女たちは三月精と呼ばれる三人組の妖精、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイアである。サニーが光を屈折させ姿を消し、スターが相手の気配を探り、ルナが周囲の音を消す。正に完全なるステルス能力を持っているのである。

この日は見慣れない参拝客を道に迷わせるいたずらでからかってやろうと奮起しているところであった。

「今日は調子がいい気がするわ。さて、あいつらに何のいたずらをしてやろうか……。」

「ちよつとサニー。あんまり無茶するとまた失敗するわよ。」

「まったく、ルナは臆病者ねえ。ルナがドジを踏まなければ失敗しないわよ。」

その時、スターが少々険しい表情を浮かべて二人に報告した。

「動きが止まった。」

Side of medium

黄菜子是不意に歩みを止めると何も無い空をじっと見つめ始めた。

「……。」

「……どうした黄菜子?」

「何かさつきからこつちに意識が向いてるな……。」

永一もそれに倣って黄菜子の向く方に視線を向けた。しかし視線の先は彼の眼を以てしても何も無い空であり、逆に黄菜子の言葉が怖くなった。

「何もないじゃん。怖い事言うなよな。」

「肝心な時に蛞蝓並みの鈍さだね。んじゃあ、あの木の枝をよく見せて。」

彼女は遠くの空を指差すと準備体操と言わんばかりに肩を回した。

Side of fairy

ルナは声を震わせながらサニーとスターの顔を見た。

「……ねえ……あの二人こつち見てない?」

サニーの胸にドキリと衝撃が走る。

「か……考えすぎよ。能力も解いてないし、只の人間に見えるはずがないわ!」

「そ、そうよね!別のものを見ているに違いないわ!それが偶然こつちの方向にあるだけよ。」

その時、三人の元に一度の鈍い音に続いて波のような地響きが伝わってきた。三人は互いに顔を見合わせる。いたずらが見つかった時とは違う、彼女たちの無い頭では形容しがたい計り知れない恐怖感に見舞われていた。

Side of medium

突然、黄菜子は左腕に力を込め思い切り地面に突き立てた。岩が砕けるような爆音に続き、相応の爆風で辺りの草木が軋む。一体に潜んでいた生き物が天変地異でも起こったかの如く一斉に逃げ惑い、風音だけが行き来していた静かな森が騒然となった。拳の着点を中心に半径数十センチの雑草が外向きに倒れている。

「見えた？」

「見えた。」

黄菜子の指した先の空が激む。視界の激みはやがて形となり、うっすらと三つのシルエットが浮かび上がった。おまけに彼女のオーラが三人を的確に貫いている為に尚更判りやすい。

虫に似た大きな羽を持つ少女が三人。かなり怯えているようだが逃げる素振りは見せなかった。

「なあ黄菜子、あいつらって何者？人間では無いみたいだが、何と言うか……いかにも『妖精』みたいな格好してるよな。」

「おー、ご名答。永一にしては珍しい。奴らは妖精。」

「……流石は幻想郷。妖怪もいれば妖精もいる……のか。」

「そりゃあもう吐き捨てる程いっぱいいるよ。自然の具現……と言えば聞こえは良いけど、後先考えずにいたずらを仕掛けるような極めて頭の悪い存在だよ。」

「辛辣だな……。」

「あたし、頭の悪い奴が何よりも嫌いなんだよね。」

「……とりあえずあいつらを追っ払わなきゃだな。仕事の時間も迫ってるし、どうするっ……」

「まあここは任せてよ。永一は下がってて。あー、あと耳も塞いでおいて。」

永一は言われるがままに彼女の後ろに下がり耳を塞いだ。すると黄菜子は地面に何やら記号や文字のようなものを書き始めた。最初は子供の落書きのようだったが、記号は凶形に、文字は文章のようになり、やがてそれは一つの魔法陣となった。

「・・・さあて。永一にはとっておきを見せてあげよう。」
すると黄菜子は陣に手を掲げると詠唱し始めた。

「Quoniam exuberant traxi Graffiti
humii... Abonus ventus spirat
gradupostme!!」

地面の魔法陣が光を帯びる。そして、その輝きに呼応するかのよう
に風が吹き出した。

——もしかしくなくても、これって・・・結構危ない状況なんじゃ——

「Adeomirumsonusfragoraliquo
tiens!!!」

——ひっ!!!——

その時、落雷を彷彿とさせるような破音が幾度か起こり、木々を初
め遠くの山にまで響いた。

「卑しき下級妖魔よ・・・浅ましくも我が歩みを止めた罪を知れ!! 秘術
『Remirumest Magia』!!」

「「ひええええええええええ!!!」」

上手く隠れていた妖精だったが、黄菜子の詠唱が済むや否や一目散
に逃げだした。その際に木に激突したり、何故か喧嘩を始めたりと
中々滑稽な様であった。

黄菜子の魔法は、派手な演出と大きさに聞こえる詠唱を主とした只
のハツタリであった。ローコストで済み、低級妖怪や臆病な妖精を追
い払うには効果抜群なのだとか。

辺りを見回すと妖精の能力が解かれた為に本来の景色が二人の視
界に映り、行き道から大分逸れていたことがわかった。あの妖精た
ちもこれで懲りてくれればいいのだが。

「あっははは、良い様。あの妖精たちの失敗はあたしをターゲットに

しちやった事だね。」

「・・・。それにしても、黄菜子は魔法が使えるのか。」

「魔導書とか読むって言ったでしょ。得た知識は有効活用しなきゃね。さあて、そんな事よりお仕事お仕事！」

張り切る黄菜子に対して永一は自らの式神との差は如何にすれば縮められるものかという前人未踏ながらも無駄な難題に思考を寄せていたのだった。

——大通り付近の蕎麦屋・夕方

「お、ご兄妹。そろそろ来る頃だと思ったよ。今日もご苦労さん。」

永一と黄菜子の来店に蕎麦屋の主人は笑顔を浮かべながら挨拶し、同時に婦人が向かいの四人席にお茶と茶菓子を置いた。

「毎日本当に助かります。ポストを置かせて頂けるだけでなくその場で確認まで・・・」

「それにお菓子のサービスも！蕎麦屋なのにその辺の甘味屋より美味しいからね。まさに一日の楽しみって感じ！」

「はっはっは！うちは基本、蕎麦屋なんだけどな！」

猫の手の予約受付は、事務所である自宅が人間の里から離れた場所に位置する為、足腰の悪い人や忙しい人にとってはあまりにも不便であった。その改善を図りこの蕎麦屋に設置されたのが予約受付専用のポストだった。二人が不在の際の予約受付は自宅前に設置されていた郵便受け（のようなもの）に受付書類と筆を設けて集めていたのだが、上記の理由によって普及しなかった為、極めて安直に「同じ物を里で一番便利な場所に置いてしまえ」という考えの下に実行したのだった。

効果は上々。設置して数日経った今では夕方になると蕎麦屋に寄って依頼の確認とスケジュール調整がてら店主と女将との会話とお菓子を愉しんでいるのである。

「あーら、嬉しい事言ってくれるじゃない。大福一個ずつおまけしちゃおう！」

「いくらでもゆっくりしていつてくれよな。永一が教えてくれた『牛

乳寒天』、あれが大ヒットして赤字続きが今や大黒字なんだから。」

このように蕎麦屋の主人と女将はにこにこ笑顔でお菓子のサービ
スをしてくれるのだ。

当然ポストの設置はタダでさせて貰っているわけではない。それ
以前に二人は、経営が傾きかけたかったこの店に突撃し、西洋菓子「ミ
ルクババロア」の製法を伝授したのである。結果、売り上げは好調。
今では経営も安定傾向へと向かっている。その報酬の一つとして手
に入れたのがポストの設置権なのである。

それをきっかけに、最近では蕎麦屋夫妻共にお菓子作りにハマリ、
永一と黄葉子が訪れる閑散時間に合わせて何かしらのお菓子を作っ
てくれるのである。

永一と黄葉子は店奥の座敷にてポストに投函された依頼書を広げ
手に取るなり溜息を吐いた。いつもならこちらの都合と客の指定時
間、依頼の緊急性等を考慮した上でスケジュールを立てるのだが最近
はとある現象の調査というものが多く目立っている。

「また例の調査だ。こんなに沢山。今度は水路が凍結したらしい。」

「凍匠かぁ・・・やっぱりそれが尽きないよね。斯く言うあたしもかな
り気になってるし。」

昨今の幻想郷では、ある時は森の一角が、またある時は広大な田園
風景を薙ぐように氷漬けになるという謎の現象が立て続けに起きて
いるのである。里民の間でも、最初は『不思議な現象』の範疇の事象
であったが、時を追うごとに里民の目に触れるようになり、最近では
人間の里圏内でも起こるようになってきたのだ。冬に近付いただけ
にしては部分的過ぎるのに加え過剰であり、誰の目から見ても自然の
産物には見えなかった。

とうとう人はこの現象を凍らせる匠の所業という意味を込めて「凍
匠」と呼ぶようになったのである。

昼間、二人が博麗神社を訪れたのは霊夢から凍匠に関する意見を聞
くためだった。一応、猫の手では凍匠に関する依頼は「優先度の低い
依頼」として全て請け負っているのである。

「俺は自然現象だと思ふな。妖怪の仕業にしては無差別過ぎるし考え

が見えない。第一、俺の目にも見えなかったし。」

「今分かつてる情報だと何ともなあ……。玄光は何か情報掴んだ？」
「にやう……」

——申し訳ありません。新しい情報はまだ何も。最近は急に冷えて来たのもあり、仲間の猫たちが外出を控えますから……。——

只の神出鬼没の域を越えて、とうとう永一の脳裏に玄光が瞬間移動しているのではないかという疑念が湧いた。そんなことは露にも知らず、唐突な猫の出現にはしゃぐ女将と餌付けを試みる主人。

「うーん……最終的にはブンヤにでも取り上げられて終わりなのかな。」
『【怪奇】氷結する秋の里!!』なんて出だしでさ。」

「ありそうだが今回は笑い事じゃないみたいだ。水路が凍った件なんだが、どうやら交通が止まってるらしい。船着き場の小舟も使い物にならなくなったとか色々書いてあるな……。殊の外深刻なんじゃないか?」

黄菜子は口元に笑みを浮かべながら口元に笑みを浮かべた。

「へえ、もうここまで来たんだ。そろそろかな……。」

「……やけに嬉しそうだな。」

「当然。大事になれば解決した時に里の人から信頼が集まるでしょ? 信頼が集まれば仕事もいっぱい。仕事がいっぱいって事はお腹もいっぱいになるって事。」

要するに金である。

「決めた! 凍匠の調査依頼を最優先案件に移行! こんなにもご飯の匂いがする案件、絶対逃がさないんだから!!」
「……」

信頼と共に依頼分の報酬も掠め取る。永一は正直、今までの凍匠の調査依頼を全て受けている事が疑問だったのだが、まさかこんなにも小汚い策が忍んでいたとは思ひもなかった。

——次の日

二人は朝一で依頼書の凍匠の現場へと来ていた。依頼書には水路が凍ったと書いてあったが、実際は水路は凍った物の一部分に過ぎな

かった。水路沿いの民家の屋根壁に始まり、真つ直ぐ川を突つ切り、向かい岸の民家まで凍っていたようである。時間が経ち場所によっては氷が解けてしまっているが、日陰になっている部分は勿論、水路の中には今も巨大な氷塊が残っている。氷の幅は五、六メートル程で、厚さは水路の底まで凍っていた為深さと同じである。

被害に遭った民家の屋根からは氷柱が下がり、山から流れて来た紅葉は季節外れの氷に引っかけかり鮮やかな紅を灰に枯らす。言うまでもなく自然現象という括りからは大きく外れ、異様な景色が広がっていた。

永一は橋から、黄菜子は直接氷塊の上から現場を観察した。

「想像以上ね。永一、何か見える？」

「今回も何も見えない。ただの自然現象……ではないよな。もつとも、自然現象だったら怖いけどな。」

「やる事が思ったより大胆だなあ……。霊夢お姉ちゃんに先を越されてなければいいけど……。」

「どういう事だ？」

「前にも話したと思うけど妖怪は里の人間に手を出すのはご法度。もし凍匠騒動が妖怪によるもののだとしたら、博麗の巫女である霊夢お姉ちゃんが動く。あたしがどんなに情報を集めてもお姉ちゃんの感が働いたら先を越されちゃう。」

「この凍匠が昨日で霊夢の不在も昨日つてことは……。」

「少し急がなきゃだよ。もし先を越されても圧倒的情報量で依頼遂行《ごはん》だけは絶対に守らなきゃ。」

黄菜子はその確固たる覚悟を込めて氷塊を踏みつけると、凜々しい表情を浮かべ永一と共に依頼先へと向かった。その数分後、氷塊はそこから粉碎し復活した水路の流れによって勢いよく下流へと流されていた。それを目撃した渡しの青年が青い顔をしながら広めた「凍匠の氷は爆発する」という噂は徐々に広まり、一時近隣住民を騒然とさせたのはまた別の話である。

最優先案件となった凍匠の調査だが、日常の依頼を蔑ろにすれば本末転倒である。減らしたとは言え仕事は入れ、残りの時間は全て凍匠の情報収集に当てた。軒先のメジロから人に紛れる大物妖怪まで幅広い層の幻想郷住人達への必死の聞き込みも虚しく、決定打となり得るような情報は得られなかった。

「さて、明日はどうするつもり？」

「明日は里の外で起こった凍匠の現場を巡って行こうと思ってるけど？」

「そうか……。」

黄菜子の返事は想像通りではあったが、今の永一には強く堪える物があった。

「露骨に元気ないね。言いたいことがあるなら言ってくれない？」

「俺は……今回の依頼に割く時間はもう少し控えめにすべきだと思う。今回に限らず、調査って大体は目撃情報やら前例やらから筋道立てて明らかにするものだと思うんだよ。だけどこの件は前例も無ければ一切の証言もない。きつとお前の情報網と思考能力があれば真相が明らかになるのは時間の問題だろう。だがそれから得られる物は掛かった時間よりも大きいのか？ 普段の仕事を疎かにしたら本末転倒だろ。」

黄菜子は永一の訴えに対して呆れ混じりに溜息を吐いた。

「……なるほどね。要は時間がかかる割に見返りが少ないと思ってるんでしょ？」

「ああ。現に半日使って手掛かり無いしな。」

「そうね。半日も使って犯人とその能力の性質しか解らなかったなんて顔面焦熱地獄よね〜」

「なんだって!? 誰なんだよ、犯人？」

「忘れちゃったなあ。凍匠の現場でも見れば思い出すかもね。」

想像通り大いに驚く永一に黄菜子はご満悦。要所要所に皮肉を交えながら彼をからかうのであった。

「凍匠・・・聞いた事の無い怪異ね。」

地獄のレツスン開始前、永一は世間話のような流れで紫に凍匠について話していた。妖怪の賢者、と自称する彼女からなら黄菜子を唸らせるだけの情報を掴んでいると考えたのだが、彼の期待は上の一言にて消沈した。

「紫さんが知らなかったのは意外でした。もともと、凍匠の名は里の人が付けた愛称みたいなもので本当は別の名があるのかもしれませんが・・・」

「あら、名もなき怪異に対して名付ける事は重要よ。愛称でも何でも、怪異は名付けられた時点で鮮明な存在になるんですもの。」

「・・・人間視点でそれって良い事なんですか？」

「当然。少なくとも貴方の先祖は名付けの術を使っていたわ。曖昧な存在は境界が薄い。境界の無い者に『境界を持つ者の常識』は通用しにくいだよ。ある意味、名前を付けるという行為は未知の者を此方の領域へ引き込む事とも言えるわね。」

永一は気の抜けた表情で話の理解を試みたが案の定さっぱりであった。紫にとつて会話は相手に伝わるか否かよりも自分の解釈を言葉にする事が重要なのだろう。

「それはともかく、人間の里で騒ぎを起こした事はただけない行爲です。」

「それ、黄菜子も言っていましたよ。霊夢が解決する前に凍匠の犯人を見つけるって言って聞かないんですよ。明日は各地の現場を見に行くんです。」

「へえ・・・なら明日の調査、私も同行するわね。」

紫は不気味に笑みを浮かべて言った。思いもしなかった心強い味方が増えた現状が、彼には嫌な予感の前兆にしか感じなかった。氷よりも冷たく触れる先の不安が永一の肝を冷やす。考えるだけで全身がまさに凍傷にでもなったかのような痛みが負の予感を煽り続けるのである。

第十一話 悪戯、少々の絶対零度を添えて（中編）

清々しく晴れる秋の朝。涼しい風が部屋へと吹き込み食卓の湯気をゆらゆらと揺らす。心まで晴れ晴れとするような日常の朝だが、それをぶち壊さんとする不穩の影もまたこの家の主、土御門永一の目の前に現れていたのである。

「まさか、凍匠の調査を紫様に協力頂けるなんて思いませんでした。しかも、私たちに合わせてこんな早起きを・・・」

黄菜子は温かい味噌汁をすすりながら不穩の元凶こと紫に憧憬の眼差し向けた。

「そんなに畏まらなくてもいいわ。可愛い弟子たちのお願いですもの。」

紫の微笑みかけに永一は思わず目を逸らした。不穩とは言ったものの正直な所、紫の助力は極めて頼れるものだ。しかし彼女の性格上、何かしら裏が無ければこんな面倒事、ましてや早起きなどするはずがない。現時点では根拠の無い空想に過ぎないが、彼の心を騒がせるには十分である。こんなにもまずい朝食は初めてだった。

「ぐ馳走さま。藍には及ばないけれど美味しかったわ。黄菜子は出発の支度をなさい。永一は留守番ね。」

「えっ。」

思わぬ展開に意図せず笑みがこぼれる。

「騒がせてるとはいえ所詮は怪異。三人は不要ね。それとも、この八雲紫では力不足かしら？」

「そうそう。紫様がいるんだもん。永一はいつも通り仕事して、たんまり稼いでよね。」

「あ、ああ。わかった。では紫さん、黄菜子を宜しくお願いします。」
数分後、黄菜子は身支度を終えて紫と共に出かけていった。永一はと言うと、いい意味で予定が狂ったので依頼を取りに里へと向かうことにした。

しかし、運命は彼を厄介事からは逃がさなかった。「彼女たち」は彼が出掛けるより早く訪れてしまったのである。

玄関口に浮遊する猫の手の依頼書。ポルターガイストとでも言うのだろうか、それは不自然に微振動しながらぐにやぐにやと気持ちの悪い動きをしながら此方へと向かってくる。

——ルナ、絶対に離れないでよね!?!——

——わ、わかっているわよ。サニーこそ、自然にやるのよ。この紙があたかもよそ風に吹かれて飛んできたかのように……——

永一は奇妙な依頼書の四方を札で囲い霊力を流した。札から伸びる霊力の鎖が依頼書の下の虚空を縛る。音もしなければ何も見えないのだが、依頼書の挙動がバタバタとうるさくなつた。

「お前たち、この前の妖精だろ。姿を見せろ。あとそこで隠れてる一人!お前も来い!」

目の前の妖精二人が姿を現すのと同時に戸の裏に隠れていた一匹もやって来た。人間に立って続けにちよっかいを出す割にはバレた今は身をガタガタと震わせてすっかり怯えきっているのが滑稽である。

「ルナ!やっぱり能力解いてたんでしょ!」

「それは私の台詞よ!サニーこそドジ踏んだんじゃないの!」

「いつもドジ踏んでるのはルナじゃない!」

この状況で責任の擦り合いとは見苦しい物である。冒険の手助けをしてくれる妖精のイメージとは打って変わって、幻想郷の妖精は只の子供だった。ますますヒートアップする痴話喧嘩を見る残りの妖精、スターサファイアの表情が楽しそうに見えるのは気のせいだろうか。

「うるせえ!!!」

永一の「喝」で二人は静かになった。

「また悪戯しに来たのか?これ以上続くようなら容赦はしないぞ。」

「ひいひい違うんです!今日は悪戯なんかじゃありません!」

「里の外れの陰陽師っていう人間ならなんとかしてくれて聞いって来たんです!」

「なら何故姿を隠した?やましい事があるからだろうか?」

「い、今さっきここから恐ろしい魔法使いが出てきたから!悪戯してごめんなさい!どうか一回休みだけは……!」

先日のハツタリが予想以上に効いていたらしく、少々可哀想な事をした気がした。

「あのさ、もし俺が君たちに気づかなかったとしたら、君たちの前に現れるのは恐ろしい魔法使いの方だったと思うよ。」

「「えっ」」

永一は縛った二人の術を解くと三妖精は安堵した顔で持ってきた依頼書を彼に手渡した。

依頼書にはその梓一杯に「チルノを探せ」とだけ書かれている。彼が本当に三人の存在に気づかなかったらそもそもどうすることも出来なかっただろう。

「チルノ……と言うのは仲間の妖精か？」

「そうです。少し前から見なくなつて、気になつて探してみただけ見つかからないんです。」

聞いた瞬間は妖精からの依頼というのも如何せん気が進まなかったが、黄菜子の言葉を思い出した。妖精とは自然の具現。幻想郷の環境事情はまだ把握していないが、それが姿を消すのはあまり良いことでは無いのかもしれない。

「・・・わかつた。この依頼、受けるよ。」

「「本当!?!」」

「もちろん。ただ、俺はチルノという妖精を知らないから君たちにも手伝つて貰うよ。」

「当然よ！そうと決まれば我ら光の三月精、チルノ搜索作戦に出動よ！」

「「おー!」」

「あ、その前に俺と二つ約束してくれ。一つは、この依頼の事を恐ろしい魔法使いこと妹の黄菜子に内緒にすること。もう一つは人間に對しての悪戯は程々にすること。俺と君たちの安全と依頼を受ける上での約束だからな。」

「「二つ目は約束出来ないわね!」」

「・・・」

永一は羽織り袴を着ると騒がしい三妖精を連れて里の外へと飛翔

した。姿を消せる妖精たちとはいえ、白昼堂々人外を連れて里の中を動き回るわけにはいかないからだ。

とはいえ、端から見れば妖精はただの子供。三人の妖精を引き連れて歩く様はまさに託児所の保父だった。

光の三妖精こと、サニーミルク、スターサファイア、ルナチャイルドとの騒がしい一日はまだ始まったばかりだ。

——魔法の森

永一がこの場所に足を踏み入れるのは幻想入りした時以来二度目となる。

乾燥した秋の空気から一変して、この場所は相変わらず肌に湿度を感じた。化け物茸の瘴気が薄く、普通に呼吸が出来る程度であるのは幸いだが、決して居心地の良い場所ではない。

しかし、景色は最高だ。無秩序に立ち並ぶ木々には現し世の作られた杉林のような統一性が無く、栗、ヒノキ、クヌギなど木の種類も様々だ。森林浴として訪れれば新鮮なマイナスイオンを直に浴びられるが、瘴気を忘れて迂闊に深呼吸しないように注意だ。

「スター、チルノの気配は？」

「うーん。見つからないわ。」

例の通り永一には妖精の霊力を見ることができない為、スターの能力、「動く物の気配を探る程度の能力」に頼っている。

その時、背後からルナの叫び声飛び込んできた。すつとんきような声に驚かされた他の三人は思わずルナの視線の先を追った。そこには一本の立派な大木が佇んでいるのだが、その葉はくしゃくしゃに丸めた紙切れを広げたような見た目で、紅葉もしきれないのにバラバラと散っていた。

サニーとスターは啞然としながらルナに続いて木に駆け寄った。

「良かった。枯れてはいないみたい。」

ルナの報告にサニーとスターは木を前に座るとホッと安堵した。

永一は事を飲み込めないでいると、サニーは彼に木についてを説明した。

「・・・この木、少し前まで私たちの家だったの・・・枯れてなくて本当に良かった。三人でずっと暮らしてきた家だもん。」

氷が溶けていて気づかなかったが、ここが凍匠の中心だった事に気がついた。

凍匠が起きた当時、この木は天辺の葉の一枚まで氷付けにされていた。まさに巨大なドライフラワーと化していたその木が、まさか眼前の三妖精の旧家だったとは夢にも思わない。

枝を触れば容易に朽ち、葉を握れば塵と化す。見たときは枯れたものだと思っていたが、植物の生命力は伊達では無いようだ。

ルナは難しい顔をしながらサニーとスターに提案した。

「これはもう一度住み直さないと完全復活は難しいかも。二人とも、ちよつとの間だけこっちに引越さない?」

「愚問ね。私は初めからこのつもりだったわ!」

「私も賛成よ。」

提案は満場一致で決まったらしい。

「よし、早速引越しの準備に——」

「チルノは探さなくてもいいのか?」

「「あ。」」

ただし、依頼しておいて放置は勘弁してほしいところだ。

その他、里外れの田園地帯や草原、ひいては妖怪の山周辺まで探したが、チルノは見つからなかった。

正直に言うとう策は尽きていた。手懸かりは種族が妖精以外になく、むしろ幻想郷の人口よりも桁違いに多い妖精の一匹を搜索するなどあまりにも無謀だったのだ。

そして永一はダメ元の最後の砦に向かったのだった。

——博麗神社・参道

「永一さん。ここにはいないと思いますよ?」

サニーの言葉にルナとスターは頷いた。

「決めつけるには早い。聞く話だと神社なのに妖怪もよく訪れるらしい。妖怪退治の巫女が妖怪退治の巫女が住んでいる筈なのに妙な話

「だけどき。」

「ええと、そうじゃなくて……」

「わかってるよ。退治されるのは死活問題だよな。三人はここで待つてなよ。」

そう言うのと永一は鬱蒼とした参道を進んで行った。相変わらずの人払い参道だが、三回目ともなると少々慣れてくるものだ。

——博麗神社・境内

目当ての少女、博麗霊夢を見つけるのに苦労しなかった。トレードマークの紅白巫女服を着て、今日は境内の掃除をしていた。

人影に気づくと嬉しそうな顔をしたが、目が合つて永一だと気付いた瞬間普段の気怠そうな顔に戻った。

「久しぶり。この間はお世話になったな。」

「……参拝客じゃないのね……」

「悪かったな。少し聞きたいことがあつてさ。」

すると霊夢は持っていた竹箒を本殿の柱に立て掛けると永一を縁側まで導いた。

「チルノ？」

「そう。妖精なんだが、とある依頼があつて探してる。心当たりはないか？」

「さあね。妖精のなんて居場所なんて興味ないもの。」

「そうか……」

「妖精探しなんて妙な依頼ね。まさかとは思うけど、妖怪の悪事に荷担してないでしょうね？」

「変な疑い掛けないでくれよ。俺の能力の前に妖怪の小細工は通用しない。故に悪事の加担はあり得ない。それは断言しよう。」

「威勢だけは良いのね。まあ、妖精の事なら、あそこの三匹の方が詳しいんじゃない？」

霊夢が指す先、桜の木の上には見知った顔が見え隠れしている。

「永一さん、サニーが言つてたじゃない。博麗神社には絶対にいないって。」

スターの台詞に対してサニーはえへんと言わんばかりのしたり顔をした。それをルナは「そこまでの事ではない」と思いながらポーズと見ていた。

「霊夢…あの妖精たちと知り合いなのか？」

その時突然、彼の目の前に表情に笑みを込めた三妖精が姿を表した。

「そうそう、何を隠そう霊夢さんと私たちは！」

「神社の裏で杯を交わし！」

「仲間の誓いをするほどの仲なのよ！」

サニー、スター、ルナはそれぞれポーズを決めながら言い放った。打ち合わせでもしてきたかのような一体感に自慢げな表情が漏れている。

対して霊夢は尚更に呆れ顔だ。

「……神社裏のミズナラの木に住み着いているだけよ。」

「なるほど……じゃあこの前、霊夢が留守の時に神社を訪ねた帰りに、俺と黄菜子を能力で迷わせたのは何故？」

「「あ、!!」」

その時、三妖精の表情が一変して凍りついた。

「……あんたたち……良い度胸してるじゃない……!!」

三妖精からは遂に表情が消え、その代わりに瞼に涙が溜まった。

三人は声なき声で懺悔の言葉を呟き続けたが、霊夢の手に握られた断罪のお払い棒が三人の願いの不叶を意味していた。

裁きの鉄槌が三妖精に振り下ろされたのは言うまでもない。

「……経緯は分かったわ。でも、妖精が突然姿を消すことなんてよくあることなんじゃないの？」

「うん……でも、チルノはすぐ一回休みになるほど柔な妖精じゃないわ。」

「そうよ！悔しいけど、私たちに勝ったんだもの。」

「まあ、ちよつとバカだけど……」

「「あんた（お前）たちが言うか？」」

妖精は自然の具現。妖精が寄る自然が消えればたちまち姿を消す。

しかし、姿を消しても死ぬ訳ではなく、しばらくすれば何処からか現れるものだ。

その自然の摂理をよく知る筈の妖精がこうも焦っているのは虫の知らせ改め、自然の知らせとでも言うものだろうか。

「仲間を探したい気持ちもわかるけど、待てばそのうち沸いてくるわよ。それに、あんたたちが思い詰めてるなんてらしくないでしょ？」

霊夢が三妖精をなだめるようにして諭すと、落ち着いたのか彼女たちはお互いに顔を見合わせどこか安心そうな表情になった。

永一はなんとなく博麗神社が妖怪の溜まり場と呼ばれる理由が解った気がした。

「そういえば、私が留守の時に神社に来たんでしょ？何か用でもあったの？どうせ参拝目的ではないでしょうけど。」

「あー。聞きたいことがあったんだよな。ちよつとした怪異の事だったんだけど。解決しそうだからもうどうでも良いんだけどさ。」

怪異とは凍匠の事である。その時はまだ凍匠を本格的に調べていなかったが、あわよくば猫の手による解決をしたかった為、霊夢から悟られずに情報を仕入れようと企んでいたのである。

ただ、黄菜子は既に犯人に目星を付けている上に気まぐれに紫が調査に加わり、怪異解決は秒読みである。

「気になるわね。どうでもいいなら聞いてもいいでしょ？」

「それもそうだな。氷の怪異なんだけど——」

「「氷!?!」」

彼が霊夢に問い終わる前に三妖精が口を挟んだ。

「氷の怪異って、チルノの事じゃない!？」

「きつと…いや、絶対そうに違いない!」

「やっぱり、私たちに内緒で悪戯してたんじゃない!」

三妖精はまだ不確定な「氷の怪異」と聞いただけで嬉しそうである。

永一は、氷を扱う妖怪などたくさんいるだろう、と返すつもりだったが寸での所で言葉に詰まった。

彼が凍匠の現場を見たとき、そこからは一切の妖力の流れを感じなかった。だからこそ最初は自然現象と疑っていたのだが、その特徴は

自然の具現たる目の前の三妖精にも当然当てはまるのだ。

もし、一連の怪異が妖精の仕業だったのなら……

永一は凍匠調査の為に自作した幻想境の地図を取り出し、凍匠現場の目印を指差しながら三妖精に問う。

「この山の中腹辺りと……この森のこの点。最後に人間の里の水路、さつき行った門外の田園地帯。この中でチルノがよく行きそうな所はあるか?」

三妖精は顔を見合わせると揃って答えた。

「『全部』」

「そうか。三人とも、状況が変わった。今すぐチルノを助けに行くぞ。」

「『え?』」

「ちよつと、いきなりどうしたの?そらに今すぐってどういう……」

霊夢の言葉は最早今の永一の耳には届かなかった。彼は三妖精を抱えるとフルスピードで神社から飛翔した。

「永一さん!突然慌ててどうしたんですか?」

「霊夢には知られるべきじゃない事だったからな。あと、事は思いの外深刻かもしれない!」

「わかった……けど、救うってどういう事ですか?」

「端的に話すぞ。恐らくだが最近チルノは里で騒ぎを起こした。それを最強の妖怪が知って動いている。俺らはその妖怪より先にチルノを見つけなければならぬってことだ。」

妖怪は人間の里に手を出してはならない。幻想郷の妖怪たちに課せられたルールの一つだ。

永一がこの依頼を受けたのは言わば自然保護の為に、里で騒ぎを起こした妖精がどうなろうと自業自得の筈だった。しかし目の前に自分を頼って、ハツタリとは言え恐ろしい相手と鉢合わせになるリスクまで負って彼の元までやって来た三人の友人を、よもや自分の身内の妖怪に始末させるわけにはいかない。

「チルノの住み処ってどこにある?」

「霧の湖ですけど、そこは何度も探してますよ?」

「絶対にいると思う。これは直感だけど…あと、三人は湖から離れた場所にいてくれ。」

「私たちも行きます!」

三妖精は今までになく真面目な顔で訴えたが、易々と首を縦に振れなかった。

どちらかというと、危険なのは黄葉子と紫よりチルノである。生命の具現が妖精ならば、氷の妖精という存在は矛盾している。恐らく三妖精はチルノを見つけられなかった訳ではなく、分からなかったのだ。今のチルノは何らかの理由で妖精を超えた、もつと概念的な存在へと昇華しているのかもしれない。

「…わかった。けどもし危険があったら絶対に逃げろよな。」

「大丈夫です。知つての通り逃げ足には自信があるんです。ただし、絶対にチルノを見つけてよね?」

「ルナがどんくさくさくなければね?」

「わたしだってやるときはやるんだからね!」

三人はおちやらけて言いながらも内心は心痛していた。凍匠の、巨木を一撃で瀕死にする程の力を目の当たりにしているのだ。今のチルノは見知った仲間のチルノではないのかもしれない。それが何よりも怖かったのだ。

永一は三人の軽いやり取りを彼女たちなりの決意と受け取った。

「永一に抱えられいざ行かん、魔境霧の湖へ!必ずや邪智暴虐の妖怪共から阿呆のチルノを救いだす為に!!」

「おー」

いや訂正、決意というよりも高揚しているだけなのかもしれない。

——霧の湖

霧の湖、名前の通り、季節や時間を問わず霧が覆っている湖である。霧が覆っているため太陽光が通らず、夏は涼しく冬は寒い。人里に最も近い湖であり里の人間からも親しまれる場所だ。特に夏場の昼時には湖畔で避暑がてら昼食を食べる農家の人々が見れる。ただし、里から見えるほどの濃霧の日は足を滑らせて湖に落ちる事故や、特に妖

精の悪戯被害に合う可能性が高いため用心が必要だ。

そしてこの日も湖はいつも通り霧が覆っていた。

しかし妙なのが湖岸を囲うように白い物体が漂流しているのだ。気になって見てみるとそれは薄い氷だった。

「随分と遅かったわね。待たせ過ぎじゃないかしら？」

声の方向を向くと、そこには黄菜子と紫が静かに佇んでいた。

—T o b e c o n t i n u e d . . .

第十二話 悪戯、少々の絶対零度を添えて（後編）

遡ること数時間前：

黄菜子は一連の刀匠騒動の解決に大妖怪、八雲紫の協力を得ることになり、彼女への期待に若干の緊張が混ざりコンディションは好調だった。

しかし、紫が絡むと何が起こるか分からない。黄菜子はお気に入りの着物はやめて彼女が「バトルクロス」と呼ぶ真っ白なワンピースを着た。

精神も身なりも気合いは十分。最高の状態で紫と共に家を出た。

「黄菜子。今日の私の行動は特に貴女の持つ情報に左右されます。期待するわね。」

「お任せください。ただ、犯人の目星は付けております故に、紫様の手を煩わせるまでも無いかもしれません。犯人は恐らく霧の——」

「あら、頼もしいわね。それなら、私は少しお腹が減りましたわ。何処か美味しい食堂を知らないかしら？」

黄菜子は耳を疑った。今朝、自宅で永一の手料理を食べたばかりである。

朝だけで、しかもこの短時間で二食も食べようとはなんと贅沢な妖怪なのだろうか。

「お、お任せください！では蕎麦はいかがでしょうか。ここからも近くておすすめのお店がありますよ。」

——大通り近くの蕎麦屋

「お、いらっしやい黄菜子ちゃん。今日は早いな。」

「おじちゃん、おはよう！今日はお客さんで来たんだよ。」

蕎麦屋の店主は遅れて暖簾を潜った紫の姿を見るなり顔を真っ青にして足を震わせた。

「ここが黄菜子おすすめのお蕎麦屋さんなのね。思っていたよりも落ち着いた雰囲気なのね。」

「い、いらっしやいませ。お連れさんは空いているお席へどうぞ。黄

「菜子ちゃんはちよーつといいかな?」

黄菜子は店主の手招きに呼ばれると駆け足で店の奥へ進んだ。

そこには同じく顔を真っ青にした女将さんが店主と二人でわなわなと震えていた。

「…黄菜子ちゃん。あの方とは知り合いなの?」

「そうだよ。(永一が) 幻想入りしてから今の家に住むまでお世話になってたんだよ。」

黄菜子の言葉を聞くと夫妻は深呼吸をしてから話し始めた。

「驚いたわ、まさか黄菜子ちゃんが知り合いだなんて。あの方は里の大地主様なのよ。」

「人間の里の西側は全部あの方の土地。遠目からは見たことあったけど、まさかお客さんとして来店するなんてなあ……」

(紫様は人間に扮している時は地主なのか。)

永一と黄菜子が住まう家が早々に二人の管理下に置かれる事になった理由も納得である。

「自信持つてよー。食通のあたしが紹介したんだよ?まさか、あたしの舌を疑う訳じゃないよね?」

夫妻は顔を見合わせた。やはり緊張の程は凄まじい物のようだが、強張っていた顔は柔らかくなり震えは無くなった。

「これも何かの縁だ。いつも通り気合い入れていくぞ! 大地主である前に黄菜子ちゃんの友人だもんな。」

「…いや、大主《マスター》だよ。」

「?」

紹介した黄菜子の心境も似たようなものだった。

幻想郷の管理者である大妖怪にして永一の師。その他にも様々な要因が重なり、彼女にとつても紫は大物なのである。

黄菜子は紫が座る座敷席へと向かった。紫は少々大袈裟に何か考え事をしているような素振りをしていた。

「お待たせしました。どうかされましたか?」

「いいえ。ただ、ここのお蕎麦が待ち遠しくて仕様がななのです。黄菜子が紹介するぐらいなもの。さぞかし美味しいことでしょう。」

黄菜子が厨房を見ると、蕎麦屋夫妻も此方を見ていた。

朝から蕎麦屋夫妻には気疲れさせてしまったのは申し訳ない。

町人、八雲紫の心臓に悪い闊歩は続く。

「お、そこのお着物が似合うお姉さん！うちのお飾りはいかがで……大地主様!？」

「まあ、可愛らしい髪留め。うちの橙に着けたらきつと似合うわ。」

「こ、この髪留めは小さな女の子に好評です。ただ人気商品で現品限りとなりますが、いかがでしょうか？」

「紫様、橙ちゃんは些かお転婆ですのすぐ壊してしまうのでは？」

「うーん…それもそうねえ…じゃあ私が着けるわ！」

「えー！」

——人間の里・路地裏

「おいテメエ！イカサマしてるだろ!!」

「心外だなあ？お前が弱すぎて退屈してるこっちの身にもなれ！ま、財布はウマイがな。」

「なんだとお!？」

「おうおう喧嘩か?」

「やっちまえやっちまえ！」

一人の男が胸ぐらを掴むと数名のギャラリーが集まる。

昼間から働きもせずに博打して、挙げ句の果てに喧嘩騒ぎなど呆れて物も言えない。

里の西部から東部中心まで一本で行ける近道であるが、少々治安が悪いのが珠に傷である。

「紫様、暫しお待ちください。止めて参ります…って、紫様!？」

「貴方たち、喧嘩なんてつまらないことやめなさい。」

「な、西の大地主!？」

「やるならとことんやりなさい。バトル・ロワイアルよ!!」

「紫様——!!!」

——人間の里・甘味屋

紫の自由奔放さに振り回されて数時間。いつの間にか太陽は仰ぎ見る位置にまで達していた。

「幻想郷は狭い世界だと思つて見くびっていましたわ。人間の里も案外楽しいものね。」

紫は上機嫌でぜんざいをつまみながら黄菜子に言った。

対して黄菜子は体力的には問題ないが、紫の行動は常に予想を越えている為、常に気を張り詰めていた。

式神である藍の苦労を身に染みて理解した。

「紫様。あたしの言いたいこと、わかりますね？」

「勿論よ。こんなお昼時に甘味屋にいるなんてナンセンスだ、でしょ？」

「刀匠事件の解決です！ここまでずつとはぐらかされて来ましたが、今回はそうはいきませんよ！」

紫はあたかも初耳と言わんばかりの惚けた顔で大袈裟に会釈した。

「それは冗談として、少し時間を稼ぐ必要があつたのよ。私の計算通りに事を進める為の、ね。それと、黄菜子。貴女、私に対して固すぎるじゃない？今日の目的は貴女との親睦を深める意図もあつたのよ。今の貴女の顔、朝よりもいい顔よ？」

そう言うと紫は黄菜子に微笑んで見せた。

「紫様……」

黄菜子は今日あつた事を想起した。

「……正直言つて疑心暗鬼です……」

「偶然ね。藍も昔同じこと言つてたわ。」

「藍様とは気が会いそうです……」

——人間の里・東門

人間の里とそれ以外の境界にはご立派な塀が建てられている。その出入口となつている門の一つがこの東門である。

人間の里の東部に位置する門だから東門と呼ばれ、永一と黄菜子の家は真逆の西部に位置するため、門をまたぐ機会は殆どない。

魔法の森や妖怪の山へ行く際の中継地点となつているせいか、一部

では魔境の入り口と囁かれているという。

紫と黄菜子は刀匠の潜伏場所、霧の湖へと向かっていた。

「刀匠と呼ばれる怪異の正体。掴んでいるそうね。」

「チルノという妖精の仕業では無いかと思っっていますが。」

「70点ね。」

「思いの外高得点をくださるのですね。」

「じゃあ…60点?」

「…犯人は掴めている事がわかりました。しかし…」

「正体が掴めない…でしょ?」

「はい。そもそも氷の妖精という存在が矛盾しているのです。本来妖精は自然の生命力を具現化した存在。生命力を奪う冷気は妖精として存在し得ないんですよ。そして今回の刀匠。妖精の域を超えています。」

「やっぱり減点ね。55点。もつとスケールを大きく見なきや駄目よ。」

紫は人差し指を立てて一度ウインクした。

「それじゃあ答え合わせ…と行きたいけれど。」

そしてその指を虚空に向け縦方向に切ると、よく見知った不気味な隙間が当然のように顔を出した。

「永一と合流してからでも遅くは無いわ。」
「?」

隙間を抜けるとそこは霧の湖の畔だった。辺りを見回して人影は自分たち以外には存在しなかったが、数秒ほど経つと歪なシルエットの高速移動する物体が降り立った。

「随分と遅かったわね。待たせ過ぎじゃないかしら?」

飛行物体の正体が永一だという事はすぐにわかった。黄菜子には、自分達の目的地に何故彼がいるのか謎だった。そして彼女は彼の近くにいる忌ま忌ましい三つの人影に気付く。

「永…何遊んでるの?店は?留守番は?…仕事をサボっているのも有罪だとして、よりにもよって阿呆の妖精どもに唆されていたなんて!職務怠慢とあたしを不快にした、罪状計二犯《ギルティ》!」

「「ギャーツ!!!」」

「待て待て待て待て!!!」

鋭い視線に低姿勢の構え。黄菜子の立ち姿が少女から一転してファイターへ変貌する。

怒りを露にする彼女に永一と三妖精はライオンに捕まったシマウマのようである。

絶えそうな声で言い訳にも満たない頼りない弁解を試みるも目覚めた獣は暫く眠らない。

「黄菜子、その辺にしておきなさい。形はどうあれ、永一は貴女と同じ答えまで辿り着いたのよ。」

紫の的確な助け船に黄菜子は怒りを静めた。

「二人とも揃ったところで問いの答え合わせ……と行きたいところだけど、本人がいるのに私がするのも野暮が過ぎるですわね。」

紫は隙間から傘を取り出すと、その先を湖の水面に浸けた。

「さあ、私の古き友人よ。再開の時よ。」

——「個体と液体の境界」——

その瞬間、風に波打っていた水面は動きを止め、一切の静寂が空間を支配した。瞬きも儘ならない須臾の時間に湖の水という水が氷と化したのである。

氷となった霧はダイヤモンドダストと化し、日光をプリズムのように反射、ひとえに極光の中にいるようだった。

眼前の光景に見とれていたのもつかの間、一閃の碎音に続いて地鳴りが響く。

その音を耳にしたサニーは凜々しい表情でスターとルナに提案した。

「逃げよう。」

「うん。」

永一が振り向いた時には三人の姿はなかった。正直、今回ばかりは彼も逃げたかった。

湖の中心部分のみ氷が溶け、凍った湖面にぽっかりと穴が空いたよ

うにそこだけ湖が復活した。しかし水面の様子は、奇妙にも薄い氷が張っては溶けるを繰り返していた。

その時、湖底から人影が水面へ向かい猛進してきた。人影は勢い余って水面の氷と水飛沫を飛ばしながら水上へ飛び出すと湖の上空にとどまった。その軌跡は歪曲した氷柱となり、その根元にあたる溶けていた筈の湖の中央部は再び凍っていた。

人影、つまり淡い水色の着物に身を包んだ女性は紫を見つけるなり頬を膨らめて言った。

「会って早々に水攻めだなんて酷いじゃない！湖底を凍らせてせっかく気持ちよく寝てたのに。文字通り寝耳に水よ！」

「紹介するわ。こいつがこの地球上の絶対零度を司る概念にして刀匠の犯人、チルノよ。」

「初めまして、あたいはチルノ・・・って、誤魔化すな!!」

容姿、雰囲気、何よりも強さ。二人が探し回ってやっと見つけた相手は、確かにチルノではあるものの『チルノ』からはかけ離れていた。「それよりも紫は覚えてる？1000年前の勝負、まだ決まっていたでしょ？」

「あら、まだそんなことまだ覚えていたの？そんな昔の事なんて気にも留めていなかったわ。」

「こんな最近の事も忘れてしまうなんてね。所詮は妖怪ってところかしら。」

チルノから放たれる圧倒的な気迫。低気温の寒さとは違った悪寒が永一の全身をなぞった。それに対し、黄菜子は全く動揺することなく彼女に言い寄った。

「貴女が凍匠ね？氷付けにされると里の人が困るの！やめて！」

文字通り身も凍るほど緊迫した空気に正論の一閃。黄菜子の簡潔で的確な注意に対しチルノは少々の動揺を表情に浮かべた。

まさか初対面の相手に注意されるとは夢にも思わない。チルノは困り気味で紫の方を見るも、彼女はチルノの困り顔に笑いを堪えるのに必死だった。

「悪気があった訳じゃないんだよ。ごめんなさい。」

チルノの捻り出した返事はあまりにも素直であっさりとしていた。黄菜子もまさか謝られるとは思わない。逆に驚かされてしまったような様子に紫は尚更笑っていた。

「ところで、紫が来るのはわかってたんだけどさー。この子たちは誰?」

「永一と黄菜子。私の弟子よ。」

「土御門黄菜子です。よろしくね!」

「土御門永一です。」

「黄菜子に永一かあ。へー、紫が弟子を取るなんて想像がつかないな。それに人間の兄妹だなんて。坊やたちく精々喰われないようにね。」

「あら、失礼しちゃうわ。」

二人はチルノの快晴のような笑顔に戸惑いながら思った。想像した戸惑い方と違う。特に永一は深く思った。

悪霊、妖怪、超人。今まで彼の人生で出会った恐ろしい力を持つ存在は必ず霊力の流れを持っていた。しかし、眼前の存在には流れが無かった。いや、見えなかったのだ。

三月精がそうだったように、彼は超自然的なものによる霊力の流れを認知出来ない。ただの妖精なら彼の脅威とはなり得ないが目の前の存在は違う。

見える筈の物が見えない、紛れもなく彼にとっては天敵となる恐ろしい存在だ。

「それにしてもチルノさんって何者なんです? 妖精……には見えないのですが。」

「そう? あたいはれつきとした妖精よ。ちよつと最強なだけ。」

「なるほど。では、最強なチルノさんは何故幻想郷を凍らせて回ったのです?」

「あー。それはあたいの意思じゃなくて、幻想郷の『鍵』のチルノの作業なんだよね。」

凍匠の原因はチルノにして眼前のチルノにあらず。

遙か昔、チルノは現在の幻想郷に当たる場所に分身を置いた。その分身こそ永一と三妖精が探していたチルノである。

彼女曰く、分身を自身に還元したところ、一時的に意識を乗っ取られてしまったのだという。分身チルノは突如手にした真正銘の最強な力に喜び、感情の赴くままに力を振るった結果が一連の怪異、凍匠の正体である。

しかし、最後の人間の里の凍匠は本体のチルノが意図的に起こしたという。用事が済み幻想郷を去る前に紫に会おうとしたが居場所がわからなかった為、里で怪異騒動を起こして誘き出そうとしたのだという。

「——あたいは世界に散ってる鍵を集めて旅をしてるのよ。遙々幻想郷に来たのも『鍵』の回収が目的だったってわけ。」

「……あのくチルノさん。今の話を踏まえると頼みづらいお願いがあるのですが。」

「ん？これは紫に貸しのチャンスじゃない？あたいに出来ることなら何でも言つてよ。」

「仕事の依頼で『チルノ』という妖精を探していて……というより取り返して来いと。」

「そんなの駄目に決まってるでしょ。」

永一の予想通り即答で断られた。

「友人に会う事はあくまでもついで。あたいは『鍵』を回収しに来たの。さつきも言つたけど、君が探してる『チルノ』は鍵。自分の身体なのに返すつても変でしょ？」

「待った！」

彼女の言い分は至極真つ当である。自分自身を返せと言われるのも妙な話である。

しかし、彼があつさり彼女の言い分を飲み込まんとする時、黄菜子は背後から一喝にて口を挟んだのだった。

彼女は懐疑的な目でチルノに問う。

「貴女は分身の自分を『鍵』と呼んでたよね？それを集めてるってことは、鍵で閉まっている何かを開くって事だよね？貴女が隠している物は何？」

するたチルノの表情は無邪気な笑顔から一変して怪しい微笑みへ

と変わった。

「……真っ直ぐな眼ね。しかもあたいを前にしても全く動じない精神力。本当に人間？」

「ご生憎様、褒められるのには慣れているの。話してくれると嬉しいな？」

「うーん……いいわ、教えてあげる。あたいの目的、それは本来のあたいを解放すること。今一度、この世界を私の手中に置くこと。人はあたいの世界の事を全球凍結と呼ぶわ。」

「なんだって!?!」

永一と黄菜子は驚きに顔を歪めた。

人類が生まれる遙か昔。地球全土は数百万年もの間、氷によって支配された。その時、気温は氷点下50℃まで下がり海底も1000mまで厚い氷に覆われ、その当時地球上に繁栄した生命の殆どは滅んでしまった。

一連の大異変を現代人は全球凍結、若しくはスノーボールアースと呼ぶ。そして、永一たちの目の前にいる「チルノ」はその異変そのもの、地上の冷気という概念を具現化した存在なのである。

「それじゃあ地上の生態系は……」

「崩壊するわ。」

「って事は、美味しいご飯が食べられなくなっちゃう!!」

「そっちなか!!」

黄菜子はどうとう怒りを露にした。彼女の食べ物に対しての執念は神殺しを体言するに相応しいだろう。

「世界を手中に、なんて言っても結局は自然の節理よ。人間の君なら心当たりがあるんじゃない?言わばあたいはこの世のリセッター。過ぎた繁栄に制裁を与え、新たな繁栄を再生することが役目なのよ。まあ気にしないでよ。どんなに早くても君たちの寿命には間に合わないからさ。」

チルノは永一を見て言った。人間は文明発展の為に世界を狂わせた事は歪められない事実である。

そこで黄菜子は悪巧みを込めた笑みをニヤリと浮かべて言った。

「なるほどね。って事は、あたしたちが『鍵』を取り返したら全球凍結は起こらないし、ちよつと癩だけど永一の依頼も果たされるんだね。こういう事を人間の間では一石二鳥って言うんだよ。」

「石が当たる前提で話すのね。そう言えば、人間はこんな言葉も言ってたわ。二兎追うものは一兎も得ず。」

「なあんだ。たった二兎しか追わなくていいんだ。」

双方の掛け合いに不穩さが増す。チンピラ同士ならまだしも、妖怪と大自然の権威である。乱闘騒ぎにでもなったら最早誰も止められないだろう。

「黄菜子、煽るのもこのぐらいにしろ。チルノさんも乗らないでください。」

すると黄菜子は呆れ顔で言った。

「全く永一は……チルノの目的を聞いたのに紫様の意図がわからないの?」

「紫さんの意図?」

(何か考えてたかしら?)

偶然か必然か、紫が黄菜子の言葉に対して首を傾げていた事を彼女は知らない。

「生態系が崩れるってことは人口も減る。人口が減れば多くの妖怪は力を失い、存在を維持できなくなる。」

「未来、幻想郷を揺るがす大異変の首謀者って事になるな……」

「そう。だからあたしたちは生態系の全ての為に、」

「何としても鍵を取り戻さなければならぬ。だが……方法はあるのか?」

「……」

「あるわよ。」

声の主は紫だった。黄菜子はその方法に期待したが、直感的に永一だけは恐ろしく嫌な予感を察した。

「言いがかりね。あたいが鍵に触れたら最後、鍵を奪う方法なんて無いわ。」

「そうかしら? 幻想郷には決闘ルールがある。チルノ、貴女も知って

いるでしょう?」

「!!……まさか、弾幕勝負に鍵を賭けろって言うの? 馬鹿馬鹿しい! そもそもあたいにメリツトなんて無いじゃないか!」

その時、黄菜子は突然高笑いすると、チルノを指差して言った。

「逃げるんだ? もしかしてあたしたちが怖い? 最強と言っても所詮は妖精って事ね。」

永一は啞然として背筋は氷の如く冷えきった。同時に自分の無力さを恨んだ。

何故なら、黄菜子の挑発は一閃の魔槍と化してチルノの闘争心に思い切り刺さってしまったのだから。

「紫の魂胆は見えてるわ。初めからあたいと戦わせて弟子二人を稽古させるつもりだったんだろう? まあ友人のよしみよ。技量に合わせ手加減してやるつもりだったんだ。……だが気が変わった。お前たちはさぞ強いのだろうが、精々あたいから逃げて短い余命を稼ぐ事を勧める。んで、こいつらを氷漬けにしたらお前(紫)だ。いいわね?」

「あたしの魔導書に e s c a p e のスペルは無い。あたしは幻想郷の生態系の覇者。治める者は民に讃えられる権利と守る義務がある!!」

「面白い愚言だ! 二人ともまとめてかかってこい!!」

黄菜子の体勢が低くなった時、永一は平和な交渉を諦めた。

純白のワンピース《バトルクロス》を纏った見慣れた少女は再び武神へと変貌した。

真正面。武神は目線に捉えた敵へと一毛の誤差すら生むこと無く真っ直ぐに飛び込んだのだ。

小細工などしない事の証明と、ただ純粹に戦いを愉しみたいことの意味表明だったのかもしれない。黄菜子が拳を引いたとき、偶然か必然かチルノはそれに応えるように拳を差し出した。

瞬間、凄まじい破音が湖上の空間に拮抗する。

「ほう、まだ凍らないか! 金属性と火属性の混合魔法って所かな?」

「ご名答。熱伝導する鋼の籠手に灼熱の炎。氷の貴女には粹な魔法でしよ? ただし……」

黄菜子は一度身を引き距離を取った。

「冷気も熱だよね。貴女に長時間接触するのは危険。霜焼けになっちゃうかも。」

「惜しい。あともう少して氷漬けにしてやったのに。黄菜子、貴女は楽しめそうね。それに比べてあなたのお兄さんは何をしているのかしら。」

戦闘開始直後、チルノに飛び込んだ黄菜子に対して永一の姿は後方の上空にあった。

「永一なんて気にする必要無いよ。貴女が今、注視する必要があるのはこのあたし。本当に強いのなら、あたしが驚くような力を見せて欲しいな?」

「死に急ぐには早いわ。もつとあたいを楽しませてから死ね!」

——氷符『アイシクルフオール』——

チルノのスペルカード宣言。その瞬間、黄菜子の体ほどある氷塊が現れた。

黄菜子はそれを一つ一つ確実に避けて行った。しかし、生半可な弾幕ではない。一つ避けるとまた一つ二つ。氷塊は大きさに見合わない狂気的なムーブで彼女を襲う。しかし彼女も負けていない。攻撃をかわしながらも着実にチルノへと近付いていた。

弾道の隙間。チルノへの一直線を黄菜子は見逃さなかった。黄菜子の一撃はあまりにも完璧で呆気なくターゲットを捉えたのだ。

黄菜子の拳を中心にひび割れて砕け散るチルノの身体。プリズムの如く七色に光を反射する氷の塊は、偽物の氷像にしてはあまりにも精巧過ぎたのだ。

黄菜子の背後には氷の太刀を天高く掲げ、不敵に笑う殺気が存在していた。

「せっかくの美人像が台無しね。でもまあまあ楽しかったわ。チエツクメイト。」

——凍剣『グレイサージャッジメント』——

チルノのスペルカード宣言。

同時に、チルノは太刀の切っ先を黄菜子へ向けた。

それから一拍の間もなく湖上には別の静寂が生まれた。しばらくすると切っ先から遠く離れた先にある木々の葉がバラバラと散り始めた。

凍匠。その名は突如音もなく斬痕のように冷凍される現象をあたかも「刀匠に鍛えられた名刀の太刀筋」と形容した故に付けられた物だ。

凍匠の目撃者はいない。しかしもし見た者がいたのなら、その一振は、罪人を斬首する裁きの一振と形容しただろうか。

そして切っ先の目の前にある小さな身体は散りゆく一輪の花の如く儂く崩れた。

「さて、残るは貴方ね。土御門永一……って逃げたか。別にいいわ。貴方にはあたいを満足させられるだけの実力はないしね。紫、次はあんたよ！覚悟しな——」

その時、チルノの身体の自由が利かなくなつた。彼女が全身に目を向けると、四肢を縛るように札が鎖のように巻き付いていた。

まさかと思ひ、倒した相手の亡骸を覗いてみると、まさに札の出所はそこであつた。

「今だ黄菜子！奴を叩け!!」

「言われなくてもわかっている！スペルカード!!——」

——覇剣『オベリスクカリバーン・氷』——

その時、チルノの真下から巨大な氷柱が彼女を突き上げた。空中に舞い上げられてもチルノへの猛攻は止まない。彼女の八方から放たれた柱の追撃。

チルノは氷を操る妖精。札の鎖が解け追撃の柱をねじ曲げようと手をかざすも、柱はチルノの命令に沿う動きはしなかった。柱は彼女に触れた瞬間、初めて凍りついたのだ。

柱の先端は氷なるまでの間不定形に歪み、氷になった時にはチルノの身体をより強固に縛り付けていた。

チルノの眼前には浮遊する一つの影。そしてその後ろから小さな影が顔を出した。

「サンキュー永一。間二髪の所で助かったよ。」

「まったく無茶しやがって……というか飛べないなんて初耳だぞ？」

「あたしの戦場は地上なの。」

「身代わりとは……お前たち……謀ったな!!」

「あなたの美人像とやらにも負けてなかっただろ？」

永一はチルノに近づくと再び口を開いた。

「黄菜子が注意を引いてくれたのは好機だった。お陰できつちりと準備が出来たよ。あなたの氷の力のトリガーは腕の動きだろ？黄菜子の攻撃を受け止めたとき、スペルカードの発動、そして今。あなたは決まって攻撃方向に腕を向けていた。あなたの氷は厄介だ。腕を封じてしまえば少しは楽に戦えるようになるだろう。黄菜子の魔法には驚かさされるばかりだ。一発目は油断しきったあなたをぶっ飛ばし、二発目以降の柱《オベリスク》を氷製と錯覚させること。あなたはまんまと引つ掛かって隙を生んでくれたって訳だ。あなたの触れたものを凍らせる体質。肉弾戦を好む黄菜子にとっては脅威だが、水を凍らせて可動域を無くしてしまえば馬鹿力でも氷は砕けない。これで無事、あなたの技を封じられたって訳だ。」

「……永一、お前を放っておいたのは迂闊だった。その通り、あたいはまだ身体の制御が完全じゃない。幻想郷の鍵はなかなかの力らしいわ。だが、お前たちはあたいの動きを封じたに過ぎない。鍵はじきに定着する。その時は紛れもなくお前たちの敗北だ。それまでにあたいを倒せるのかしら？」

「倒せるかどうかは正直神のみぞ知る。自称、生態系の覇者様が何を背負ってるのか知らないが、覇者が生態系を守るなら、俺は土御門黄菜子を守ってみせる。故に俺たちに敗北の選択肢は無い！」

「自称じゃないし、こんな頼りない男じゃ盾にもなんないよ！でも――」

黄菜子は永一の背から柱へと飛び移ると、今までにない程に恐ろしい笑みを浮かべた。

「丁度いい時間稼ぎにはなったー！」

その時、柱の表面に刻印が浮かび上がった。

そのヒエログリフの刻印にはこのような意味の言葉が記されていた

た。

「覇者に続べられし紅き炎。終わり無き再生の光を我に示せ。九柱神《ヘリオポリス》の天頂の眼。王《ファラオ》の命にて其の魔を穿て。王の名は土御門黄菜子。神の名はラー!!」

——日符『天照らす天球の眼』——

その場にいる者の眼に映る世界は暗転した。闇の世界。それは夜とは違った底知れぬ深さと完全性を秘めていた。

その時、天頂から一筋の力がオベリスクを照らし美しく輝かせた。

光の先、天頂の大きき鳥が見えた。優雅に飛行する巨鳥の姿を眺めていると、黄菜子は飛び付き瞼を腕で覆った。

「何するんだ!?!」

「馬鹿! 見るな! 見たら失明するよ! そのまま後ろに10秒間全速力で飛んで!」

彼は言われるがまま後退した。湖畔降り立った先は湖畔近くだった。目を開けて見てみると、湖の中央、チルノが拘束されている場所だけに眩むほどの光が指していた。

「……なんだこれは!!」

「ふふふん。あたしの一撃必殺。あらゆる物を焼き尽くし灰すら残さない。祭壇を作るのと南中時刻でしか使えないから条件が辛いんだけどね。」

「祭壇……? お前、何か呼び出したのか?」

「それは企業秘密。あ、この魔法は霊夢おねーちゃんだけには絶対内緒ね」

「???」

しばらくすると、闇が暗れ光が消えた。光が射していた場所は黄菜子の言う通り跡形もなくなり、湖に張っていた分厚い氷もその殆どが溶けてしまっていた。

湖に波の音が返ってきた。その時、永一はあることに気付いた。

「……って、依頼! もしかして鍵のチルノまで!?!」

「あ、無事じゃないかも。」

「ど、どうしよう……あいつら(三妖精)の仲間、殺めちゃったよ……」
「大丈夫よ。妖精は生命の具現。自然がある限りはまたどこからか沸いてくるわよ。」

「そうそう。当の本人はピンピンしてるしね。」

声の主はいつの間にか真正面にいた。死ぬどころか傷の一つすらも付いていない。

「分身(鍵)を使って氷を溶かしたのね。光に隠れて気付かなかったのはちよつと迂闊だったな……」

「ご名答。まさか東洋の異界でこんな大魔法に出くわすとは思わなかったわ!」

チルノは永一と黄菜子のいる方向に腕を掲げた。

「黄菜子、なんか不味そうな雰囲気なだけど……どうする?」

「さっきので魔力使い果たしちゃったし……あーっ!!悔しい悔しい!!!」

「おかけでやる気100%だ!さあ、今度はあたいのターンよ。貴方たちにはとっておきを見せてあげるわ!」

——全球『パーフェクトフリーズ』——

その技はあまりにもシンプルでもあまりにも反則が過ぎる技だった。完全なる凍結。その名の通り物体をその形のまま、一瞬にして氷結させたのだ。

さざ波の音は一瞬で止み、湖面は再び、波の形を残しながら凍っていた。空から凍結した一羽の鳥が落ちてきた。宙を舞うはずの鳥が波の上に落ちる。矛盾のような現実がそこにはあった。

完全なる氷の世界。その日、霧の湖は一切の命を許さない無慈悲な死の世界の片鱗を見せていた。

「アイスバリア。……貴方たちをここで殺すには惜しい。特に土御門黄菜子。あの時、もし全身が凍り付けになっていたなら負けていたわ……あたいは必ずこの世界を我が物にする。それまでもっと強くなってからあたいにリベンジしに来なさい。さて、次は……」

チルノの目線の先、丁度永一と黄菜子がいた場所には氷のドームがあった。パーフェクトフリーズの穴。チルノは二人がいた場所だけ

ドーム状に避けそこに閉じ込めたのだ。

「ああああなんとる屈辱!!見せしめに幽閉するなんて!!」

氷のドームは黄菜子の打撃でも破壊できないほど強固な物だった。

「まあまあ、負けたけど生きてただけでも御の字って事で——」

「まだ負けてない!このあたしを舐めた事を後悔させてやる!」

同時刻、怒り心頭の黄菜子と同じく怒りを貯めている者がいた。

「往生際が悪いぞ紫!いい加減あたいと勝負したらどうなのよ!」

「勝負ならさつき済んだでしょ?貴女には悪いけど、勝ち越しさせてもらいますわ。」

「じゃんけん勝負の為に前前の弟子と戦うわけ無いでしょ!!少しは真面目に答えなさい!」

「フェイクに引つ掛かって、拘束されて、最大魔法を撃たれた貴女が勝ち?」

「それは手加減したからに決まってるでしょ?弟子なんでしょ?死んじゃうよ?」

「しかも最後のアレ。なんて大人げないのでしょ。文句無しの判定負けね。貴女にはじゃんけんがお似合いね。」

「ほお〜随分と言うじゃないか。なんなら手始めにこの幻想郷をあたいの世界に——」

「すみません!!」

チルノの鋭い目が声の主たちに向いた。三妖精である。

「ちっ、チルノを……返してください……」

「……は?」

威勢のいい声かけに対して肝心な要件は蟻の囁きのようだった。

チルノは冷気を出していなかったが、三人は恐怖でガチガチに固まり完全に萎縮してしまっていた。

「サニー……あの絶対怒ってるわよ……」

「そうよ。逃げよう。今なら何とかやり過ごせる。」

スターとルナは震えながらサニーに訴えた。サニーは何も言わなかったが、彼女もまた震えきっていた。

「……ああ、よく見たらお前たちか。悪いけど後にしてくれる?今は

忙しいの。」

今のチルノはただの妖精など眼中に無い。視線は依然として強者へ、紫へと向いていた。

サニーは弱かったが、その目の輝きは決して眼前の強者は勿論、誰よりも強かった。

「ダメ！今を逃したら多分チルノとはもう会えなくなる！」

「でも、永一さんたちが負けちゃったんだよ!? 私たちに何が出来るのよ！」

「永一さんたちが負けたからこそ、チルノを取り戻せるのは私たちしかないじゃない！お願いしたら返してくれるかも知れないでしょ！」

スターとルナは顔を見合わせた。お互いに恐怖で引き吊った表情をしていたが、三妖精の意思は一つだった。

「そうね。やれるだけやってみようじゃない！」

「チルノ、帰ったら家来にしてやるんだから！」

三人は小声で「せーの」と合わせると今度は十二分の大声で要件を伝えた。

「「チルノを返してください!!!」」

対するチルノは極めて無関心だった。

「……ああ、お前たちか。悪いけどお断りよ。しかもあたいはこの嘘つき妖怪のせいです今すこぶる機嫌が悪いの。お前たちに用はない。帰りなさい。」

「帰りません！」

相変わらず三人はやはり震えていた。言葉に反して今すぐにでも逃げ出したいのはチルノにも伝わっていた。

だからこそ彼女は不思議だった。単独行動である妖精が三人で群れているのもそうだが、群れの外の妖精にそこまでする義理があるのか、と。

しかし、同時に心中では少し意地悪してやろうという気が湧いてきていた。

「あたいの氷は生命をも止めることができる。もしうつかり手が滑っ

てお前たちを凍り付けにしたらどうなるだろう？おおっと、手が！」
三人の立つ地面の真横から巨大な氷柱が飛び出した。

鋭く煌めく氷の刃に三人は怯え身を寄せあっても、足だけは動かさなかつた。

「……逃げないか。ならこれならどうか？」

——氷符『アイシクルフオール』——

チルノの周りから無数の氷の礫が両脇に放たれた。際限なく放たれる氷は弾道を変え、湖上を風ぐように広がるとやがて鋭い破音を立てながら地面に突き刺さった。

それでも三人は動かなかつた。

「何故!?何故お前たちは逃げない!?お前たちがチルノにここまでしてやる義理はなんだ!?!」

三妖精は怯えながらも目はしつかりとチルノを見ていた。

「仲間だからです！確かにあいつはバカだし無鉄砲でバカだけど、氷の妖精の癖に暖かい奴なんです！それに……チルノはこの程度じゃ逃げない！ここで逃げたらまたあいつに負けた事になる。だから逃げないし、勝ち越してなんか逃がさないわ！スター、ルナ、そうよね!?!」

「こうなったらダメ元ね！最後まで付き合つてやるわ！」

「そうね！どうせ妖精だもの。一回や二回の休みぐらいどうつてことないわ！」

三人は気丈に振る舞っていたが、終始震えていた上に目には涙を浮かべていた。

三人の健気な姿にチルノはもう怖がらせようなんて到底思えなくなつた。

チルノは三人の視点の高さになるよう身を屈むと何も言わず静かに三人まとめて抱き締めた。

三人はどういう風の吹き回しかわからず逆に驚いてしまった。

「紫。残念だけど今回の勝負はお預けにしといてあげる。命拾ひしたわね。」

「あら、じゃあ私の勝ち越して良いわけね？」

「……そうね。お前の幻想郷、いい世界じゃないか。」

チルノは再び三妖精に振り返るとパチリと一度指を鳴らした。すると、チルノの身体から冷気が流れ渦巻き、次第に小さな影を象った。そして、煌めく冷気の中から一匹の妖精が三妖精に倒れ込んだ。

「「チルノ!!!」」

本体のチルノは鍵のチルノを撫でると、どこか羨ましそうな目で見つめた。

「こいつ、少々無鉄砲なのが珠に傷かもしれないが、よろしく頼んだよ。さあ、もう用は済んだでしょ。早く住み処へ帰りな——」

突如、本体のチルノの姿が三妖精の視界から消えた。

高速で突き進む影。武神の眼はまだ死んでいなかった。

「黄菜子と永一！お前たち、何故ここに!!」

「それだけ貴女の技が穴だらけって事よ！」

パーフェクトフリーズの欠陥。それは、二人を閉じ込めたからこそ生まれてしまった滑稽な抜け道だった。

閉じ込められてすぐ、二人は氷のドームと湖上に張る氷には不自然な境界があることに気づいた。ドームの氷は極めて頑丈だが、足元の氷は普通の氷だったのだ。

つまりる所、黄菜子の拳が湖面の氷を砕き、道を切り開いたのである。

チルノはそのまま対岸近くまで突き飛ばされた。しかし、肉弾戦であの黄菜子とも張り合える戦闘力。不意打ちとはいえ巧く受け身を取っていた。

しかし、受け身を取った場所は彼女にとって最悪だった。

札が張られた地面。そこに触れた瞬間、彼女の全身は氷に磁石のようにガツチリと押し付けられた。

「身体が効かない!?!」

「性質記憶型束縛札。同じ霊力流を持つ物体をくっつけられる便利な術だ。あんたが寝ている所はついさっきあんたが張り直した氷の上だ！まさかお蕎麦屋の依頼ポストを作った時の余りがこんな所で役に立つとはな……」

そして、永一は黄菜子の背後に回り背中に触れた。

「受け取れ！俺のありったけの霊力だ！」

彼の身体中に流れる霊力が全て黄菜子へと注がれる。全ての霊力が切れた所で彼は直立出来なくなり氷上に伏してしまった。

「……なるほど、無属性の魔力だね。属性魔法からは外れるけど、確かに受け取ったわ!!」

跳躍、黄菜子の身体は大空へ舞った。手のひらを存分に広げチルノに向けてとニヤリと少年のような笑顔を浮かべた。

「とりあえず撃つ！黄菜子ビーム!!」

壊滅的なネーミングセンスに比例するようにその威力は凄まじいものだった。

湖上は再び眩しく、恐ろしく光った。

三妖精は呆然とそれを眺めながらも逃げることをしなかった。全てを滅ぼす天の火でも、終末の氷でもない。紛れもない生命の光だったからなのかは三妖精のみぞ知る事である。

戦闘後、何故かチルノはあっさりと敗北を認めた。彼女は、弟子が勝利した口実に煽りを入れる紫に対し少々苛立ちを見せながらも、最後には黄菜子との再戦を誓い、満足そうな顔で幻想郷を後にした。

そのすぐ後、永一は高熱に倒れる事になる。里の生活には一切手出ししなかった紫にしては珍しく、藍を派遣して病臥に伏す彼の代わりに家事を代行した。

ありがたさ半分、藍の料理の腕に悔しさも半分であった。

それから数日後。

仕事に復帰して里へ向かうと二人は里民からの称賛の嵐に巻き込まれた。「偶然」にも派手な戦闘だったが故に、気になって湖へ向かった里民がちらほらいたのだという。

「恐ろしい氷の怪異を追い払った実力者」の名を広げた末、何でも屋、猫の手のキャッチフレーズに「悪霊退治」の四文字が増えることになった。永一はあまり乗り気では無かったが、黄菜子の言う通りこの一件を境に仕事が増える結果となったので、野となれ山となれという

認識である。

かくして、凍匠騒動は土御門兄妹の完全勝利にて幕を閉じたのであった。

——自宅・早朝

「「ごめんください!!」」

「うるさーい!!目の前にいるでしょ!」

朝早くから賑やかな客がやってきた。三妖精とチルノである。

「わざわざ来てもらったところ悪いけど俺たちこれから仕事でな。夕方にしてくれないか?」

「いえ、時間は取らせません。依頼のお礼を持ってきたので、それを渡しに来ました。」

「なんであたいが手伝わされなきゃならなかったんだ……」

「「あなたは黙ってて!」」

チルノはあの一件の記憶が無いらしい。何はともあれ元気そうで何よりである。

黄菜子は四人から大きな籠を受け取ると、その蓋を開いた。

「松茸がこんなに沢山!!舞茸にしめじまである!!栗なんてイガも取つてあるし、見直したわ!やるじゃない!!」

その他にも。

食べ物には目がない彼女は、極めて頭の悪い存在と罵っていた者の台詞とは思えない称賛ぶりである。

「本当だ、こんなに沢山。」

「妖精は義理堅いんです。」

「さて、どうだか。ありがたく受け取っておくよ。」

「気に入ってくれてよかった!ではさよなら!」

サニーがそう言うのと四人はそそくさと家を出ていった。

黄菜子はその様子を見ながら呟いた。

「妖精も案外、良いところあるじゃん。」

永一は籠を見ながら返した。

「ワライタケ、ヒカゲシビレタケ……幻覚作用を引き起こす毒入りだ。」

……マンガみたいな毒キノコ《ベニテングタケ》なんて仕込む馬鹿いるか!!」

永一は料理だけではなく、材料の知識も深かった。そして黄菜子の怒りの沸点は、食に関するの愚弄である。

「グリモワール、竜滅の記録より抜粋……」

彼女の一蹴の跳躍は彼女の身体を逃げる四つの影の背後まで運んだ。

哀れで自業自得な妖精は表情を歪めた。お得意の逃げも隠れも通用しない。彼女たちに来る唯一の行動はただ一つ。

「「「ぎゃあああああああ!!!」」」

叫ぶことだけだった。

「完全解放《マダンテ》」

黄菜子は全ての魔力を解放した。

——T o b e c o n t i n u e d ……

第十三話 風化した最先端の道具

晩秋。秋の終わりに相応しい寒さが幻想郷を覆った。

色付いた葉は散り始め、山や森の地面は今頃色彩豊かな季節の絨毯に模様替えしている頃だろう。

師走を目前に控え、何でも屋・猫の手の書き入れ時は近い。だからこそと言っている問題に二人は直面しようとしていた。

「うちはお急ぎの依頼受注に弱すぎる!」

夕食の居間。黄菜子は焼き魚を噛み砕きながら唐突に言った。

黄菜子の急提案や思いつきは珍しくない。永一はいつも通り彼女の話に耳を傾けた。

「冬はもう目前。里の人はみんな揃って新年に向けて大掃除とか始めたりするわけだよ。」

「と言うと?」

「いつもの仕事に加えてその手の仕事が増えるってこと。つまり書き入れ時だよ!それなのにあたしたちの依頼は前日以前の指定時間しか受け持てないんだよ!」

「でも、空き時間には黄菜子の仲間の玄光くんがリサーチしてきた人に売り込みに行くじゃん。」

「それがそうも行かないんだよね。この時期から先はこっち(猫界隈)も書き入れ時なんだ。この時期を逃すと獲物がみんな冬眠しちゃうんだ。頼めばいつも通り仕事を持ってきてくれるだろうけど、これからの時期、玄光にはこっちの仕事を手伝わせない。これはあたしの意向ね。」

と言うと黄菜子は土間の方を見た。直後、草が揺れる音が遠くに向かって行った。

「つまり、誰でも直ぐに依頼を入れられるような案が欲しいって事だよな?電話とかどう?」

永一は台帳の横に置いてあるスマートフォンを指差した。

すると黄菜子は呆れた表情で言った。

「やっぱり永一は現し世の人間だよね……幻想郷の人間の間固定電話がどれくらい普及してると思う?」

「……じゃあ、固定電話がある家に頼んでさあ——」

「それは無能な高機能算盤《スマートフォン》の『圏外』を圏内に出来ればの話。そもそも幻想郷の電話が現し世のオーバーテクノロジーに繋がるの?」

「そればかりはどうにもならないな

……」

結局、この日は有用な案は出ずに終わった。

——紫の異界

その日、永一は朝も早くから紫の異界に引きずり込まれた。

本日は数百の札を一度に操りながら紫の猛攻をひたすらに受け流し避ける、紫が「レッスン」と呼ぶ弱いもの虐めである。何故彼が虐めと呼ぶのか。彼女は彼が苦しむ様を楽しんでいるからである。ちなみに、逆に上手く立ち回ると悔しがる。

「今日はこのぐらいかしら。」

「紫さん……どうか朝から半殺しにするのはやめてください……」

「半殺しが嫌なんて貪欲ねえ。じゃあ明日からは朝から全殺しね。」

「……せめて夜にしてください。」

永一に選択の余地はなかった。

「まあいいじゃない。今日は午前中いっぱい午後の仕事は無いんでしよう?」

「予定だけです。依頼が無ければ売り込むですよ。」

「あ、そうなの。じゃあこれ。魔法の森入り口の『香霖堂』という古道具屋まで持って行ってくれるかしら?」

永一は何が「じゃあ」なのかわからなかった。

紫がどこからともなく取り出したのは、幻想郷らしからぬ警告色を放つ真っ赤なポリタンクだった。

久々に見る現し世の物体に思わず目を奪われる。

「……灯油ですか?」

「ご名答。最近冷えてきたからねえ。」

「幻想郷には灯油を使う暖房器具があるんですか？」

「貴方と同じように現し世から流れてきた物よ。外来品を知り、使用を望む者にはそのエネルギーを授けますわ。勿論対価を頂きますけれど。」

永一のスマートフォン充電は基本的にモバイルバッテリーで行われる。そのモバイルバッテリーの充電は数日に一回紫に頼んでいるのである。

しかし、彼は対価など払った覚えはない。少々身に覚えがあるのは気のせいということにした。

「現し世の道具が使える上に紫さんと知り合いの人間。一体何者なんだろう……」

「フッフ。それだけかしらね。」

「？」

紫の言葉には時折理解に苦しい点がある。そういう所が彼女の胡散臭さを生んでいるのだが、当の本人はそれを知ってか知らずか改善する気は無いらしい。

「そうそう、灯油の対価も忘れずにね。」

「対価って言われましても、何を貰えばいいんですか？」

「そうねえ……店の中で貴方にとって一番価値が無さそうな物を貰ってきなさい。」

「……？」

彼は気が付くと自宅の居間にいた。レッスンは基本的に心身共に疲れているのだが、毎回帰宅した実感が湧かないのがまた疲れるのだ。

「お帰り。今日はお土産付き？」

黄葉子を見た瞬間、仕事があることを思い出し、今日彼は三度疲れるのであった。

朝から散々疲れたが仕事は極めて円滑に進んだ為か、午前も半ばで完全に終えることができた。

それからは昼食の準備である。彼にとって料理は苦ではない。む

しろ心の平安の礎たる行動であると言える。つまり、時間があるということは、それだけ品数が増える事を意味する。

数時間後、黄菜子が帰る頃には昼食とは思えない量の品々が食卓に並ぶことになる。

彼女が歓喜に震える姿は想像に苦しくない。

——数時間後

「時に永一、設備投資をすると生産量が増えるって言うじゃない？」
「そうだな。」

「あたしの場合、生産量の増加量は異次元。よく覚えておいてね。」
そう言うのと黄菜子はこれまでに無い勢いで家を飛び出していった。永一も思う存分料理が楽しめたのは久々だったのでもいいリフレッシェになった。ただ、その分だけ食費がかさむのは珠に傷である。

その甲斐があつてなのか、今日は午後を完全に空きにして貰えたのだ。仕事において黄菜子の温情は珍しい事だ。

しかし永一の視界に無駄に目立つポリタンクが映った。これで紫のお使いが無ければどれだけ良かったことか。

面倒ではあるが、さっさと配達を済ませるのが吉だ。

——香霖堂

魔法の森の東部。永一の自宅から見ると森を挟んで対角に当たる位置にその店はあつた。

魔法の森の中ではないだけに、森特有の嫌な湿度や瘴気は無く、比較的過ごしやすい場所である。ただし、近寄り難さは凄まじいものだ。建物には古ぼけたポスターや看板が至るところに貼り付けられ、周辺には錆びきった道路の標識や用途不明のパイプなどが転がっている。

紫の話を踏まえれば現し世の道具コレクターという事がわかるが、現し世の人間視点ではどう考えてもゴミ捨て場である。

本当に人がいるのかすらも怪しくなってきた。

重いポリタンクを持ちながら人間の里を越え、鬱蒼とした神社周辺

を抜けてきたのだ。せめて店主がまともな人間である事を祈りながら扉を開けた。

店の中の散らかり具合は想定内である。
最奥の席に長身の痩せた男がいた。

「いらつしやいませ。何かお探しで?」

「あ、いえ。自分は八雲紫のお使いで、灯油を持ってきました。」

男は席を立ち永一に近寄ると、少し驚いた表情で彼を見つめ、急に悲哀な目になった。

「どうもありがとう。しかし八雲紫、まさか人間まで式神に……」

「違います。自分は八雲紫の弟子です。普段は猫の手という、所謂何でも屋を経営してます。」

「猫の手!? って事は君が土御門永一君かい?」

男は目を輝かせて彼に詰め寄った。永一は無言で頷いた。

しばらく話しているうちに、永一は男と打ち解けていった。

男の名前は森近霖之助。幻想郷では数少ない、現し世の道具を取り扱った古道具屋を経営している。

永一は見た瞬間から気づいていたが、霖之助は妖怪である。正確には妖怪と人間のハーフ、いわゆる半人半妖という種族である。彼に曰く、見た目や力は人間と大差無いが、寿命は妖怪と同じく長寿なのだという。

霖之助は種族についてこれ以上話さなかったが、彼が何故こんな辺境で店を経営しているのか、彼には何となく理解出来る気がした。

「しかし今日は良い偶然が重なるようだ。もう少し後、君の妹さんが来る予定なんだ。」

「黄菜子に会ったんですか?」

「うん。今朝、里に向いた時、偶然にも妹さんに声を掛けられてね。うちの仕入れの手伝いをしてもらう事になったんだ。香霖堂もこの時期は書き入れ時だね。」

この瞬間、永一の休暇返上が決定した。

「店の商品を見ての通り、僕は外の世界に興味があつてね。妹さんの黄菜子ちゃんもそうだけど、君にも会ってみたかったんだよ。」

永一にはどれが店の商品なのかわからなかった。

どこを見ても「それを売るなんてとんでもない」商品ばかりである。

「そうそう！君に一度見て貰いたかった物があるんだよ！」

霖之助は目を輝かせながら机の引き出しから何か取り出した。

その

「最近手に入れた物でね。一見奇妙な板に見えるが、実はこれ、『携帯電話』なんだ！」

「実は」も何も、永一から見れば一昔前のガラパゴスケータイである。「携帯電話が流れ着く事は珍しくないけど、開閉するものは非常に貴重なんだ。幻想郷に流れ着かないということは、外の世界でもきつと最先端に違いないと思うんだ！しかもこれ——」

霖之助は携帯電話を開閉すると永一に見せつけた。誇らしげなその表情は携帯電話の液晶に匹敵する輝きに満ちていた。

「ちゃんと作動するんだ！作動するということは、つい最近まで使われていた動かぬ証拠。古道具屋をやっていて良かった。これを見る度に僕は思うよ。」

永一は完全に言葉に詰まった。何故なら、彼の着物のポケットには、開閉機能はおろかボタンすらない、猫の手御用達の超高機能算盤《スマートフォン》が存在しているからである。料理でタイマーとして使い、そのまま持ち出してしまったのだ。

霖之助は彼に意見を求めている。腿に触れる四角い感触が無ければどれ程良かったことか。

「遠距離の相手との通話や文書のやり取りが出来る。現し世の人々の便利道具の三種神器の一つとも言われる程の必需品です。」

「つ、つまり……外でも最先端ってことかい!？」

霖之助は緊張を表情に出しながら永一に問いかけた。

「そ、そりゃあもう。電池が残ってる《漏電しなかった》んですから……」

永一は優しい嘘を吐いた。霖之助は大いに喜びを表した。その様子を見れば見るほど彼は申し訳なくなった。

しかし、これで良かったのだ。ガラケーが幻想入りしたように、い

つの日か彼の手にスマートフォンが握られる時が来ることだろう。

オーバーテクノロジーは追々で良い。文明のネタバレほどつまらないものは無いのだから。

「折角の機会だから、その他にも道具を見て欲しいんだ。あそこに積んである『パーソナルコンピューター』なんだけど……」

それから霖之助による宝の山の御披露目大会が始まった。彼の外来品についての解釈は、いかにも幻想郷的で夢があり聴いている方も何となく楽しかった。

「それにしても、幻想郷では外来品は普及していないのに、よく名前が判りましたね。調べるのは苦労したんでしょう？」

「それがね、実はあまり苦労していないんだ。僕は道具をみれば、その『道具の名前と用途が判る』んだ。例えばさつき君が持ってきた灯油入りの『ポリタンク』。僕はそれを初めて見たけど、液体を運搬、保存するための道具だと判るんだ。」

永一はスマートフォンを見せなかった自分を心から称賛した。

「古道具屋の為に生まれてきたような能力ですね。」

「ただ、名前と用途が判っても使い方までは判らないんだ。能力の有無を問わず、君のように外の世界の知識を持った人の話は貴重なんだ。」

永一は相槌をしながら店を見回した。確かに使えるかはさておき、用途だけ見れば物凄く便利な道具が多い。

その時、ふと見つけたとある物が彼の興味を引いた。

「霖之助さん。あれって売り物ですか？」

「これかい？これは売り……非売品なんだけど。どうかしたのかい？」

霖之助は一瞬肯定仕掛けてから言葉を濁した。その時、永一は紫の言葉を理解した。

灯油の対価に店で一番価値がないと思えるものを持つてくること。言い換えれば現代の現し世基準で価値の無い物を選別しろという事で、裏を返せば店主に道具の価値を悟られるということである。

つまり今、永一は霖之助にとある道具への関心を悟られかけている

のである。

「いや、俺が産まれるずっと昔のものだったので気になって。携帯電話よりずっと前進の道具なんですよ。」

永一の言い分に霖之助は少し懐疑的な目をした。しかし、彼の言っていることは紛れもない事実である。

その時、店のドアが開いた。いつの間にか黄菜子が来る時間になっていたらしい。

ただ、予想に反して人影は二つ並んでいた。

「こんにちはー！猫の手です……永一？なんでここにいるの？」

「ポリタンクの配達だよ。んで、隣の妖怪さんは黄菜子の知り合い？」
「ここに向かう途中で会ったんだよ。」

華やかな着物の黄菜子とは対照的に灰色の頭巾を被った少女は少し驚いたようだった。

「む、人間に化けていたつもりだったが。流石は噂の猫の手の陰陽師って所か。」

少女は頭巾を脱ぐと、グレーの髪と一緒に丸く大きな耳が顔を出した。

「僕から紹介しよう。彼女はナズーリン。『商品の仕入れ』を手伝って貰おうと思って前もって呼んでいたんだ。」

「それにしても随分と面白い展開だね。私以外にも助っ人が二人、それも外来人なんてね。」

「いやいや、少し知識があるだけですよ。」

「そうじゃない。期待はしていないが足手まといにはならないだろうと踏んでの言葉だよ。君たちは精々私の手足になってくれればいい。」

霖之助は慌てて注意するも、ナズーリンの挑戦的な言葉は二人の闘争心を引き立てた。

——無縁塚

幻想郷の境界にして始まりと終わり土地。

鬱蒼とした森を越え、辿り着いた場所は永一にとっては紛れもなく

全ての始まりの土地であった。

しかし、あの時とは一変、浮遊霊の姿は無く、地を真っ赤に染めていた彼岸花は儂く萎れ、見とれるほど美しかった紫桜は葉の一枚すら付けていなかった。

その代わりに枯れた彼岸花の隙間から墓石代わりの石板が見えた。立ち並ぶ石板には名前の書かれた物は一つとしてない。縁の無い物が眠る墓が無縁塚なら、忘れ去られた屍が行き着く先が幻想郷の無縁塚なのである。

ただ、永一はこの無縁塚と霖之助の依頼に何の関連性があるのかわからなかった。

一行は台車を止めた。

「霖之助さん。俺らはここで何を……まさか、墓荒らしじゃないですよね？」

「まさか。いくら外来人が葬られているとは言えそんな事はしないよ。外の世界からやって来た君たちがまずここに辿り着いたように、外の世界の道具もここに流れ着くのさ。」

「つまり霖之助さんは拾い物を買っているんですね……」

「山菜だって野原から収穫するだろう？ 外来品だって同じさ。」

永一と霖之助が話している間、ナズーリンは胸元のペンダントを弄っていた。ペンダントを地面と垂直に吊るし何やらぶつぶつと呟いていた。不規則に揺れるペンダントを暫く見つめると、妙に長いダウジングロッドを突き立てた。

「さて、準備は完了した。私はペンデュラムに専念する。君たちはペンデュラムが指す方向を探してひたすらに道具を持ってきてくれればいい。」

その時、永一と黄菜子が案に噛みついた。

「こんなんじゃないやあ非効率だよ。当たる保証もない石ころの動きであたしたちを動かすだけなんて時間の無駄。依頼の時間報酬をネズミさんが払ってくれるなら別だけど。」

「俺も黄菜子に同意だな。現し世の言葉で言うとかウジングはあくまでも『科学的に証明されていない』しな。」

するとナズーリンは地面に刺したロッドを引き抜くと永一に近づいた。

「上着……いや、着物か。この周辺で一番価値のある物が入っているね？合っているなら是非とも拝見したいものだね。」

「なんだって!?永一君、外から持ってきた道具を持っているのかい!?!」
ダウジングは苦しくも痛いところを突いてきた。そこを霖之助の期待の眼差しが刺さる。確かにダウジングは科学的に証明できないが、迷信ではなかったのだ。

ただし、迷信には迷信。永一の眼はダウジングロッドの「流れ」を見逃さなかった。

「やっぱり、ダウジングは『科学的に証明されない』な。」

「おや、シラを切る気かな?」

「いや、一つ謝らなければいけないみたいだ。君のダウジングロッドは俺の霊力を絡んでしまうらしい。」

永一は自身の霊力でロッドに流れる霊力をかき混ぜてみた。ロッドの片方はそれに合わせてぐるぐると奇妙な挙動を見せた。

「俺の眼は『科学的に証明されない』ものまで見える。そのダウジングロッドは道具に憑く微小な霊力、今回の場合は外来人の霊力に反応しているんだろ?ご存知の通り俺らは外来人。多分その首飾り(ペンデュラム)も機能しないだろうよ。」

霖之助は納得しながらも心底残念そうだ。

その時、黄菜子が一つ提案した。

「なら一つ提案。ここはあたしと永一、霖之助お兄さんの二手に別れてどちらが多く外来品を集められるか競うつてのはいかがかな?これならネズミさんの邪魔にもならないし、ゲーム性があって面白いよ。」
「ふむ、面白そうではあるが……ただ競うだけではつまらないとは思わないか?」

「そうだなあ……じゃあ、あたしたちが負けたらあたしたちが集めた外来品を全てネズミさんにあげる!」

それを聞いた霖之助は仰天した顔で抵抗した。

「き、黄菜子ちゃん!それは困るよ!?!もし僕たちが勝ったら僕が君た

ちを呼んだ意味が無くなるんじゃないか!？」

「その場合はネズミさんの手伝いをしたって事になるね。当然霖之助さんからお金は貰えない。つまり、あたしたちは猫の手の信頼と時間を賭けるよ！その代わり、ネズミさんたちが負けたら……」

「霖之助さんの店にある商品を一つ、俺らにプレゼントしてもらおう。」
永一は黄菜子の言葉を遮って言った。ナズーリンは呆然として幾らか瞬きをした。

「……そんなのでいいのか？」

「勿論。ただし、値段は霖之助さんの言い値。霖之助さんは外来人が欲しがるような道具って事をお忘れなく。」

霖之助は少し苦い表情になった。彼にも本気になって貰わないとフェアじゃない。

ナズーリンは少し考える素振りを見せると直ぐに頷いた。

「ルールはどうする？」

「無いよ。何でもありじゃないと面白いでしょ？あつ、でも相手の収集物を盗むのは無しね。」

「面白い。では早速私の實力を行使させてもらおう。」

その時、彼女の肩に一匹のネズミが登ってきた。

「搜索命令。ターゲットは『宝』。管轄内の全ネズミに伝えなさい。」
すると、ネズミは彼女から飛び降りると森の奥へと走り去って行った。

「じゃああたしも。玄光！」

——我が君。お呼びでございますか？——

「無縁塚周辺に落ちている外来品を集めて。」

——人員は如何致しましょう？——

「今動けるありったけで。そうそう。『狩り』は厳禁ね。」

——承知致しました。——

玄光もまた、藪を越えて何処かへ消えた。

「さて、準備は済んだ事だし、宝探し対決、スタート！」

黄菜子の掛け声と共に二つの台車が別れて進んだ。名も無き墓標の並ぶ殺風景な場所には似付かない、少々熱の込められた宝探しが始

まった。

——永一&黄菜子グループ

無縁塚は一般的には森の中にぽっかりと空いた紫桜を中心とした空間を指すが、結界が綻ぶ部分を指すのならここだけに限る場所ではない。周辺に広がる森や近くにそびえる妖怪の山の一部までが外来品が落ちている範囲内となる。

永一には土地勘が無い上に、相手は外来品収集に慣れている為不利である。しかし、黄菜子の人脈改め「猫脈」と永一の知識は強力な武器である。

まだ空の台車を引きながら黄菜子は永一に問う。

「賭け金の条件の話なんだけどさ。何であたしを遮って言ったの？」

「猫の手は急な依頼に弱いって話したじゃん？その解決の糸口を香霖堂で見つけたんだ。」

「本当!?幻想郷で使える外来品って事でしょ!?携帯電話とか？」

「惜しい。携帯電話ほど最先端な道具じゃない。時代遅れだからこそ『最先端』になれる道具なのさ。」

その時、二人の行く先から一匹の猫が此方へやって来た。

「外来品をみつけたって……なるほど。ネズミが集まっていたから追い払ったらいっぱいあったと。」

「ナズーリンからは奪ってないから一応ルール違反ではないのか。ちよつとズルい気もするけど。」

「所詮は猫の前の鼠だったって事だね。更に二手に別れよう。永一は引き続きこの辺を探してて。あたしは猫の指揮を取りに行くね。」

黄菜子は猫の行く先へと急いだ。

——ナズーリン&霖之助グループ

ナズーリンは帰ってきたネズミに耳を傾けると苦虫を噛んだ表情になった。

「……やられた。」

「どうしたんだい？」

「部下のネズミたちが殆ど逃げてしまったらしい。なんでも猫がそこからじゅうで群れているらしい。土御門黄菜子、少し甘く見ていたな……」

「君が諦めたらまず負ける。僕は道具を判別できても探すのは人並みなんだ。」

「補助が無くなっただけさ。私はダウザー。宝探しの真髄はダウジングなのは霖之助も知っているだろう？」

ナズーリンは懐から乾燥した葉を取り出し火を点けた。

濃く立ち上る煙にペンデュラムをかざしながら彼女は言った。

「相手がどれだけガラクタを持ってこようと、たった一つの宝を見つければいいのだよ。窮鼠猫を噛む。霖之助、とっておきのお宝を見つけて出してやろう。」

——数時間後・香霖堂

日暮れ。美しい橙が秋の空を支配する頃、別れた二台の台車が合流した。

永一と黄菜子の猫脈を使った収集は極めて効果的で、台車には外来品が山のように乗っていた。

一方でナズーリンと霖之助の台車は軽かった。しかし、相手の台車を目の当たりにした今も変わらず、表情は自信で満ちていた。

「さて、集めた外来品のお披露目と行こうか。……それにしても、随分と集めたね……」

霖之助は永一と黄菜子の山盛りの台車を見るなりがっくりと肩を落とした。かなりの大漁だった為、全員で作業しても全て下ろすのは難儀した。

テレビ、冷蔵庫、洗濯機を初めとした古い大型家電からフロツピーディスクやカセットテープ等の小物周辺機器まで大小様々、どれも現し世ではなかなか見られないほど懐かしい道具が並んだ。

道具を並べ終える頃、永一と黄菜子は勝利を確信していた。しかし、ナズーリンが台車から下ろしたとある物によって戦況はひっくり返った。

「これは……！」

「これかい？『家庭用掃除機』だよ。箱から管が生えている物はよく見るんだけど、これは不思議な形だろう？こんな形は初めて見た。」

その怪奇なる円盤を見るなり永一の心拍数が跳ね上がった。何故なら、香霖堂に置いてある商品の何よりも最先端であるばかりか、現し世にある彼の実家にあるどんな家電よりも最先端だったからである。

「これだけじゃない。私がダウジングで見つけた時、その円盤は動いていたんだ。地を這う生き物のようにね。……傍らにいた霖之助は見逃したようだが、私は確信している。この円盤は現し世にある道具の中でも最先端さ。」

不運にまた不運、霖之助の携帯電話のように電池が残っていたのである。しかし円盤は携帯電話のように長時間使用を想定していない。つまり、霖之助が片落ち携帯電話に述べた説が正しく、円盤はどこかで稼働中に幻想入りしてしまったのである。

万事休すと思われたその時、ナズーリンはぽつりと一言呟いた。
「あくまでも仮説だがね」

そこで永一はピンと来た。現し世の正しい情報を知っているのは自分だけで、現し世に関する言及の信憑性が高いことを。

少し相手には申し訳ないが、ナズーリンを見返してやりたい手前、負ける事だけは絶対に避けたかった。

「現し世にはエアコンという道具があるのは知ってます？」

永一の問いに霖之助が答えた。

『『エア・コンディショナー』の事かい？空間の温度を司る道具だね。時折見つけるけど、それがどうかしたのかい？』

「部屋の温度を変える機能。暑い夏には冷風を送り、寒い冬には温風を送る。現し世の人間の生活必需品の一つと言えるでしょう。」

「素晴らしい道具だね……ただ今は『家庭用掃除機』の話だろうか？」

「もちろん掃除機の話も忘れてませんよ。今、俺がしたのは『幻想入りし得るエアコン』の話。しかし、現し世で使われているエアコンにはそれに加えて——」

「ま、まさか……!!」

『自動お掃除機能』という能力が備わっているのです!」

「「な、なんと!!」」

永一の言葉にその場にいる全員が驚いた。そして彼は心の中で「黄菜子、お前まで驚いてどうする」と突っ込みを入れた。

言うまでもないがエアコンの自動お掃除機能とはあくまでもフィルター掃除である。嘘は言っていないものの卑怯ではある。

「エアコンで掃除が出来るなら、この掃除機は一体何の為に作られたんだい?」

「霖之助さんの能力は『家庭用掃除機』として処理したんですね。実際、その用途で販売されました。しかし、客の反応は「便利」ではなく「かわいい」だった。掃除機はたちまち愛玩用ペットののような流行を広げ、名前をつける人が現れる程でした。」

「なるほど。つまり、この掃除機は流行とエアコンの登場によって『掃除機としての存在意義』が幻想の物となってしまったのか……ある意味、忘れ去られるよりも悲惨かも知れないね。」

結局、霖之助を上手いことはぐらかす事に成功し、圧倒的物量の差で猫の手は勝利を収めたのであった。

そして約束通りナズーリンの奢りで香霖堂の商品を買うことになった。

散らかった店内に転がるダイヤの原石。永一がそれを手に取って霖之助に見せる。

「キヤ———!!!」

店の奥から黄菜子の叫び声が聞こえた。永一は驚いて店の奥へ走った。何せ圧倒的な力の前にも動じない肝の持ち主である土御門黄菜子の叫び声である。尋常ではない。

「どうした!!」

「永一!これっ!これ買って貰おう!!絶対対これ!!」

どうやら歓喜の叫びのようで永一は安堵したが、同時に彼女の手に握られた物に腰を抜かせた。

それは一振りの刀。しかもかなりの曰く付きで、おぞましい程の霊

力量が刀に合わせて動く様が永一の眼には映っていた。

「馬鹿!!こんな物騒な物持つんじゃない!!」

「うわああああ!!黄菜子ちゃん!何やってるんだい!!」

黄菜子は抜刀すると刀身をくるくると踊らせるように振るとすぐに納刀した。

唾然とした永一と霖之助に対してナズーリンは盛大な拍手を送った。

「初めて持った筈なのにこの手に馴染む感覚……素晴らしい。あたしが握るに相応しい刀に違いない。東洋のエクスカリバー、『叢雲の剣』と名付けよう!」

その時、美しい西日が影を見せた。雨粒が屋根や葉を叩く。パラパラと静かな雨音が店内に響いた。

「霖之助さん。この刀はいくらなの?」

「……非売品だよ。」

「えー……」

黄菜子はごねているが、この剣に関して霖之助は折れるつもりは無いらしい。

それよりも永一は、黄菜子の「叢雲の剣」という単語に表情を歪めた霖之助の方が気になった。

彼の能力から察すると……流石に考え過ぎか。

「黄菜子、買って貰うものは決まってるだろ。これ下さい。」

「これかい。『トランシーバー』だね。離れた相手と交信する道具。本当は非売品にしたい所だが……ナズーリン君、50銭でどうかな?」

「むう……相変わらずだな。丁度50銭だ。」

ナズーリンは泣く泣く蝦蟇口から50銭分の硬貨を手渡した。

永一の見つけた道具、それはトランシーバーだった。携帯電話とは違って、電波は子機対子機の間でやり取りされる。電力を紫から手に入れ、周波数を合わせれば遠距離通信が実現するのだ。

外来技術の使用は便利な上に猫の手の宣伝にもなる。一石二鳥で正真正銘の幻想郷最先端技術である。

「さて、猫の手の二人には報酬を払わないとね。」

「基本料金＋時間料金が二刻（四時間）×二人。ざつと……84銭です。」

「84銭!?これは高すぎないかい!？」

「うちは短時間に回転率高く『猫の手を貸す』依頼なので、長時間となると相応の時間料金が発生します。それに二人分ですから。」

「もう少し安くならないかい?」

「勘定奉行、如何でしょうか?」

永一は黄菜子に問い掛けた。

「じゃあ、特別に大出血のおまけ!50銭にしてあげる!その代わりに……」

黄菜子は外来品の山からもう一つトランシーバーを掘り当てると天井に掲げた。

「これも付けて貰うね!」

霖之助は頭を抱えている。

「はあ……君たちには負けたよ。持っていくな。」

霖之助はナズーリンから受け取った小銭をそのまま永一に支払った。

「さて、私は報酬としてこの円盤を頂くとしよう。」

「今度は君か……掃除機数知れず見てきたが、この掃除機はあまり手放したくないんだけど。」

「ネズミさん、その言葉に二言は無いよね?」

その時、黄菜子が口を挟んだ。

「あ、ああ。嘘は言っていないがね……?」

「霖之助さん、報酬がそれだけで済むなら安上がりだよ。掃除機としても、ペットとしても中途半端だしね。」

「それもそうなのか……?なら構わないよ。」

「……!この泥棒猫め!!」

黄菜子はニヤリと悪い笑みを浮かべた。

報酬の支払いも終えて、後は帰るだけになった。薄暗い部屋の中で永一はあることを思い出した。

「あ、そういえば、紫さんから灯油代に何か持ってくるように言われた

んですけど。」

「む、覚えていたか。まったく、そういう抜け目がない所、君たちの家の前の住人を思い出すよ。」

「前の住人って確か占い師さんだったよね？」

黄菜子が話に食いついた。

前の住人、それは彼女の30年前の飼い主である。彼女は知らん振りしているが、彼の事はこの中の誰よりも知っている。

「そうそう。仕事にもお金にも抜け目のない。僕の数少ない友人だったんだよ。未知の金属を探し当てたり、マジックアイテムを作ったり……あの頃は楽しかったなあ。」

玄関から出た時、いつの間にか雨は止み空には星が光っていた。

「噂で聞く君たちのように彼は勇ましくはなかったけど、最後までいい人間だったよ。僕のエゴを押し付ける訳じゃないけど、君たちも彼みたくなって欲しいな。」

「勿論！じゃあ、その人が帰ってきてても恥ずかしくないように頑張らないとだね！」

永一は心が少し締め付けられる感覚を覚えた。黄菜子は今もなお「お父さん」の帰りを待ち続けているのだ。

霖之助の口振りだと、彼はもう……

「じゃあ霖之助さん、また依頼してね！今度こそあの刀が欲しいな。」
「……次は今日の教訓を生かすよ。ナズーリン君はまた近いうちに呼ぶかも知れない。そのときは宜しく頼むよ。みんな夜道には気を付けるんだよ。」

永一は改めて香霖堂を見た。記憶の底に眠っていた道具や見たこともないアンティークグッズまでバリエーション様々な道具があった。最初こそガラクタと一蹴していた道具たちだが、現し世で役目を終えた後にこうも大事にされるのなら本望だろう。

目の前の道具たちと同じように、幻想入りしてきた永一。自分が世界から忘れ去られて幻想入りしたのなら、と思うと、道具たちに少しだけ親近感が湧いた。

三人は香霖堂を後にした。帰り道、ナズーリンの視線が刺してくる

が、黄菜子は気にしていないようだった。

——魔法の森

「もうそろそろ大丈夫かな？」

「ん？何が？」

「うむ、大丈夫だろう。」

謎の問い掛けに応答したのはナズーリンだった。

「今日はいい仕事だったよ。なかなかの演技派だね。」

「あれー？これは皮肉の意味？」

「皮肉など無意味だ。何せお芝居は終わったんだから。」

ナズーリンが手を差し出すと黄菜子もそれに答えて握手をした。

「じゃあ約束通り30銭は家（猫の手）の報酬ね。20銭と円盤はナズーリンさんの物だよ。」

「ちよつと待ってくれ！話が全く見えないんだが……」

「依頼だよ。霖之助さんに話しかける前にナズーリンさんから依頼を受けていたの。『森近霖之助にちよつとした仕返しをしたい』つてね。」

ナズーリンの話によると、彼女が切羽詰まった状況である事を盾に、元々は彼女の持ち物である道具を法外にぼったくられたのだという。

「永一が香霖堂にいたのは誤算だったけど、それ以外は全て計画通りに進んだよ。」

「全てつてどこからが全てなんだ？」

「ナズーリンさんがあたしたちを煽る所からだよ。」

「本当は仮のガラクタを宝に仕立てて香霖堂のいい商品を貰って帰るつもりだったが、まさか真正正銘のお宝が見つかってしまうとはね。」

永一は萎れた雑草のようにへなへたと崩れた。

「じゃあ俺は、二人の手の平の上で踊らされてたつて事か……」

「とんでもない。円盤を見つけてしまった時は焦ったんだ。もし永一君のハツタリが無ければ計画は破綻していたかもしれないからね。」

高らかに笑う黄菜子とナズーリンに対し、

こうして、永一の疲れに疲れまくる一日はやっと幕を閉じたのである。

しかし、予想だにしない悲劇はこれだけでは終わらなかった。

それは翌日、紫に霖之助の灯油代の道具を渡しがてら無線機の充電をして貰おうと話をした時だった。

——紫の異界

「電力なら問題ないけど、出来ないわよ。通信。」

永一は紫の言葉を疑った。

「……なんですか？」

「この二つの無線機は周波数帯域が違うのよ。こっちがVHFでこちらはUHF。」

VHFとUHFとは、簡単に言うと無線機（トランシーバー）が受け取れる周波数の領域である。VHFは30MHz～300MHz、UHFは300MHz～3000MHzの周波数を受け取ることができる。

つまり、二つの無線機は発信出来ても受信出来ないのである。

「じゃ、じゃあ、俺は何のために苦労して無線機を手に入れたんです……？」

「何の為かしら？」

永一はどうとう崩れてしまった。死体のように転がる彼を見て、紫はニヤリと笑って手を差し伸べた。

「倒れるには早いでしょう。私が貴方の願いを叶えて差し上げましょう。」

永一は哀れな小動物の目で紫を見た。

「本当ですか？」

「ええ。貴方は私の弟子で幻想郷の住民でしょう？ 幻想郷らしく、『幻想的な』方法を取ればいいのです。」

「ま、まよいか!？」

「特別に遠距離通信の術を指導して差し上げましょう。」

永一は紫の手を握るとよろよろと立ち上がった。

「最初から紫さんに相談すれば良かったのか……」

「元気がないわね。」

「当たり前です。こんなに苦勞して答えが『幸せの青い鳥』だったんですから。」

「もし『幸せの青い鳥』なら鳥を見つけて目出度し目出度しね。」

その時、永一に悪寒が走った。

「な、何でもないです!! 夢、志半ばで果たせずです! 世の中厳しいなあ~~~~!!」

その時、超高速のレーザーが首筋を掠めて過ぎ去った。

「諦めたらそこで試合終了よ? それに、再び旅立てば青い鳥も手に入れがいがあるでしょう? レッスン(暇潰し) 外の指導には受講料(暇潰し) が付き物よ?」

無線機は箱になってしまったが、結果的に猫の手の遠距離通信計画は実現した。一人の犠牲により効率的に利益を生む事が叶ったのである。

効率化の決定打となった遠距離通信術は札一枚で可能なのだが、犠牲者は自身の無念を少しでも減らそうと、幾つか作った通信術の一部を無線機に施した。

しかしその計らいが当たり前で、「猫の手の兄妹は外来品を操る」と注目を浴び、一部では外来品ブームが巻き起こる事になった。

無線機の一つは依頼ポストに続き蕎麦屋の据え置きとなった為、無線機を見る為に興味本意で来店する客もいるのだとか。

一方で、外来品を多く取り扱う香霖堂にもブームの波は来るのだが、品物の非売品率の高さに客は呆れ、相変わらずの閑古鳥が鳴いていた。

「ね? 幸せの青い鳥探しは旅立つからこそ美味しいでしょう?」

「喰われた鳥が上手いこと転生しただけですよ。」

——T o b e c o n t i n u e d ……

第十四話 太刀、切れぬ縁（前編）

——土御門家

師走に入って猫の手の仕事は多忙を極めていた。仕事に追われながら東奔西走する永一と黄菜子。幸か不幸か書き入れ時に間に合ってしまった通信手段のお陰で、毎日の収入は素晴らしいものだった。しかし、里の人々の年越しの準備が順調に進む一方で、土御門家の年越し準備は絶望的だった。

鬼門は大掃除である。この家に住み始めて暫くの間、二人は大掃除に徹していた。しかし、その範囲は数日かけても家の一階部分で精一杯だった。真の地獄が潜んでいたのは二階部分であった。

そもそも二階はおろか、階段から大惨事である。

永一は二階の利用を諦めていたのだが、黄菜子は「大掃除で厄払いしないでどうするの!」と聞かなかつた。とは言いつつ、彼女も苦い表情を浮かべていた。何者にも屈しない土御門黄菜子が目の前のガラクタの山に屈しようとしているのである。

「ということ、私が呼ばれたのね。」

「本当に助かるよ、小鈴ちゃん。乗ってくれる人が君しか居なかつたんだ。」

土御門家の前には頭巾と割烹着を来た小鈴の姿があつた。家の前の住人が残した書物を上げる約束で手伝いを頼んだのである。

「二人のお願いなら私だけってことも無さそうだけど。『猫の手の兄妹』って最近話題でしょ。」

「里のみんなも師走の書き入れ時で人手が少ないんだよ。だからあつしたちも『猫の手を貸す』けど、そのせいで忙しいから家の事が出来ないんだよ……手を貸す猫借りること叶わず、だよ。だから一年を通して売上げが安定した貸し本屋の小鈴お姉ちゃんしかいなかったの。」

「現し世の人でも大掃除は大変なのね。でも、お姉ちゃんが来たからにはもう安心よ! 今日1日だけでどんな部屋でも綺麗にしてみせるわ!」

そう意気込みながら家に上がった小鈴だったが、

「これは……何……？…壁？」

「……階段です。」

思わず絶望を表情に現すのであった。

——数時間後……

三人は壁の階段の者の撤去を終え、二階の廊下部分の掃除に入っていた。

幻想郷では可能な限りリサイクルし、廃棄物を極限まで少なく抑えるのがマナーである。

現し世では粗大ゴミとして廃棄される二本足の机は分解して薪にし、穴の空いた鍋は後で金物屋へ持っていき修理するつもりである。

ただ家の収納は充実しており、空いた本棚に書物を入れたり、雑多に詰め込まれた押し入れも整頓すれば倍以上の物が仕舞えた。

そしてようやく、階段部分の掃除が完了した。

そして露になった二階。まず、部屋に辿り着くまでに小一時間はかかった。

永一はやつと辿り着いた部屋の襖に手を掛けた瞬間、絶望する気がしたので昼食の提案をした。

「ご馳走さま。悔しくなるぐらいにご飯美味しかったなあ。」

「永一の唯一の取り柄だからね！」

「唯一は余計！とはいえ、喜んで頂けたなら光栄だよ。」

「でも片付けが終わる未来が見えないわ……」

三人は苦い顔になった。

「奇遇だね、俺もだよ。」

「……とりあえず、満腹になったことだし、片付けの続きしよつか。」

三人は階段を上ると、先程辿り着いた部屋の襖を開いた。

その部屋を見たとき、三人は思わずぎよつとして身を引いた。

部屋の壁や床、置かれている道具には凄まじい枚数の札が無造作に貼られていたのだ。それも一枚一枚貼られたのではなく、ばら蒔かれたように滅茶苦茶で極めて不気味だった。

永一は恐る恐る一枚の札を拾い上げた。札には只の道具に貼り付けるには強力すぎる封印術が込められていた。

黄菜子は平常心を保っていたが、小鈴の方はそうもいかない様子であった。

「ラ……ラッキー！貴重なお札ゲットだぜ！」

小鈴はポカンとして永一を見た。場を和ませる為に発した言葉だったが、どうも狙った方向には行かないのである。

彼は部屋の四方に護符を施すと、床や壁に無駄にくっついている札を回収した。

散らかっていた札が彼の手中に集まる様は小鈴から見ると手品のようにもあり、彼の掌に厚い紙束が出来た時、彼女は盛大に拍手を送った。

しばらくして、雑巾を絞りながら小鈴が言った。

「この部屋……何というか、今まで掃除してきた所とは違った雰囲気を感じる……凄いい妖魔本が眠ってる予感がするわ！」

「それはどうだろう。壊滅的に散らかってるとはいえ元々一般家庭だしね。30年前のままだろうから珍しい本ならあるかもしれないよ。」

「小鈴ちゃんの予感。あながち間違ってるないかもよ？この部屋は前の家主が『曰く付きの道具』を保管していた部屋だからね。」

「えっ！そうなの！これは探しがいがあるわ！」

永一は啞然とした。

何を考えているのか、黄菜子が爆弾発言をしたのだ。彼女の言うことは本当だろう。現にこの部屋の所々に不穏な霊力が溜まっている様が永一の目に映っている。

妖魔本は本来危険な物だ。当然人間が持つていても良いことなど無いだろう。小鈴は友人だが、そんな代物を好き好んで集めている変り者だからこそ注視している。それなのに黄菜子は危険の元凶たる妖魔本の在処をばらしてしまったのだ。

それとも何か考えがあつての事なのか。

同時刻、黄菜子は脳内で策を進めていた。

妖魔本の在処を教えたのは当然だがミスではない。あえて事実を伝えることで部屋にある本に特別性を持たせ、普通の本を渡しやすく出来ると考えたのだ。

「……………これは何かしら？」

一方、小鈴は部屋の隅に転がっていた薄い板状の何かを引つ張り出してきた。それは白い布でぐるぐる巻きにされ、長さは二尺ほどあるのに想像以上に軽い。

「呪われた卒塔婆だったりして……………」

「違うと思うよ。確かに木製っぽいけどさ。」

永一は板を持ち上げたところ、板が全くしならない事に少し違和感を感じた。不思議ではあったが、その時は全く気にも止めなかった。

板を調べていると、裏側に札がくっついていて、取り残しの札かと思ひ、いつも通り術を無効化させ札を剥がした。

その時、部屋に冷たい風が吹いた。

「ううう寒い。」

黄菜子はそう言うと言身震いさせた。木枯らしが吹く時期である。部屋の窓から風が吹き込んだのかと思ひ窓を確認したが、窓は一寸も空いていなかった。

手元の板に目を向けると、あれだけ強固に巻かれていた布がヒラヒラと解けていた。

「え、永一さん。これってもしかして……………」

「刀……………だね……………」

板の正体は一振りの刀身だけの太刀だった。

驚きを隠せない黄菜子と小鈴だったが、永一は驚きを越えて絶句していた。

太刀は木の板と勘違いする程に軽く薄い。力を込めればすぐに折れてしまいそうなくらいだが実際は全くしならず、木とは対照的に金属のような冷たさもあった。

太刀は鏡のような光沢を放ち、刃紋は日の光に当たると真珠のように淡く輝いた。

「とりあえず物騒だし仕舞ったら？それに掃除もしなきゃだし。」

永一は黄菜子の指摘でようやく我に返った。元々巻かれていた布を巻こうと試みた。しかし一周巻く度に布は刃に当たり、一切の抵抗もなくはらはりと切り刻まれていった。

結局布は使い物にならなくなり、彼はこの部屋で回収した大量の札で刀を覆うと、更に壁に張り付けて封印（物理）した。

——数時間後

「今日はこんなもんだな。小鈴ちゃん、お疲れ様。」

長かった掃除も一区切り付けられるところまで進んだ。この一日で階段と二階の一部屋と廊下が半分が片付いた。地獄の廃棄物置き場から絶望の散らかり様まで昇格した。

「お疲れ様。さてさて小鈴お姉ちゃんはどんなこの本が欲しい？あたしのおすすめはこの辺だけ。」

黄菜子はそれとなく誘導していた書物を並べて見せた。古そうな書物ばかりだが、当然どれも妖魔本ではない。

「おおー、どれも気になってた書物ばかり。でもごめんね、もう心に決めた本があるの。」

「えっ!？」

小鈴は一巻の巻物を見せた。黄菜子はそれをまじまじと見た。

『私家版 百鬼夜行絵巻 最終章補遺』？百鬼夜行絵巻なら読んだことあるけど、そんなのあったかなあ？」

「無いからこそ欲しいのよ！この書物から出る痺れるような雰囲気……たまらないわ！」

黄菜子は永一に耳打ちで「何か見える？」と問う。

彼はじっくりと見てみたが、どう見ても古びた書物が古びた紐で結ばれているだけであった。

「うん。いいよ！掘り出し物だったらいいね！」

「やった！黄菜子ちゃんありがとう！早く帰って早速読まなきゃ！二人とも、お邪魔しました〜」

小鈴は居間から走り去って行った。

「もう暗くなるし、門まで送って行くこうか？」

永一が呼び止めようとした時には小鈴の姿は米粒に見えるほど遠かった。この速度なら日が沈むまでに里まで着けるだろう。それにしても、掃除の疲れが吹き飛ぶほど良い書物だったのだろうか。

——人間の里・門外の田園地帯

「はあ……はあ……流石に興奮し過ぎたわ……」

小鈴は休憩がてら田んぼ道の岩に座った。

「そうだ。折角だし、少しだけ貰った本を読んでみようかな。」

小鈴は紐を解こうと結び目をつまんだ。しかし、かなりキツく縛られているせいで全く解けない。強情な紐に対して彼女も熱が入る。力任せに引つ張った結果、遂に紐は途中で切れてしまった。

「あつ……巻物は傷つかなかつたし、まあいいか。……フフフ。それにしても、こんな掘り出し物が手に入るなんて……また掃除の手伝いを頼んでくれないかなあ。」

小鈴は少しだけ巻物を開いてみた。

解いた紐が何枚もの強力な護符を束ねて編んだ物だとは誰にも知るよしは無かったのだ。

——土御門家・台所

「!!!」

永一は不意に持っていた鍋を落としてしまった。居間で寝そべっていた黄菜子はその音に驚き、その状態のままで一瞬浮遊した。

「あーびっくりした。気をつけてよね。」

「あ……気を付けるよ。」

「……どうしたの?」

「いや、小鈴ちゃんが持っていた巻物が気になつてさ。」

『私家版 百鬼夜行絵巻 最終章補遺』の事? 永一が見ても無かったなら大丈夫じゃないの?」

「そうなんだけど、あんなに古い巻物なのに『何も無い』のは不自然だと思つたんだ。付喪神の成り損ねぐらいはいてもおかしくない。『札

よりも強力な術』で完全に無力化されてたから見えなかったんじゃないか……?」

永一はますます考え込んでしまった。

「百鬼夜行絵巻のオチは太陽が出て悪霊退散。その続きは只の蛇足よ。二次創作にここまで考え込むこともないよ。」

「そうなのか……?」

相槌を打ちながら永一はまな板にネギを並べ包丁を入れた。

永一の料理は上手い。しかし、料理器具の主役とも言える包丁は何もかもが最悪である。

その証拠に今切ろうとしたネギは皮一枚残して切り損ねている。

それもその筈、刃こぼれ、欠けは許容範囲だが、包丁自体が変形しているのだ。

彼が現し世で生活していたとき包丁は毎日研いでいたが、ここまで酷い状態の包丁は使える状態に戻すまで凄まじい時間がかかる。かといって新調したり研ぎ師に依頼するとかかなりの費用がかかる上に研ぎ終わるまでの数日間、料理に包丁を使えないのである。

よって泣く泣くこのなまくら包丁を使っているのである。

その時、彼の脳裏にある思惑が浮かんだ。彼は早速二階に向かうと刀の封印（物理）を解いた。

「……何やってるの?」

「料理。」

「じゃあこれは何?」

「包丁。」

永一は刀を構えると慎重にネギの腹に刃を当てた。日本刀は包丁と違って引き切らなければならぬ。少しコツがいるが、変形包丁との死闘に比べればおちやのこさいさいである。

案の定、凄まじい切れ味の前にネギは音もなく切断された。

「すげえ……」

「何が?」

「ネギが切れる。」

「それは良かったね。」

黄菜子はグルメだが、料理の過程には微塵も興味が無い。そこで、永一は閃いた。

——人間の里・鑄掛屋 早朝

鑄掛屋とは、鍋やヤカンなどの金物の修理をする店である。

技術発展による大量生産により現し世では衰退した職業だが、人間の里では豆腐屋や焼き芋屋に混ざって鑄掛屋も掛け声を上げて営業し里の生活に馴染んでいる。

資材の限られた幻想郷は言わばリサイクル社会である。紙くずや鉄くず、生ごみですらも再利用する社会が形成されている。現し世では数千円で買える包丁も、幻想郷では数倍以上の価格で取引されるが、その代わり道具の修理を受け持つ店も多いので、結果的には買っては捨てるを繰り返す現し世よりも安上がりで済むのである。

当然壊れた金物は修理してリサイクル可能だ。二人は先日の大掃除で見つけた使えそうな金物を持参して修理を依頼しに来たのである。

「おう、御兄妹。見たところ鑄掛けか？わざわぎ店まで来てくれたんだから新品以上にしてやらないとなー！」

鑄掛屋の主人は黄菜子が持つ鍋を見てそう思ったらしい。しかし、永一が太刀を見せると好奇心を表に出した。

「ほう。日本刀か。それにしても薄いな。振ったら折れてしまいそうだ。」

「前の住人が残していったみたいで。いい切れ味だから包丁にしてもらおうかと思って。」

幻想郷に鑄掛屋はいくつかあるが、この鑄掛屋は鍛冶と研ぎ師も担っているのである。店で売られている包丁は値段は高めだがその分以上に質が高く里ではかなり評判がいい。

「ほう。ただ、刀から包丁に打ち直すってなるとお高く付きますぜ。」
「ですよ。ただご主人、この刀持ってみてください。」

主人は永一から太刀を受け取ると目を丸くした。

「軽い……本当に金属なのか？」

「気を付けてください。切れ味も抜群なので。」
「ふむ……これは噂に聞く、『緋々色金』とやらかも知れん。過去に霧雨ノ所の誰かが見つけたという噂があったが、結局わからず仕舞いだ。」

そこで永一は交渉を切り出した。

「この金属、欲しいとは思いませんか？」

「……ほう、見えたぞ。太刀を打ち直す代金を余った端材で払おうって魂胆だな？」

「持ってきた金物の修理費用も付くと嬉しいなあ。」

黄菜子が追加で提案をした。抜け目の無い猫である。

「商売上手な奴らだ。乗った。ワシの名に懸けて最高の包丁を打ってやるぜ！さて、今日は随分と早いが店仕舞いとさせて貰うかな。」

そう言うとき主人はまだ早朝なのにも関わらず看板の暖簾をそそくさと仕舞い始めた。

主人は高齢であったが、表情は少年のようにわくわくしていた。しかしその目だけは、平常通りの鋭い職人の目なのだった。

——翌日 土御門家・早朝

二人がいざ仕事へ行くこうとしていた時、思わぬ来客が訪れた。

「すまない！ワシの手には及ばなかった……」

鑄掛屋の主人だった。何の事かと思ってみると、主人の手には美しい白鞘に入った例の太刀が握られていた。

「刀？手に及ばなかったってどういう……？」

「そのままの意味だ。火で焼いても、金槌で叩いても形が変わらない。それどころか傷の一つも付かない。悔しいが何も出来なかった。緋々色金の伝説は本当だったようだな……お詫びと言っちゃあ何だが白鞘に納めてきた。」

永一は主人から太刀を受け取った。鞘の出来は素晴らしく、太刀の形にびったりであった。

「それよりも聞いてくれよ！巷で噂の幽霊騒ぎの話なんだけだよ。昨日の夜、家で見ちまったんだよ！」

「幽霊騒ぎ？黄菜子、知ってるか？」

「知らない。最近では東部の仕事が多かったし。」

普段の黄菜子なら里の流行から些細なものまで集められるのだが、この時期は仲間の猫たちは多忙を極める為、情報の仕入れを頼まないのである。

「なんだ、知らないのか。ここ数日、この辺で美女の幽霊が出るって噂が流れてるんだよ。噂通りの美女だったぜ。それでいて武家の娘みたいな育ちの良い綺麗な格好なんだ。だけど気合いの入った襷掛けして妙に殺気立ってて怖かったなあ。」

「うちで祓いましょうか？出たのが昨日の夜なら霊力を追えるかもしれません。」

「おいおい止めてくれ。ワシはどうかその霊の無念を晴らせないかと思つてここに来たんだ。」

「無念を？」

「ああ。あの幽霊、殺気立ててウロウロしながらすすり泣いてやがるんだ。一晚中ずーつとだぞ？最初は怖かったが、それを見てたらどうも不憫でなあ。何とかならないか？」

永一はその依頼を受け難かった。本来、幽霊は漂っているだけの安全な存在だが精神的に干渉、つまり無念を晴らすようなことをするのは極めて危険なのである。

——それは彼が物心すら付かぬ子供の頃の話。同じく霊視が出来る両親から「幽霊には絶対話しかけちゃダメ」と繰り返し教わってきた。

小さな子供にとって親の教えは絶対である。彼はその教えを守り続けた。

しかし小学生の頃、近所の十字路で彼と同一年ぐらいの子供の霊が泣いていた。生きたい、生きたい、と繰り返して電柱に供えられた花や人形に崩れる姿に、幼心の彼は締め付けられるような心苦しくなった。

そして彼は遂に、今まで守ってきた禁を破り幽霊に話しかけてし

まった。

その時、あれだけ喚いていた子供はピタリと声を上げなくなった。そして同時に、首を轆轤のように曲げて彼の目を見ると目を見開き、笑いながらいい放った。

「待ってたよ。」

掠れた声、甲高い声、ドスの聞いた低い声。声は子供だけの声ではなかった。

思えばこの十字路はよく人が死ぬ場所だった。

.....

「要は幽霊の話聞けば良いって事よね？じゃあこの依頼書に名前と指定時間を——」

「申し訳ないのですが、この依頼は受け難いです。」

黄菜子は言葉の前に表情から異を発した。

「なんでよー！」

「未練が強くて成仏出来ない幽霊に無駄に高い靈感を持つてる俺が干渉したらどうなると思う？」

「対策しなきゃ取り憑かれると思うけど？」

「正解。しかも俺はそれを経験済みなんだ。靈感が高い人間は悪霊にとっては都合のいい受け皿なんだよ。どうなるか知っている以上、受けるのはなあ……」

「でも今は対策の術があるじゃん。あたしの予想だけど、永一に取り憑いた霊は地縛してる集合霊じゃない？強い靈感を察知して乗っ取るうなんて普通の霊が出来ることじゃないよ。執念が強すぎるもん。で、取り憑かれた永一は無事生還してるから、現し世のお祓いで落とせる程度だったんでしょ？」

永一は黄菜子の「超能力者か」と言いたくなるほどの的中の前に言葉を失った。

彼にしたら不安要素しかないが、結局依頼は受けることとなった。

「では、お時間はいつからにしますか？午前中なら空いておりますが。」

「それなんだが、今すぐって訳には行かないか？」

「？」

鑄掛屋前、まだ早朝なのにも関わらず鑄掛屋にちよつとした人だけりが出来ていた。

注目の的は鑄掛屋の前。例の幽霊が店頭に並ぶ包丁の見本に釘付けになっていた。

二人はギャラリーを解散させると、一旦その幽霊を数枚の札に封じ込めた。

二人は札を持ち帰ると、掃除を終えたての二階の納戸へ持つていった。この部屋は永一が護符を施している為、対幽霊には丁度良い場所だろう。

「……なあ黄菜子、本当に幽霊と対話しなきゃダメ？」

「ダメ。依頼なんだから。それに封じ込めたままじゃ可哀想だよ。」

永一は渋々札の術を解いた。すると、札から霊力が煙のように漂い始めた。煙は一点に集中し人の形を作った。長い黒髪を後ろで縛り、古風な着物に襷掛け。そして端正な顔立ち、噂の幽霊と見て間違えない。

永一がまごまごしていると、幽霊は突然立ちあがり部屋をふらふらと徘徊し始めた。

「何処……何処へ行ってしまったのです……」

永一は満を持して幽霊に声を掛けてみた。

「幽霊さん、一体何を探しているのですか？」

幽霊は彼の声にピクリとも反応せず、そのまま徘徊を続けた。

「見た目ははつきりしてるけど自我が無いな……」

「霊力が小さいからじゃない？思いきって永一の霊力を分けてあげれば？」

「流石に危険すぎる。自我を保つ霊力を見た目に使ってるだけで弱くは無いんだぞ。しかも完璧に人の形をしてる時点で幽霊の中でもとてつもなく強い部類だし……」

その時、背後で鈍い音がした。振り向くと、幽霊が部屋に置いてあった太刀を踏んで思い切り転び柵にめり込んでいた。

自我は無くとも痛みはあるらしく、ぶつぶつと何かを呟きながら涙目でもがく様はこの上なく間抜けであった。

「危険そうに見える?」

「……ちよつとやってみる。」

永一は幽霊の背中への辺りに手をかざすと自らの霊力を流した。幽体を循環する霊力は段々と勢いを増し、しばらくすると幽体の霊力流は生きた人間と同じように流れるようになった。

血色が悪いのは幽霊らしいが、半透明だった全身がガツツリと肉眼で捉えられるようになっていく様は平常ではあり得ない。

「終わった?」

「一応……だけど不思議だ。霊体だけなのに霊力が全く分散しない。生き物が呼吸をするように、幽霊もその辺の霊力を吸収、放射を繰り返しているんだ。」

「んー?それってもしかして、この幽霊には——」

その時、幽霊は目を見開き急に立ち上がった。表情から危険を察した永一は驚いて身構えたが、幽霊は何か気付いたのか辺りを見回した。すると、今度は真つ青な顔になってオロオロしながら叫んだ。

「無い……無い、無い!!某の刀が無い!!」

静かだった部屋がどつと騒がしくなった。

それが、真面目で少しおつちよちよいな亡霊剣士との出会いだった。

——T o b e c o n t i n u e d ……